

富 沢 I 遺 跡  
発 掘 調 査 報 告 書

1996

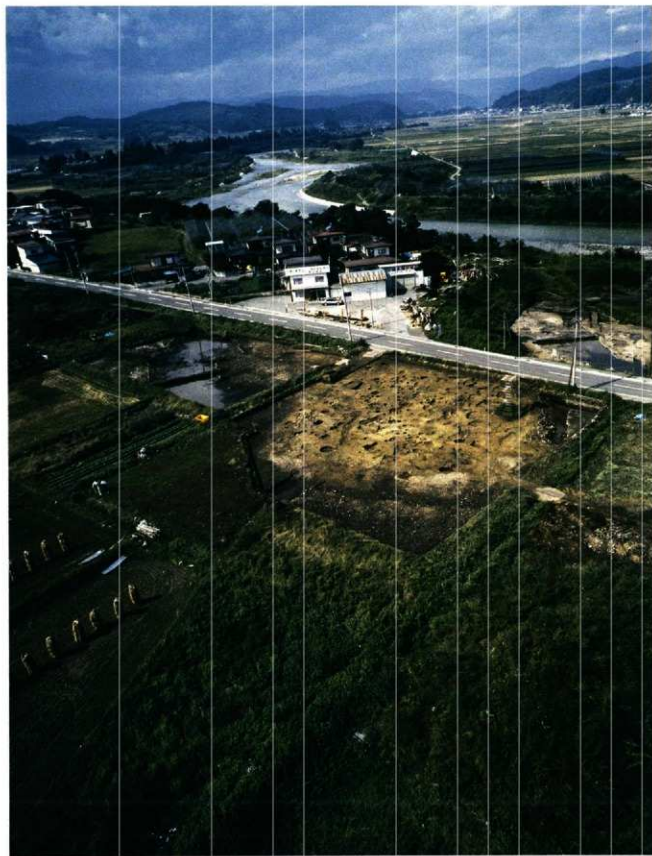
財団法人 山形県埋蔵文化財センター

とみ ざわ  
富 沢 I 遺 跡  
発掘調査報告書

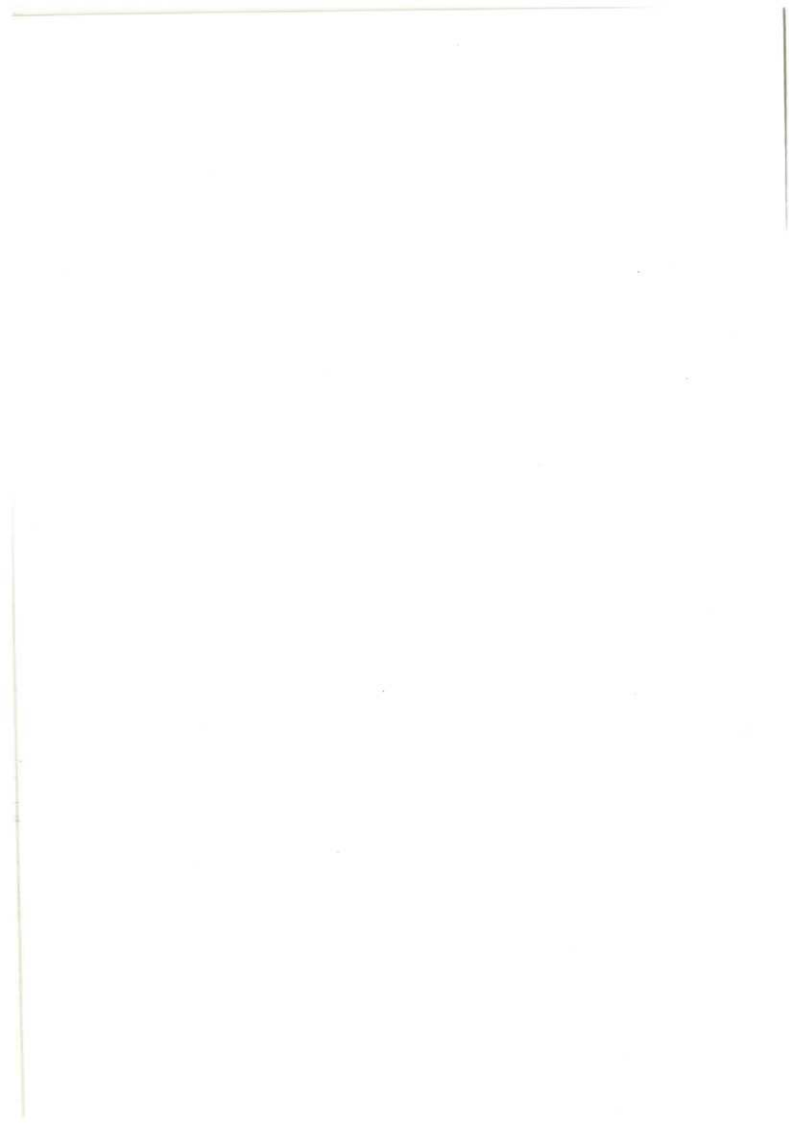
平成8年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



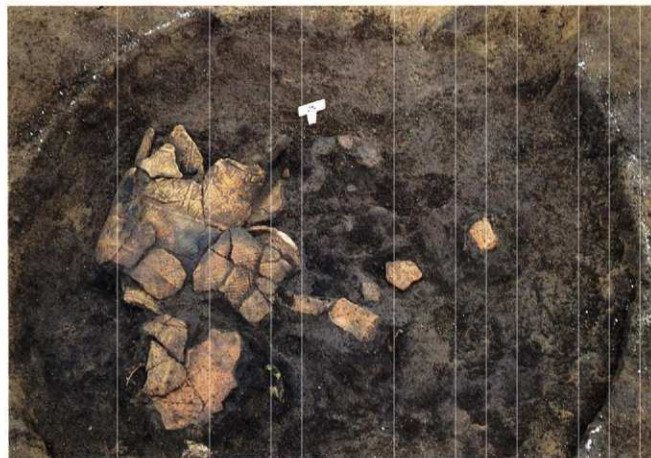


富沢1遺跡全景（東から）





SG2河川跡中央畦土層断面（南東から）



SK25土壠土器出土状況（北西から）



## 序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが平成5年度と同6年度に発掘調査を実施した、富沢Ⅰ遺跡の調査成果をまとめたものです。

富沢Ⅰ遺跡は、山形県のほぼ中央部に位置する寒河江市にあります。寒河江市は北に葉山、北西に月山を望み、南の最上川と寒河江川との間に平野が開けた緑豊かな街です。初夏には桜桃がたわわにみのり、「さくらんぼの里」として全国にその名を知られています。

この度一般国道112号白岩バイパス改築事業に伴い、工事に先立って富沢Ⅰ遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、縄文時代中期から後期の集落跡と、縄文時代から室町時代にかけての土器や石器などが発見されました。道路工事に伴う調査のため発掘面積は多くありませんが、縄文時代の集落を理解するうえでよい資料を得ることができました。

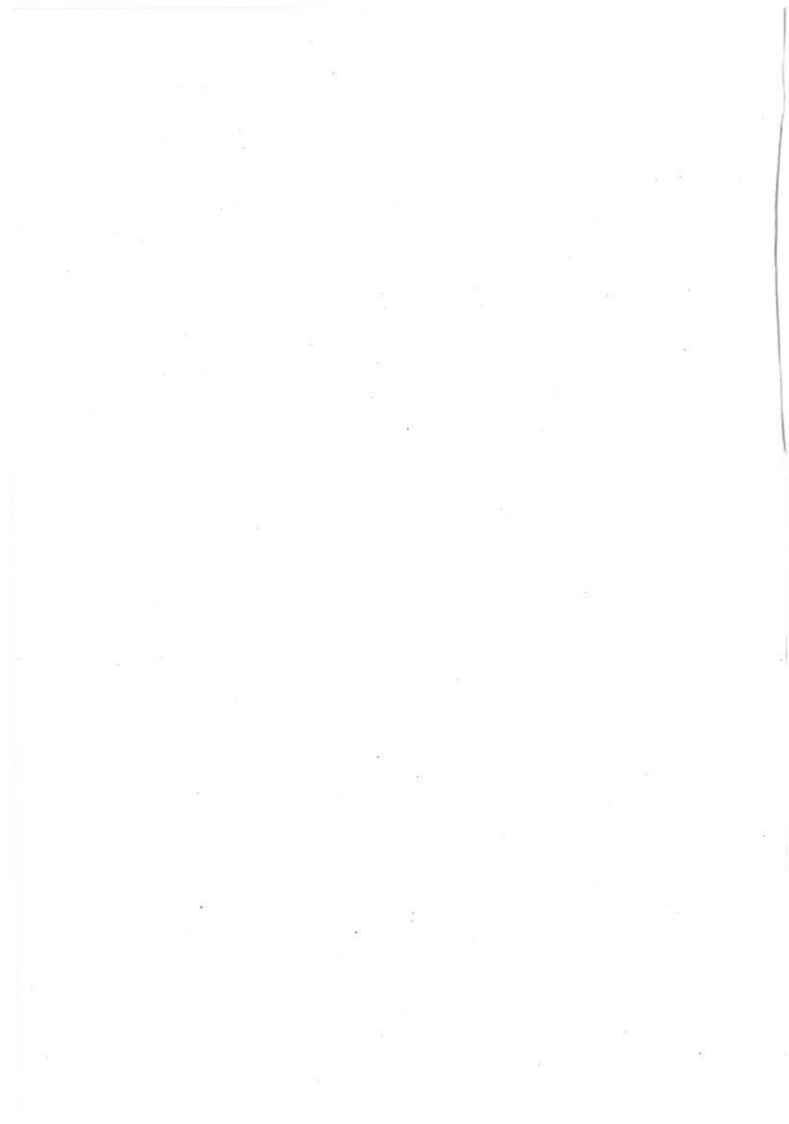
近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。これらの埋蔵文化財は祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産のといえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成8年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター  
理事長 木 場 清 耕





## 例 言

- 1 本書は建設省東北地方建設局国道112号白岩バイパス改築工事に係る「富沢Ⅰ遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査は建設省東北地方建設局山形工事事務所の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記のとおりである。

遺跡名	富沢Ⅰ遺跡 (CSGTZⅠ)	遺跡番号	昭和62年度登録
所在地	山形県寒河江市大字清助新田字富沢107-1他		
調査期間	発掘調査	平成5年11月1日～平成7年3月31日	
	第1次現地調査	平成5年11月24日～平成5年12月10日	
	第2次現地調査	平成6年6月22日～平成6年10月7日	
	資料整理	平成6年12月1日～平成8年3月31日	
調査主体	財団法人山形県埋蔵文化財センター		
発掘調査・資料整理担当者			

調査研究課長	佐々木洋治 (第1・2次調査)	*現調査第一課長
主任調査研究員	佐藤 庄一 (第1・2次調査)	*現調査第二課長
調査研究員	氏家 信行 (第1次調査)	
	伊藤 邦弘 (第1次調査)	
	黒坂 雅人 (第2次調査)	

- 4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、建設省東北地方建設局山形工事事務所、寒河江市教育委員会、寒河江市西部地区公民館等関係機関の協力を得た。
- 5 本書の作成・執筆は、佐藤庄一、黒坂雅人が担当した。編集は尾形典典、須賀井新人、水戸弘美、真壁 建が担当し、全体について佐々木洋治が監修した。
- 6 委託業務は下記のとおりである。  
遺物実測の一部については、株式会社シン技術コンサルに委託した。
- 7 出土遺物、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

## 凡 例

- 1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。  
SG…河川跡    SK…土壌    SX…性格不明遺構    EP…柱穴  
RP…一括土器    RQ…石器    S…礫
- 2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。
- 3 報告書執筆の基準は下記のとおりである。
  - (1) 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
  - (2) グリッドの南北軸は、N-34° 50'-Wを測る。
  - (3) 遺構実測図は1/40・1/200縮図で採録し、各挿図毎にスケールを付した。
  - (4) 遺構観察表中の( )内の数値は、検出部分の計測値を示している。
  - (5) 遺構実測図中の▲印は縄文土器、●印は石器の出土場所を示している。
  - (6) 遺物実測図・拓影図は1/2・1/3で採録し、各々スケールを付した。
  - (7) 土器拓影図で、外面部分は左側、内面部分は右側に表示している。
  - (8) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とも共通のものとした。ただし、石器図版については別途番号を付しているものもある。
  - (9) 遺物観察表中の( )内の数値は、図上復元による推定値、または残存値を示している。また、出土地点欄の層位で、Fは遺構覆土内出土、ローマ数字(I~V)は遺跡を覆う土層(基準層序)を示している。
- 00 SG 2 河川跡の遺物は、覆土が多岐にわたるため、便宜上大まかに上からF 1~4として取り上げている。
- 01 遺構覆土の色調の記載については、1987年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色紙」に拠った。

# 目次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 第1次発掘調査の経過	1
3 第2次発掘調査の経過	3
II 遺跡の立地と環境	
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	5
III 遺構と遺物の分布	
1 A区	6
2 B区	7
3 C区	8
IV 検出遺構	
1 A区の遺構	9
2 C区の遺構	13
3 B区の遺構	14
V 出土遺物	
1 縄文土器	28
2 縄文土器の底部	47
3 土製品・石製品	54
4 石器	56
5 弥生時代以降の遺物	89
VI 調査のまとめ	
1 縄文土器群について	94
2 石器について	95
3 遺構について	96
参考文献	97
遺跡抄録	98

# 表

表1 土壌等観察表	27
表2 縄文土器観察表	32
表3 縄文土器底部観察表	53
表4 土製品・石製品観察表	54
表5 石鏃属性表	67
表6 石錐属性表	68
表7 尖頭器属性表	69
表8 石匙属性表	69
表9 石笥属性表	70
表10 搔器属性表	71
表11 削器属性表	71
表12 ビース・エスキーユ計測表	71
表13 磨製石斧計測表	71
表14 母岩1・接合剥片属性表	78
表15 磨石計測表	83
表16 凹石計測表	83
表17 須恵器等観察表	90

## 挿 図

第1図	遺跡位置図	2
第2図	第1次調査概要図	4
第3図	第2次調査概要図	4
第4図	A区遺構配置図	6
第5図	B区遺構配置図	7
第6図	C区遺構配置図	8
第7図	A区旧地形復元図	10
第8図	SG 1 河川跡断面図	11
第9図	SG 2 河川跡SX 4 断面図	15
第10図	土壌等(1)	18
第11図	土壌等(2)	19
第12図	土壌等(3)	24
第13図	土壌等(4)	25
第14図	土壌等(5)	26
第15図	縄文土器(1)	33
第16図	縄文土器(2)	34
第17図	縄文土器(3)	35
第18図	縄文土器(4)	36
第19図	縄文土器(5)	37
第20図	縄文土器(6)	38
第21図	縄文土器(7)	39
第22図	縄文土器(8)	40
第23図	縄文土器(9)	41
第24図	縄文土器(10)	42
第25図	縄文土器(11)	43
第26図	縄文土器底部(1)	49
第27図	縄文土器底部(2)	50
第28図	縄文土器底部(3)	51
第29図	縄文土器底部(4)・網代痕模式図	52
第30図	土製品・石製品	55
第31図	石鏃・尖頭器実測図	62
第32図	尖頭器・石鏃・石匙実測図	63
第33図	石筥実測図	64
第34図	搔器・削器実測図	65
第35図	削器・加工痕ある剥片・磨製石斧実測図	66
第36図	石鏃模式図	67
第37図	尖頭器模式図	69
第38図	石匙模式図	69
第39図	石筥模式図	70
第40図	母岩1接合剥片実測図(1)	74
第41図	母岩1接合剥片実測図(2)	75
第42図	母岩1接合剥片・石核実測図	76
第43図	母岩1実測図	77
第44図	剥片模式図	78
第45図	母岩2・母岩3実測図	79
第46図	母岩4実測図	80
第47図	母岩5実測図	81
第48図	磨石・凹石実測図(1)	84
第49図	磨石・凹石実測図(2)	85
第50図	磨石・凹石・石棒実測図	86
第51図	磨石・凹石・石皿実測図	87
第52図	石皿実測図	88
第53図	弥生時代以降の遺物(1)	91
第54図	弥生時代以降の遺物(2)	92
第55図	弥生時代以降の遺物(3)	93
付図1	A区遺物分布図	
付図2	B区遺構配置図	
付図3	C区遺物分布図	

## 図 版

- |        |   |      |                           |
|--------|---|------|---------------------------|
| 巻頭図版 1 | 富沢 I 遺跡全景 (空中写真)  | 図版19 | 縄文土器(1)                   |
| 巻頭図版 2 | S G 2 河川跡中央畦土層断面<br>S K 25土層断面出土状況  | 図版20 | 縄文土器(2)                   |
| 図版 1   | 遺跡跡景 調査区全景  | 図版21 | 縄文土器(3)                   |
| 図版 2   | A区調査前状況 A区完掘状況  | 図版22 | 縄文土器(4) 縄文土器(5)           |
| 図版 3   | C区調査風景 C区完掘状況   | 図版23 | 縄文土器(6) 縄文土器(7)           |
| 図版 4   | A区調査前状況 A区完掘状況  | 図版24 | 縄文土器(8) 縄文土器(9)           |
| 図版 5   | A・B区作業状況 S G 1 作業<br>状況 S G 1 須恵器出土状況<br>S G 1 中世陶器出土状況<br>S G 1 完掘状況   | 図版25 | 縄文土器(10) 縄文土器(11)         |
| 図版 6   | S G 1 中央畦土層断面<br>S G 1 北畦土層断面<br>S G 1 南畦土層断面   | 図版26 | 縄文土器(12) 縄文土器(13)         |
| 図版 7   | C区調査前状況<br>C区遺構検出状況   | 図版27 | 縄文土器(14) 縄文土器(15)         |
| 図版 8   | C区完掘状況<br>S K 7 土層断面<br>S G 2 R P 1 出土状況<br>S G 2 R P 4 出土状況<br>S G 2 R P 2 出土状況                                  | 図版28 | 縄文土器(16) 縄文土器(17)         |
| 図版 9   | S G 2 中央畦土層断面<br>S G 2 中央畦北端部土層断面<br>S X 4 トレンチ土層断面   | 図版29 | 縄文土器(18) 縄文土器(19)         |
| 図版10   | B区完掘状況  | 図版30 | 縄文土器底部(1) 縄文土器底<br>部(2)   |
| 図版11   | B区遺構検出状況<br>B区調査風景  | 図版31 | 縄文土器底部(3) 縄文土器底<br>部(4)   |
| 図版12   | B区西部遺構完掘状況 S K 21<br>土層断面 S K 22完掘状況<br>S K 23完掘状況 S X 43土層断<br>面   | 図版32 | 縄文土器底部(5) 縄文土器底<br>部(6)   |
| 図版13   | S K 58完掘状況 S K 59完掘状<br>況   | 図版33 | 土製品 石製品                   |
| 図版14   | S K 25検出状況 S K 25完掘状<br>況 S K 27完掘状況 S K 28<br>完掘状況 S K 37完掘状況<br>S K 48縄文土器出土状況 S K<br>50縄文土器出土状況 S K 52完<br>掘状況 | 図版34 | 石鏃・尖頭器                    |
| 図版15   | B区南東部遺構完掘状況 S K<br>29完掘状況 S K 30完掘状況<br>S K 32縄文土器出土状況 S K<br>34完掘状況  | 図版35 | 石鏃(1)                     |
| 図版16   | E U 77土層断面 S K 57完掘状<br>況 S K 60 R Q 6 出土状況<br>S K 66土層断面 S K 66完掘状<br>況  | 図版36 | 石鏃(2)                     |
| 図版17   | B区北東部完掘状況 S K 68縄<br>文土器出土状況 S K 70完掘状<br>況 S K 71完掘状況 S K 78<br>完掘状況   | 図版37 | 石 匙                       |
| 図版18   | S K 75完掘状況 S X 12土層断<br>面   | 図版38 | 石筥(1)                     |
|        |   | 図版39 | 石筥(2)                     |
|        |   | 図版40 | 石筥(3)                     |
|        |   | 図版41 | 播 器                       |
|        |   | 図版42 | 削器(1)                     |
|        |   | 図版43 | 削器(2)                     |
|        |   | 図版44 | ピエス・エスキーユ、加工痕ある<br>剥片     |
|        |   | 図版45 | 石核                        |
|        |   | 図版46 | 磨製石斧                      |
|        |   | 図版47 | 磨石・凹石(1)                  |
|        |   | 図版48 | 磨石・凹石(2)                  |
|        |   | 図版49 | 磨石・凹石(3)                  |
|        |   | 図版50 | 磨石・石棒                     |
|        |   | 図版51 | 石皿(1)                     |
|        |   | 図版52 | 石皿(2)                     |
|        |   | 図版53 | 石皿(3)                     |
|        |   | 図版54 | 石皿(4)                     |
|        |   | 図版55 | 原 石                       |
|        |   | 図版56 | 母岩 1 接合剥片(1)              |
|        |   | 図版57 | 母岩 1 接合剥片(2)              |
|        |   | 図版58 | 母岩 1 接合剥片(3)              |
|        |   | 図版59 | 母岩 1 石核                   |
|        |   | 図版60 | 母岩 1 接合状況                 |
|        |   | 図版61 | 弥生土器・土師器・須恵器(1)<br>須恵器(2) |
|        |   | 図版62 | 須恵器(3) 近世陶磁器              |
|        |   | 図版63 | 中世陶器(1)                   |
|        |   | 図版64 | 中世陶器(2)                   |



## I 調査の経緯

### 1 調査に至る経過

富沢Ⅰ遺跡は、山形県教育委員会が昭和62年度に分布調査を行って新たに登録された遺跡である。寒河江市の富沢地内からは本遺跡の100m東にもう1ヶ所遺跡が発見されたため、西側からそれぞれ「富沢Ⅰ遺跡」、「富沢Ⅱ遺跡」と名付けている。この時は、遺跡の概要として、旧国道の両側の畑地に石器が多数、土器片が若干散布すると報告されている(文献1)。

平成2年度に国道112号白岩バイパス改築工事が計画され、富沢Ⅰ遺跡が工事に含まれることとなったため、それに先立ち同年10月と12月に遺跡の内容把握と開発計画の調整を図る目的で試掘調査を行った結果、縄文時代と平安時代の複合遺跡であることが明らかになった(文献2)。縄文時代のものは、後期の土器・石器と土壌等が検出されている。なお、遺跡の北東部は以前のほ場整備により地山まで攪乱を受けていることが判明した。

その後この調査内容をもとに、山形県教育委員会が建設省東北地方建設局や関係機関と遺跡の保存について協議を重ねた結果、白岩バイパス改築工事に遺跡がかかる場所について、財団法人山形県埋蔵文化財センターが建設省東北地方建設局山形工事事務所から委託を受け、平成5年度から2ヶ年に分けて発掘調査を実施することになったものである。発掘調査の地区は、便宜上南からA区、B区、C区の三つに分けて行った。

### 2 第1次発掘調査の経過(第2図、図版2・3)

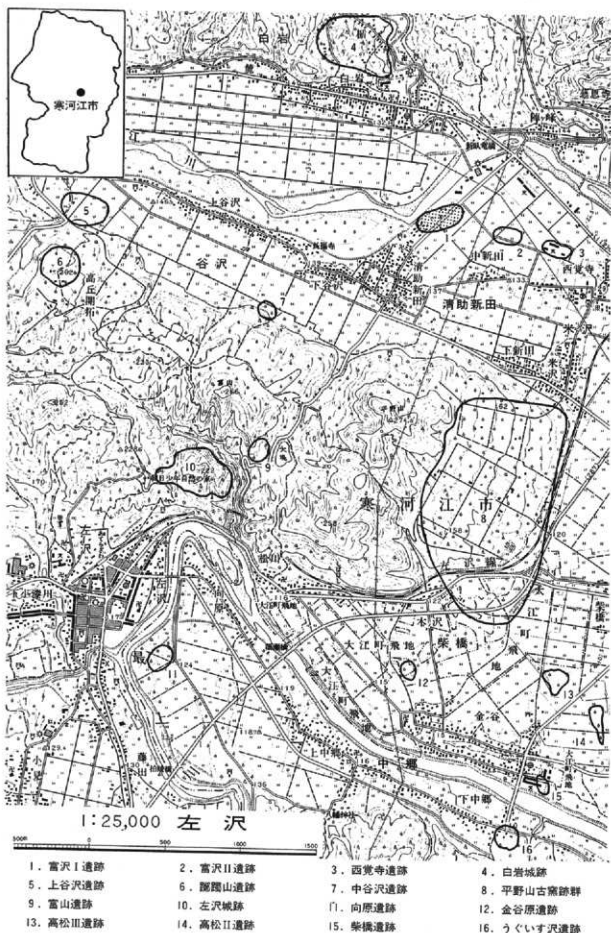
第1次発掘調査は、A区とC区について平成5年11月24日から12月10日までの延べ17日間実施した。なお、B区については発掘調査のための環境整備が整わないことから、同じ時期に山形県教育委員会が補足的な分布調査を行っている。

第1次調査は、平成6年度の面的な発掘調査に備えて、遺跡のより詳細な内容を知ることが目的として実施した。A区とC区について、幅1.8mのトレンチ(試掘溝)を12本設定して発掘調査を行っている。発掘面積は、A区が280㎡、C区が320㎡の計600㎡で、調査全体面積3,500㎡の約6分の1にあたる。

トレンチの表土の除去は重機械を用い、その後手掘りで遺構、遺物の検出に努めた。第1次調査では、遺構の確認に重点を置いたため、原則として遺構の掘り下げは行わなかったが、第2次調査に向けて部分的に深く掘り下げた箇所もある。

調査の結果、A区とC区の両区から幅が約9～15mで、深さが最深度で約1mを測る旧河川跡が3条検出された。これらの河川跡は、A区とC区のほぼ中央を流れており、覆土内から縄文土器や石器が多量に出土することが判明した。遺物は、縄文時代のほかに平安時代の土器も出土する。河川跡の発掘調査は水が湧き出ることもあり、平地の調査とは別に調査方法や工程を検討する必要があるため、第2次調査に向けての貴重なデータを得たことになる。発掘調査の最終日近くに調査説明会を行い、その後埋め戻しを実施した。





第1図 遺跡位置図

### 3 第2次発掘調査の経過（第3図、図版4・7）

富沢1遺跡の範囲は、これまでの踏査による成果から、東西約200m、南北約130mと推定されるが、発掘調査区域は国道112号白岩バイパス改築工事にかかる部分に限定している。白岩バイパス道路は、遺跡のほぼ中央を東西に横切ることになる。

平成6年度の第2次発掘調査は、平成6年6月22日から10月7日まで実施した。遺跡の内容は第1次発掘調査によって概要が把握されているため、工事にかかる遺跡の範囲を確定したのち6月28日からすぐに重機械を用いて調査区内の表土を取り除く作業を始めた。重機械による表土除去作業は、7月4日までの計5日間を要している。これと並行して、遺構や遺物の位置を記録しやすくするため、第1次発掘調査の区割りをもとに2m四方を単位とするグリッドと呼ばれる方眼区画を設定した。

調査は、ほぼA区→C区→B区の順に進めているが、粗く表土を剥いだだけでは、河川跡や土壌等の遺構はわからないので、土の状態を確認しながら、ジョレンで少しずつ全体の面を削り遺構の検出を行った。この段階で、幅10mを越す旧河川跡（SG1・SG2）や縄文時代の土壌・性格不明の落ち込み遺構等が次々と検出されている。確認された遺構は、登録番号を付け、移植罫や竹罫等を用いて注意深く掘り下げていった。確認された遺構は、登録番号を付け、移植罫や竹罫等を用いて注意深く掘り下げている。

A区はSG1旧河川跡を中心とする調査区で、7月1日から精査を始め、8月4日まで河川跡の覆土の掘り下げを終了している。旧河川跡は掘っていくうちに水が湧いてくるため、排水作業に苦勞している。ただし、平成6年度は例年になく雨の少ない猛暑だったため、調査には逆に幸いた面もあった。

C区はSG2旧河川跡を中心とする調査区で、8月5日から面整理を始め、河川跡の覆土の掘り下げは調査終了近くの10月3日までを要している。

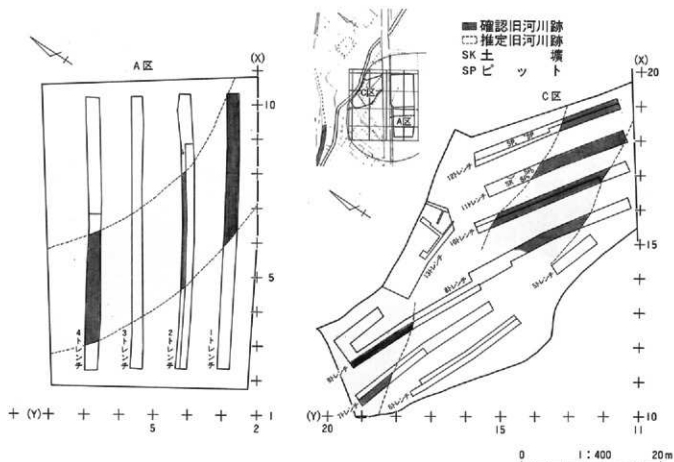
B区の遺構検出の作業は8月22日から始め、土壌等の覆土の掘り下げに9月26日までを要している。B区は当初、桜桃の果樹園地であったことからが地層攪乱を受けていることが予想され、遺構や遺物はあまり見込めない調査区と考えられていた。しかし調査の過程では、土壌・性格不明の落ち込み遺構等がよく保存されていることが判明した。

調査の後半は、地層を観察しながら遺構の断面図や平面図を書いたり、写真撮影をして記録に残す作業を行っている。とくに重要な遺物は、1点毎に登録しながら取り上げた。

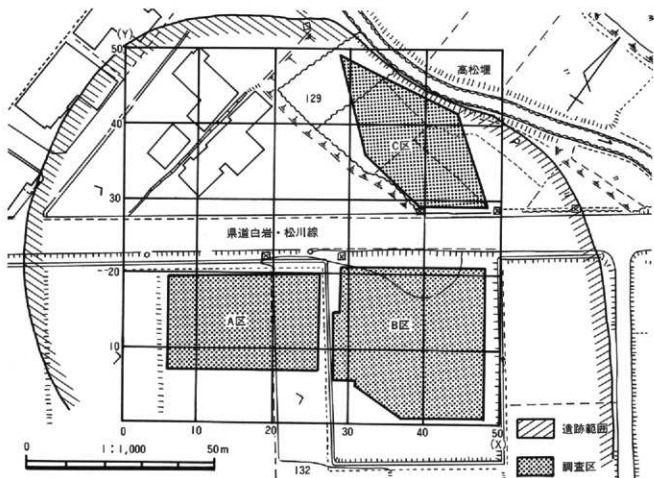
発掘調査の終了近くの10月4日に、調査の成果を地元の方々や関係者等に知っていただくための調査説明会を遺跡現地で行い、多くの参加者を得た。また、10月6日には遺跡全体の写真保存のための航空写真撮影を実施している。現地の発掘調査は10月7日に終了し同日に器材撤収を行った。

その後平成6年12月までは、埋蔵文化財センターで、図面や写真等の記録整理と遺物の洗浄・注記等の基礎整理を行い、平成7年1月から本格的な整理作業に入った。平成7年度は、山形県埋蔵文化財センターの各現地調査が終了した平成7年12月から挿図、図版の版組、原稿執筆等を始め、今回の報告書作成に至ったものである。

I 調査の経緯



第2図 第1次調査概要図(平成5年度)



第3図 第2次調査概要図(平成6年度)

## II 遺跡の立地と環境

### 1 地理的環境 (第1図)

富沢I遺跡は、山形県寒河江市大字清助新田字富沢に所在する。寒河江市街地の北西約4.5kmにあり、最上川の支流である寒河江川の右岸に立地する。

山形県のほぼ中央に位置し、村山から国道112号線を通じて庄内地方への玄関口にあたる寒河江市は、東に奥羽山脈、西に月山、朝日の連峰を望み、北に葉山を擁して、村山盆地の一角を形成する。市の南東部を南から北に最上川が流れ、中央を朝日岳に源を発する寒河江川が西から東に流れて最上川に合流する。

この地域の河岸段丘面は、高・中・低位の三つに分けられる。高位面は寒河江川北岸の碁盤森山等の標高330m台の丘陵地に分布するものである。中位面は寒河江川・最上川沿いであって、川岸との比高が100m前後である。山地・丘陵地を縁取るように分布している。台地は果樹園や水田となっている。低位面は、数段の段丘面に細分される。

富沢I遺跡は寒河江川の河岸段丘の低位面および扇状地状の低地に位置し、遺跡のすぐ北側に寒河江川の旧河川が存在する。遺跡はこれに沿って東西約200m、南北約130mの範囲に広がっている。標高は、A・B区132mで、C区で129mを測る。河岸段丘の低位面の形成期は、C14年代測定値によっていまから3万年～1万年前とされている。

表層の地質は礫および砂からなる未固結の堆積物で、北側は砂および泥となる。土壌は今の浦系統の黒泥である。遺跡の地目は、水田や果樹園、畑地、宅地等多様である。

### 2 歴史的環境 (第1図)

寒河江市には旧石器時代の遺跡が多く、河岸段丘や丘陵上に前期旧石器時代と後期旧石器時代の過渡期に位置付けられる明神山遺跡をはじめ、後期旧石器時代を主とする金谷原遺跡・高瀬山遺跡・西覚寺遺跡・富山遺跡等が分布する。

縄文時代の遺跡は、市内に約20ヶ所分布する。縄文時代早期や前期の遺跡は、2～3の出土例はあるもののまだよく知られていない。縄文時代中期になると、三脚石器が多く出土した上谷沢遺跡や、中期末葉の複式炉をもつ住居跡を検出した柴橋遺跡・うぐいす沢遺跡・向原遺跡等、分布が密になる。

弥生時代の遺跡は、石田B遺跡の前期の再葬墓が知られているが、高瀬山遺跡からも弥生中・後期の土器が出土している。古墳時代の遺跡は、高瀬山遺跡の方形周溝墓や、箱式石棺をもつ高瀬山古墳がある。古墳時代の集落跡は、河北町で熊野台遺跡・下瀬遺跡等が発掘調査されているが、寒河江市内での本格的な調査例はない。

奈良・平安時代の集落跡は、平成6年度から高瀬山遺跡周辺で本格的な発掘調査がなされている。また、同時期の須恵器や瓦を焼いた窯跡が市内西方の平野山にある。

中世から近世にかけては、大江氏を中心とする一族の城館跡が多く作られており、とくに大江町の左沢(楯山)城、寒河江市の寒河江城・白岩城が著名である。

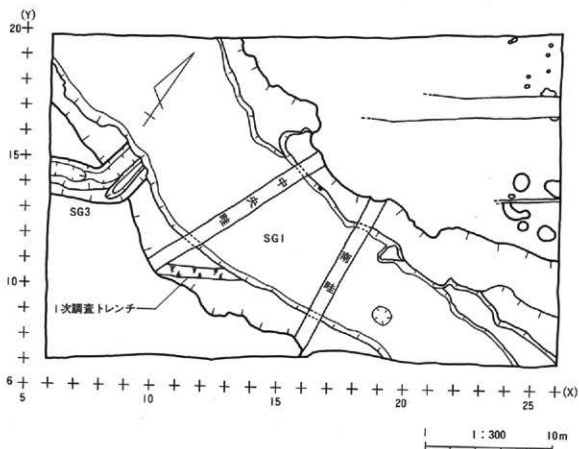
### III 遺構と遺物の分布

#### 1 A 区 (第4図、付図1、図版2・4)

A区はSG1河川跡を中心とする地区で、発掘面積は合計 800m<sup>2</sup>である。SG1河川跡は、A区を西から東にかけて緩やかに流れている。河岸の稜線がやや乱れているが、川底近くの傾斜変換線はかなり明瞭である。A区の北西部には幅3mほどの小河川跡 (SG3河川跡) が西から北に向って注いでいる。SG1河川跡の内部には、集石や軽い落ち込みが数ヶ所みられるが、遺構とする確証はない。A区北東部の平地には、浅い落ち込みや小穴が分布するが、遺物の出土はなく、明らかに遺構と認定されるものはない。

遺物には、縄文土器・石器・石製品・弥生土器・土師器・須恵器・赤焼土器・中世陶器・近世陶磁器などがあり、SG1河川跡を中心に出土する。巻末にA区の遺物分布状況を出土点数から5段階に分けた図を載せてあるので参照いただきたい (付図1)。

付図1からは遺物のほとんどがSG1河川跡の覆土から出土していることがわかる。これは、河跡以外の標高の高い場所の遺物包含層が後世の耕作等によつて削平されたことによるものであろう。さらに縄文時代の土器や石器等の遺物が、SG1河川跡の北側より集中して分布し、南側にいくほど分布密度が少なくなることもわかる。これは、縄文時代の集落が同河川跡の北側にあったことを強く示唆する。また、弥生時代以降とくに中世の陶器がSG1河川跡の南東部に分布することも注目される。



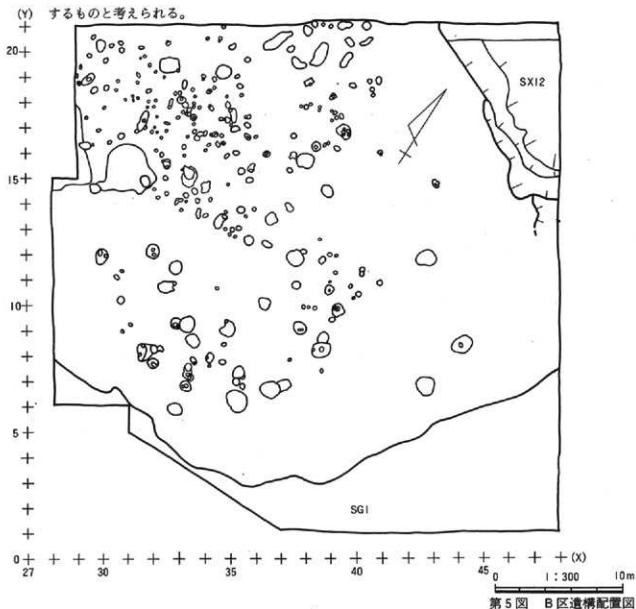
第4図 A区遺構配置図

## 2 B 区 (第5図、付図2、図版10~12)

B区は縄文時代の土壌群を中心とする地区で、発掘面積は合計 1,520m<sup>2</sup>である。B区の南から南東部にかけてA区で検出されたSG1河川跡の北岸が走り、北東部には幅8m以上の段丘崖に派った落ち込み(SX12)が確認されている。

縄文時代の遺構は、この二つの河川跡に囲まれた平場に集中して分布する。検出された遺構は、土壌が48基と性格不明の落ち込み3基等である。48基の土壌は、大きく(a)断面が中程で一旦ぐびれ、さらに底に向って開く袋状のもの、(b)平面が長楕円形を呈し、壁が垂直に立ち上がり、中央に柱穴をもつ陥し穴と考えられるもの、(c)その他のものの三つに大別される。(a)の袋状土壌は13基あり、B区の北西部と南西部および南東部の三ヶ所にまとまって分布する。また、(b)の陥し穴と考えられるものは3基あり、B区の北西端と南東端の二ヶ所の分布する。竪穴住居跡は検出できなかった。

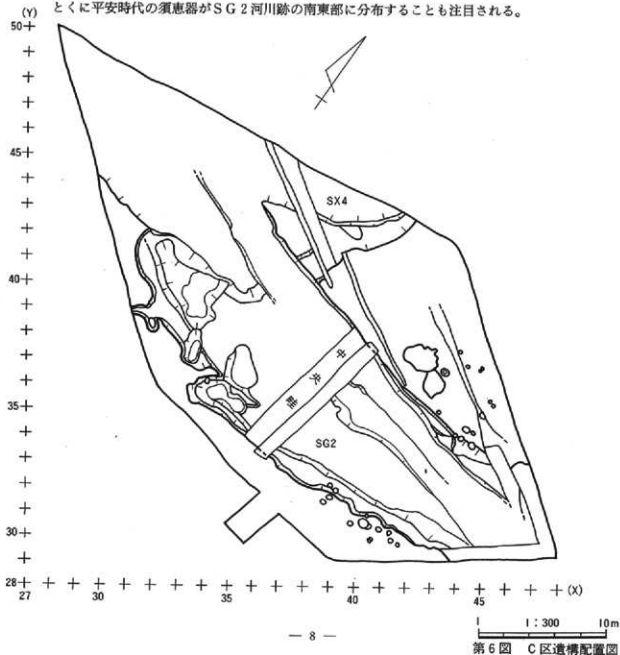
遺物はほとんどが縄文時代に属するもので、縄文土器・土製品・石器などがある。B区の各土壌や落ち込み遺構から出土するが、とくに袋状土壌に多くみられる。遺物の時期は縄文時代中期末葉から同後期初頭頃に比定されることから、土壌等の時期もこの頃を主とするものと考えられる。



3 C区(第6図、付図3、図版3・7・8)

C区はSG2河川跡を中心とする地区で、発掘面積は合計1,180㎡である。SG2河川跡はC区を南東から北西にかけて緩やかに流れている。川岸の稜線がやや乱れているが、川底近くの傾斜変換線はかなり明瞭である。北東部には段丘崖に添った落ち込み(SX4)がみられる。SG2河川跡の内部には窪地が数ヶ所みられるが、遺構とする確証はない。C区北東部の平地からは、SK7・8・11の3基の土壇と若干の柱穴が検出されている。遺物には、縄文土器・土製品・石器・石製品・赤焼土器・須恵器・中世陶器・近世陶磁器などがあり、SG2河川跡を中心に出土する。巻末にC区の遺物分布状況を、出土点数から5段階に分けた図を載せてあるので参照いただきたい(付図3)。

付図3からは、縄文時代の土器や石器等の遺物が、SG2河川跡の南側より集中して分布し、北側に行くほど分布密度が少なくなることもわかる。これは、縄文時代の集落が同河川跡の南側にあったことを強く示唆する。C区南側の崖面に一部試掘溝を入れたところ、縄文時代の土器や石器が多く出土したことも、これを裏付ける。また、弥生時代以降とくに平安時代の須恵器がSG2河川跡の南東部に分布することも注目される。



## IV 検出遺構

### 1 A区の遺構（第4・7図、図版4～6）

#### (1)SG1河跡（第8図、付図1）

A調査区全域を西から東に縦断する旧河川跡である。第1次発掘調査で遺構の概観をほぼ把握し、第2次発掘調査で調査区内を全域掘り下げている。河川跡の幅は最大部で13.5m、最小部で16.5m、平均14.5mを測り、西側の幅が東側よりやや広がる。河川から離れた両側は、シルト層の下の基盤層である礫層が露出している。川岸の稜線は少し乱れており、とくに北岸側で1～2段の低い平場を形成する。川底近くの傾斜変換線はかなり明瞭であり、川底の幅は西側で10.8m、中央で8.5m、東側で6.6mを測る。

つぎにSG1河川跡の覆土について述べる。本河川跡の土層断面は、中央の南北ベルト2本（東から南畦、中央畦と呼ぶ）とA区北西壁（北畦と仮称）の三ヶ所で観察した。

発掘調査は当初重機械を用いて表土を除去したため、地表面からの土層の堆積状況がわかるのは北畦のみである。川跡は地表面下50～70cmで検出され、その上層は第I層—水田の耕作土、第II層—後世の盛り土、第III層—水田の滞水面となっている。

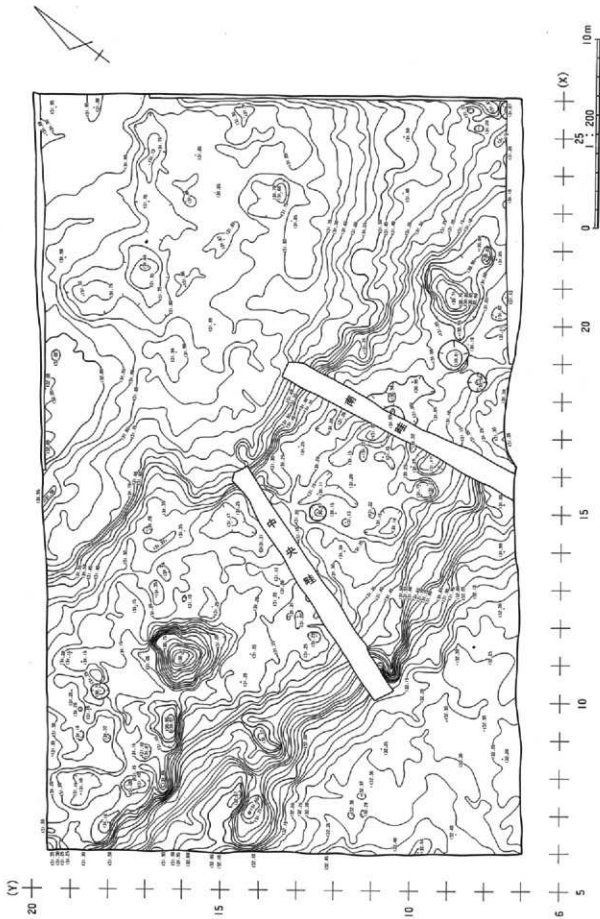
SG1河川跡の覆土は大きく5層に分かれ、F1が黒褐色シルト（水田を作る際の埋土）F2が黒色粘質シルト（縄文時代から近世までの遺物包含層）、F3がオリブ黒色粘質シルト（縄文時代から中世までの遺物包含層）、F4がやや明るいオリブ黒色粘質シルト（縄文時代中期末から後期中葉までの遺物包含層）、F5がオリブ黒色細砂層（縄文時代中期末から後期中葉までの遺物包含層）となっている。F2はさらに礫の含み具合や土質から三つに細分される。

覆土全体の厚さは各畦とも約60cmで、各層の厚さはF1が20～25cm、F2が20～50cm、F3が10cm、F4が10～15cm、F5が10cmとなる。F1を除き、各層とも岸から川底に向って緩やかな堆積状況を示す。遺物は各層から出土するが、下層にいくほど少なくなる傾向を示す。また、付図1から縄文時代の土器や石器等の遺物が、SG1河川跡の北側により集中して分布し、南側にいくほど分布密度が少なくなることもわかる。

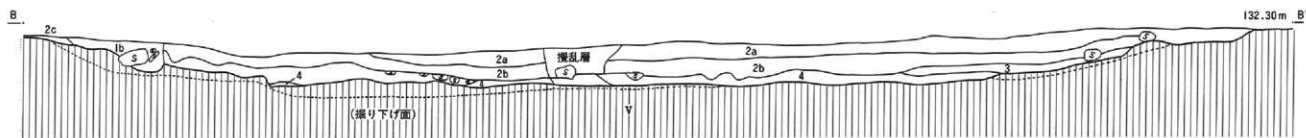
SG3河川跡は、A区の西端7～10-14～16Gで検出されたSG1に注ぐ小さな河川跡である。幅が約55cm、検出長が約150cm、検出面から川底までの深さが最深部で35cmを測り、断面がV字形を呈する。覆土は2層に分かれ、F1から縄文土器片6点と石器剥片52点が出土している。

第7図には、発掘調査終了近くにおける50cm毎の標高測点を基にA区の旧地形の復元図を示した。SG1河川跡の落ち込み部が等高線の密な部分となって表れている。川跡北岸の南東部はなだらかな傾斜になって、後述するB区の南端に続く。川底面は必ずしも水平ではなく、二ヶ所に高みをもって屈曲していることがわかる。また、川底面は西から中央にかけてはほとんど比高差がなく、中央から東にかけて若干低くなっている。周辺の地形を考慮にいれば、SG1河川跡は西から東に向って緩やかに流れているといえる。



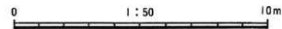


第7図 A区の旧地形復元



## SG1河川跡土層註記

- |     |         |                                   |
|-----|---------|-----------------------------------|
| F1  | 10YR3/2 | 黒褐色シルト(水田を作る際の埋土)                 |
| F1b | 2.5Y3/2 | 黒褐色砂(水田を作る際の埋土)                   |
| F2  | 5Y2/1   | 黒色粘質シルト(縄文時代から近世までの遺物包含層)         |
| F2a | 5Y2/1   | 黒色シルト(遺物を少量含む)                    |
| F2b | 7.5Y2/1 | 黒色粘質シルト(遺物を多量に含む)                 |
| F2c | 5Y2/2   | オリープ黒色砂質シルト(礫が多く、遺物を微量含む)         |
| F3  | 5Y2/2   | オリープ黒色粘質シルト(縄文時代から中世までの遺物包含層)     |
| F4  | 7.5Y3/1 | オリープ黒色粘質シルト(縄文時代中期末-後期中葉までの遺物包含層) |
| 第V層 | 10Y4/1  | 灰色砂礫層(基盤層)                        |



第8図 SG1河跡土層断面図

## 2 C区の遺構（第6図、図版7～9）

### (1)SG2 河川跡（第9図、付図3）

C調査区全域を西から東に縦断する旧河川跡である。第1次発掘調査で遺構の概観をほぼ把握し、第2次発掘調査で北西部を除く調査区域を掘り下げている。河川跡の幅は最大部で12.5m、最小部で9.2m、平均10.0mを測り、西側の幅が東側よりやや広くなる。河川から離れた両側は、基盤の褐色粘質シルト層である。川岸の稜線は少し乱れており、とくに北西部西側の岸の延長が不明確になる。川底近くの傾斜変換線はかなり明瞭であり、川底の幅は西側で9.6m、中央で10.5m、東側で8.2mを測る。

つぎにSG2河川跡の覆土の状況について述べる。本河川跡の土層断面は中央の南北ベルトと南東壁で観察した。発掘調査は当初重機械を用いて表土を除去したため、地表面からの土層の堆積状況がわかるのは南東壁のみである。川跡は地表面下20～30cmで検出されその上層は第1層—水田の耕作土、第II層—後世の盛り土、第III層—水田の滞水面となっている。第II層は上位段丘に近い南側にはなく、下位段丘に近い北側に堆積している。

SG2河川跡の覆土は80層近くになるが、土層の堆積状況から大きく5つの時期に区別される。もっとも古い1期は、中央ベルト南側に堆積しているもので、黒色粘質シルトを主とする上層の1～3・7・8層と、褐色砂層を主とする下層の4～7・9～15・18～21層に分かれる。次に古い2期は1期の北側に堆積しているもので、黒色粘質シルトを主とする上層の16～18層と、褐色砂層を主とする下層の22～25層に分かれる。3期は2期の北側に堆積しているもので、上からの掘り込み部で褐色粘土を主とする49～55層・同黄灰色粘土を主とする32～35層と、これらに切られている下層の黄灰色砂層を主とする40・43～47層、褐色砂層を主とする58～65層に分かれる。4期は3期の上面に堆積しているもので、黒色シルトを主とする27～30・39・41・42・48層が含まれる。もっとも新しい5期は、3・4期の北側に堆積しているもので、黒色シルトを主とする上層の66層と、黒褐色粘質シルトを主とする下層の67～77層に分かれる。

以上の五時期に大別した河川跡の覆土の観察から、SG2河川跡は時期が新しくなるにつれて幅を狭くしながら北側に移動していることがわかる。覆土全体の厚さは90～120cmで、北側にいくほどやや深くなる。

遺物は黒色シルトを主とする層から出土するが下層にいくほど少なくなる傾向を示す。もっとも新しい5期とした川跡の層からは、須恵器や窯滓片がまとまって出土し、各層が一気に堆積していること等から、後世の用水路を近年になって埋めたものと考えられる。

また、付図3から縄文時代の土器や石器等の遺物が、SG2河川跡の北東側により集中して分布し、北側にいくほど遺物の分布密度が少なくなることがわかる。

### (2)SX4 落ち込み

本落ち込みは、C区の北東端37～43—42～45Gで検出されたもので、C区の平場から下の段丘に至る崖面と考えられるものである。幅が約5m、調査区内での長さが約11m、検出面から底面までの深さが最深部で100cmを測り、東から西にかけて傾斜する。

覆土は上面のa～g層が後世の盛り土で、1～12層がそれ以前の堆積層となる。遺物は盛り土と3・5層から縄文土器片85点と石器剥片227点、陶磁器16点が出土している。

(3)SK7土壌 (第14図、図版8)

C調査区、SG2河川跡の北側43・44-36・37Gで検出された不整形の土壌である。大きさは東西径171cm、南北径166cm、検出面から底面までの深さは最深部で54cmを測る。遺構検出時はわからなかったが、覆土の掘り下げ段階で本土壌の西部に直径80～100cmの落ち込みが2基確認された。全体が一つの土壌というよりは、A～C三つの土壌が重複したものと考えられる。

発掘調査時の中央ベルトの覆土は6層に分かれるが、F1～4がSK7B土壌、F5・6がSK7A土壌の覆土となる。遺物はF1から石器剥片が1点だけ出土している。

(4)SK8土壌 (第14図)

SK7土壌の西側42～44-37・38Gで検出された不整形の土壌である。大きさは東西径220cm、南北径228cm、検出面から底面までの深さは最深部で33cmを測る。平面がかなり不整形をしており、本来は本土壌の東部分があったものに、後で西側が浅く掘り込まれたと思われる。発掘調査時の中央ベルトの覆土は4層に分かれるが、F3・4が本来の土壌、F1・2が新しく掘り込まれた土層の可能性はある。遺物はF3から石器剥片が7点出土している。

(5)SK11土壌 (第14図)

SG2河川跡の南側41-31Gで検出された略円形の土壌である。東側の土壌を切っており、大きさは東西径82cm、南北径74cm、検出面から底面までの深さは40cmを測る。

覆土は3層に分かれるが、F1から縄文土器と石器剥片が各1点出土している。

### 3 B区の遺構 (第10～14図、付図2、図版12～13)

(1)SG1河川跡 (付図2)

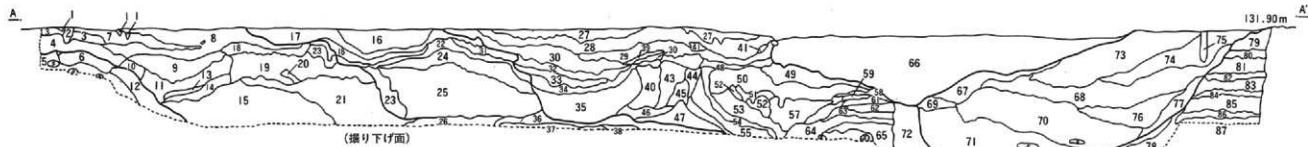
A区から連続する河川跡で、B区の南西から南東にかけて全域でSG1河川跡の北岸が検出されている。幅が約4～10m、長さが約40mで、西から北東にかけて蛇行しながらB区の平場を取り囲む。河川跡の北側は、A区と同じようにシルト層の下の基盤層である礫層が露出している。B区では本河川跡について幅1m、長さ6mのトレンチ調査に留めている。検出面から川底までの深さが最深部で52cmと浅く、川底は確認されていない。

覆土は2層が確認され、F1・2から縄文土器片と石器剥片が少量出土している。

(2)SX12落ち込み (付図2)

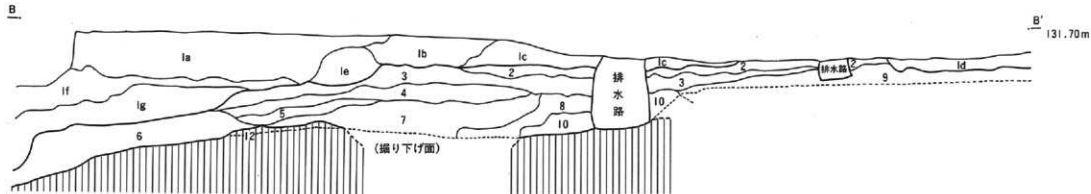
本落ち込みは、B区の北東端44～48-15～21Gで検出されたもので、B区の平場からC区の段丘に至る崖面と考えられるものである。検出幅が約10m、検出長が約14m、検出面から底面までの深さが最深部で120cm以上を測り、南から北にかけて傾斜する。

覆土は上層を除き6層に分かれ、4～9層がそれ以前の堆積層となる。遺物は多く上面の3層と5～7層から縄文土器片1,111点と石器剥片670点が出土している。



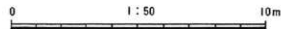
(掘り下げ面)

- |                            |                            |  |   |                          |                             |
|----------------------------|----------------------------|--|---|--------------------------|-----------------------------|
| 1 10YR4/1 細砂               | 9 10YR3/1 砂 酸化鉄多量を含む       | 17 2.5Y2/1 細砂 遺物包含                     | 25 10Y4/1 砂                             | 32 10YR3/1 シルト           | 38 10YR4/3 砂                |
| 2 10YR3/1 粘土質シルト           | 10 10Y5/1 粘土 F4に同上粘質       | 18 7.5Y3/1 細砂                          | 26 7.5YR5/8 粗砂 酸化鉄多量                    | 33 5Y6/1 粘土              | 39 10YR3/3 細砂質シルト           |
| 3 10YR4/2 粘土質シルト           | 11 10YR4/1 砂 酸化鉄多量         | 19 10Y4/1 砂 砂中に黒い灰質土(黒色シルト)を細断を含む      | 27 7.5YR3/1 シルト 2層プロックを含む(その層は)         | 34 2.5Y4/1 粘土 (ベタベタ)     | 40 5Y5/1 粘土 質的に不均一          |
| 4 10Y5/1 粘土質シルト            | 12 2.5Y4/1 粘土 酸化鉄多量        | 20 10Y4/1 シルトブロック                      | 28 10YR2/1 シルト 遺物多量                     | 35 2.5Y5/1 粘土            | 41 10YR2/2 シルトブロック          |
| 5 10G5/1 細砂                | 13 10YR4/2 細砂質シルト          | 21 2.5GY4/1 粗砂                         | 29 7.5YR3/1 シルト 酸化鉄多量を含む                | 36 5Y6/1 砂 2層(細砂質シルト)の区画 | 42 2.5Y4/2 細砂 黒色シルトを含む      |
| 6 10Y4/1 砂                 | 14 10YR4/2 砂より暗色微塵でHとの区画不明 | 22 5Y4/1 細砂                            | 30 10YR3/1 粘土質シルト                       | 37 10YR5/3 細砂質シルト        | 43 2.5Y4/1 砂 酸化鉄多量と細砂を細断を含む |
| 7 2.5Y2/1 シルト(酸化鉄含)        | 15 10YR4/3 砂 酸化鉄多量         | 23 5Y3/1 シルト質細砂                        | 31 2.5Y3/1 粘土質シルト                       |                          |                             |
| 8 10YR2/1 粘土質シルト(遺物包含)     | 16 7.5YR2/1 粘土質シルト         | 24 7.5Y4/1 細砂 黒色シルト粒若干含む               |   |                          |                             |
| 44 10YR4/1 シルト 暗褐色シルト粒若干含む | 55 10YR2/2 細砂              | 65 5Y4/2 細砂                            | 76 2.5Y2/1 粘土 F2層に似る                    |                          |                             |
| 45 2.5Y3/1 粘土質シルト          | 56 10YR3/1 砂               | 66 2.5Y3/1 暗褐色の混土質(黒色シルト)と粘土質シルトを多量に含む | 77 10YR1/2/1 粘土質シルト 砂まじり                |                          |                             |
| 46 10YR4/4 細砂 酸化鉄多量        | 57 10YR2/2 粘土              | 67 10YR2/2 細砂質シルト 灰質褐色(10YR4)加細砂プロック多量 | 78 7.5Y4/1 シルト質細砂 10YR1/2/1粘土プロックを多量に含む |                          |                             |
| 47 10YR3/1 粘土              | 58 7.5YR1/2/1 粘土           | 68 5Y4/1 細砂 黒色シルトブロック多量                | 79 2.5Y6/3 シルト                          |                          |                             |
| 48 10YR3/1 シルト             | 59 10YR1/2/1 シルト           | 69 10YR1/2/1 粘土                        | 80 10YR4/2 粘土質シルト                       |                          |                             |
| 49 10YR1/2 粘土              | 60 10YR2/1 粘土              | 70 2.5Y3/1 粘土質シルト 暗多量                  | 81 2.5Y4/2 細砂                           |                          |                             |
| 50 10YR3/1 粘土 炭化粒若干含む      | 61 2.5Y2/1 細砂質シルト          | 71 2.5Y2/1 粘土質シルト 5Y4/1(細砂)塊多量を含む      | 82 2.5Y4/2 砂                            |                          |                             |
| 51 10YR4/1 細砂              | 62 2.5Y3/1 シルト質粘土          | 72 2.5Y2/1 粘土 5Y4/2シルト粒を含む             | 83 2.5Y4/2 粗砂                           |                          |                             |
| 52 10YR2/1 粘土              | 63 7.5Y5/1 粘土              | 73 10YR3/1 細砂質シルト 7層プロックを多量に含む         | 84 2.5Y4/2 砂                            |                          |                             |
| 53 10YR1/2 粘土              | 64 5Y4/1 砂                 | 74 7.5YR2/1 シルト 7層プロック含む               | 85 10YR5/6 砂                            |                          |                             |
| 54 10YR2/2 粘土質シルト          |                            | 75 7.5YR3/1 シルト 根の穴                    | 86 2.5Y5/2 粘土質シルト                       |                          |                             |
|                            |                            |  | 87 5Y4/2 砂                              |                          |                             |



(掘り下げ面)

- |  |                                      |
|--|--------------------------------------|
| a 7.5YR2/2 シルト : 黄褐色土ブロック・小礫を含む、遺物包含     | 2 7.5YR3/2 細砂質シルト : 酸化鉄多量を含む         |
| b 7.5YR5/8 細砂                            | 3 7.5YR3/1 シルト : 質的に風化層を含む、若干粘質      |
| c 7.5YR2/2 シルト : laより黄褐色土ブロックの混入が顕著、遺物包含 | 4 10YR2/3 シルト : 酸化鉄、小礫をやや多く含む        |
| d 10YR2/2 シルト : 黄褐色土ブロック含む               | 5 10YR2/1 粘土質シルト : 酸化鉄含む             |
| e 10YR3/2 シルト : 小礫を含む                    | 6 10YR2/2 粘土質シルト : 酸化鉄含む、深いところではグライ化 |
| f 10YR3/2 シルト : 暗含む                      | 7 10YR4/4 細砂質シルト                     |
| g 10YR2/3 細砂質シルト : 昭和15年の盛土、礫・細砂を多量に含む   | 8 10YR2/2 粘土質シルト                     |
|  | 9 10YR5/6 細砂質シルト                     |
|  | 10 10YR2/2 細砂質シルト : 礫多量              |
|  | 11 10YR4/3 粗砂                        |
|  | 12 10Y5/1 粘土                         |



第9図 SG2河跡・SX4土層断面図

## (3) S K 21土墳 (第10図、図版12)

B調査区西端30・31-20・21Gで検出された不整楕円形の土墳である。断面が中程で一旦くびれ、底が奥に広がる「袋状土墳」となっている。大きさは東西径97cm、南北径107cmで、検出面から底面までの深さは最深部で60cmを測る。

覆土は5層に分かれ、遺物は各層から出土するがとくにF3からまとまって出土した。縄文土器は深鉢が復元できたもので4点(第15図1~4)、破片が61点、調整のある剥片石器やチップが22点、磨石等の磨製石器が6点(第48図、第50図)出土している。本遺跡で縄文土器群のまとまりを知れる数少ない遺構である。

## (4) S K 22土墳 (第10図、図版12)

S K 21土墳の東側33・34-20Gで検出された隅丸長方形の土墳である。大きさは東西径150cm、南北径117cmで、検出面から底面までの深さは最深部で18cmと浅い。

覆土は黒色シルトの単一層で、遺物は石器剥片が1点だけ出土している。

## (5) S K 23土墳 (第10図、図版12)

調査区西端35・36-19・20Gで検出された略円形の土墳である。耕作等で削平されているが、北東部は袋状土墳の形を残している。大きさは東西径103cm、南北径116cmで、検出面から底面までの深さは最深部で34cmを測る。

覆土は3層に分かれ、遺物は各層を合わせて縄文土器片4点と石器剥片やチップが13点出土している。

## (6) S K 24土墳 (第10図)

調査区西端38・39-20・21Gで検出された不整楕円形の土墳である。大きさは東西径77cm、南北径252cmで、検出面から底面までの深さは最深部で43cmを測る。

覆土は5層に分かれ、F1~F3から縄文土器片21点と円盤状土製品が1点(第30図1)石器剥片やチップが11点出土している。

## (7) S K 25土墳 (第10図、図版14)

調査区北西部40-17・18Gで検出された不整円形の土墳である。断面が逆台形を呈し、底面に長さ20~35cmの円礫が7個認められた。大きさは東西径101cm、南北径104cmで、検出面から底面までの深さは最深部で36cmを測る。

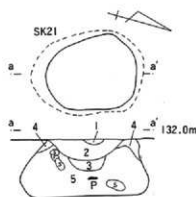
覆土は黒色シルトの単一層で、縄文土器が復元できたもので4点(第15図5・6、第16図7)、縄文土器破片が94点、調整のある剥片石器が12点、磨製石斧が1点(第35図15)磨石・凹石等が7点出土している。

## (8) S K 27土墳 (第10図、図版14)

調査区北西部34-15・16Gで検出された不整円形の土墳である。断面が逆台形を呈し、南側の土墳を切って作られている。大きさは東西径118cm、南北径96cmで、検出面から底面までの深さは最深部で29cmを測る。

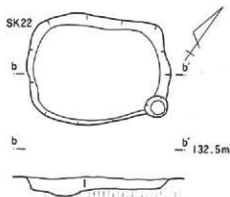
覆土は5層に分かれ、F1~F3から縄文土器片8点と石器剥片9点、磨石等が1点出土している。

IV 検出遺構



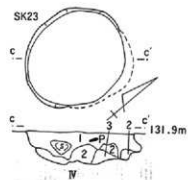
SK21土層註記

- F1 10YR2/2 黒褐色シルト(遺物・炭化物少量)
- F2 10YR2/1 黒色シルト(遺物・炭化物少量)
- F3 10YR1.7/1 黒色シルト(遺物・炭化物多量)
- F4 10YR3/2 黒褐色シルト(遺物・炭化物微量)
- F5 10YR3/1 黒褐色シルト(遺物・炭化物少量)



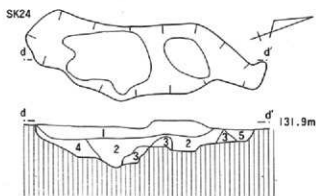
SK22土層註記

- F1 10YR2/1 黒色シルト(遺物と炭炭を含む)



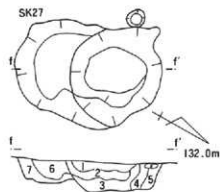
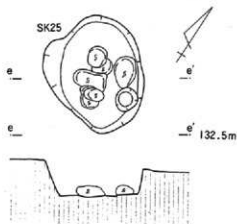
SK23土層註記

- F1 10YR2/1 黒色シルト(遺物・炭化物を多く含む)
- F2 10YR4/4 褐色砂質シルト(遺物・炭化物を微量含む)
- F3 10YR3/4 暗褐色砂質シルト(遺物を少量含む)
- VI層 10YR5/6 黄褐色粘質シルト(遺物・炭化物を無遺物層)



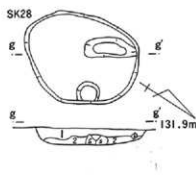
SK24土層註記

- F1 10YR2/1 黒色シルト(遺物・炭化物少量)
- F2 10YR1.7/1 黒色シルト(遺物・炭化物少量)
- F3 10YR4/1 褐色砂質シルト(遺物・炭化物微量)
- F4 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト(遺物なし、F2とVI層の粗混り)
- F5 10YR3/1 暗褐色砂質シルト(遺物なし)



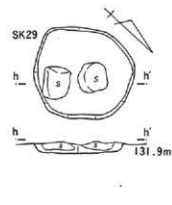
SK27土層註記

- F1 10YR2/1 黒色シルト(遺物・炭化物微量)
- F2 10YR3/1 黒褐色シルト(遺物・炭化物多量)
- F3 10YR1.7/1 黒色シルト(遺物・炭化物少量)
- F4 10YR4/2 黄褐色粘質シルト(F2とVI層の粗混り)
- F5 10YR5/1 暗褐色粘質シルト(遺物なし)
- F6 10YR3/2 黒褐色シルト(遺物・炭化物少量)
- F7 10YR3/1 黒褐色粘質シルト(遺物・炭化物微量)



SK28土層註記

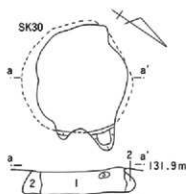
- F1 10YR3/1 黒褐色粘質シルト(遺物・炭化物微量)
- F2 10YR2/3 暗褐色砂粘層(無遺物)



SK29土層註記

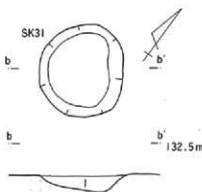
- F1 10YR3/1 黒褐色シルト(遺物・炭化物少量)

0 1:40 1m



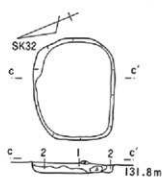
## SK30土層註記

- F1 10YR1.7/1 黑色粘質シルト(遺物・炭化物少量)  
F2 10YR/2 灰褐色粘質シルト  
(F1と厚層の細い記り、遺物・炭化物なし)



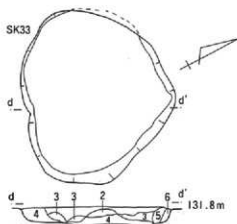
## SK31土層註記

- F1 10YR2/2 黒褐色シルト



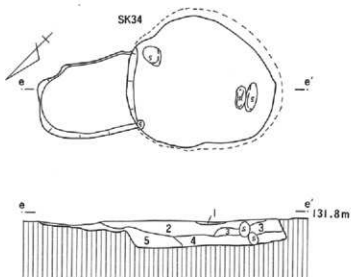
## SK32土層註記

- F1 10YR1.7/1 白色シルト(遺物多量、炭化物少量)  
F2 10YR/4/1 褐色砂質シルト(遺物・炭化物なし)



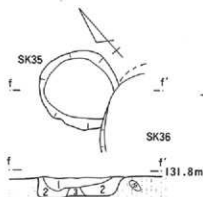
## SK33土層註記

- F1 10YR1.7/1 白色シルト(遺物・炭化物少量)  
F2 10YR2/2 黒褐色シルト(遺物・炭化物少量)  
F3 7.5YR2/2 黒褐色シルト(遺物・炭化物少量)  
F4 10YR/4/1 褐色砂質シルト(無遺物)  
F5 10YR/4/2 灰褐色粘質シルト(無遺物)  
F6 10YR2/4 褐色砂質(無遺物)



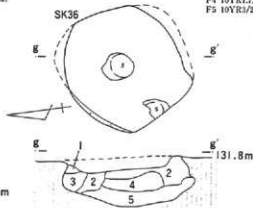
## SK34土層註記

- F1 10YR2/1 白色シルト(遺物・粘土・炭化物少量)  
F2 10YR/4/1 褐色砂質シルト(遺物・炭化物少量)  
F3 10YR2/1 黒褐色シルト(遺物・炭化物少量)  
F4 10YR1.7/1 白色粘質シルト(遺物・炭化物多量)  
F5 10YR2/2 黒褐色砂質シルト(遺物・炭化物少量)



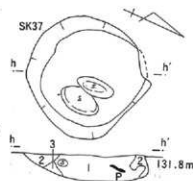
## SK35土層註記

- F1 10YR1.7/1 白色シルト(遺物・炭化物少量)  
F2 10YR/4/2 灰褐色粘質シルト(遺物・炭化物少量)  
F3 10YR5/4 純い黄褐色粘質シルト(無遺物)



## SK36土層註記

- F1 10YR2/1 白色シルト(遺物・炭化物少量)  
F2 10YR3/1 黒褐色シルト(遺物・炭化物少量)  
F3 10YR5/4 純い黄褐色粘質シルト(無遺物)  
F4 10YR2/2 黒褐色砂質シルト(炭化物少量)  
F5 10YR3/2 黒褐色砂質シルト(無遺物)



## SK37土層註記

- F1 10YR2/1 白色シルト(遺物・炭化物多量)  
F2 10YR3/1 黒褐色シルト(遺物・炭化物少量)  
F3 10YR1.7/1 白色粘質シルト(遺物・炭化物少量)

0 1:40 1m



## (9) S K28土墳 (第10図、図版14)

調査区西端30・31-12・13Gで検出された不整形長方形の土墳である。断面が鍋底を呈し底面近くに小円礫が2個認められた。大きさは東西径97cm、南北径104cmで、検出面から底面までの深さは最深部で17cmと浅い。

覆土は2層に分かれ、F1から縄文土器片8点と石器剥片5点が出土している。

## (10) S K29土墳 (第10図、図版15)

S K28土墳の東側32・33-12・13Gで検出された不整形円形の土墳である。大きさは東西径103cm、南北径110cmで、検出面から底面までの深さは最深部で12cmと浅い。覆土中に長さ30cm前後の円礫が2点認められた。

覆土は黒褐色シルトの単一層で遺物は縄文土器片3点と石器剥片9点が出土している。

## (11) S K30土墳 (第11図、図版15)

調査区西側中央寄り33-11Gで検出された不整形の袋状土墳である。大きさは東西径115cm、南北径116cmで、検出面から底面までの深さは最深部で24cmを測る。

覆土は2層に分かれ、遺物は各層合わせて縄文土器片4点と石器剥片13点が出土している。

## (12) S K31土墳 (第11図)

S K28土墳の北側33-12Gで検出された略円形の土墳である。大きさは東西径94cm、南北径98cmで、検出面から底面までの深さは最深部で17cmと浅い。

覆土は黒褐色シルトの単一層で、遺物の出土は認められなかった。後世に擾乱された穴の可能性もある。

## (13) S K32土墳 (第11図、図版15)

調査区南西部34-9Gで検出された隅丸長方形の土墳である。大きさは東西径108cm、南北径84cmで、検出面から底面までの深さは最深部で11cmと浅い。

覆土は2層に分かれるが、F1から縄文土器深鉢の体部(第17図11)と縄文土器片4点と石器剥片8点が出土している。

## (14) S K33土墳 (第11図)

調査区南西端35・36-6・7Gで検出された不整形円形の土墳である。大きさは、東西径169cm、南北径156cmで、検出面から底面までの深さは最深部で20cmを測る。底面はやや凹凸がある。覆土は6層に分かれ、F1～F3から縄文土器片3点と石器剥片60点および石罌接合資料2点が出土している。

## (15) S K34土墳 (第11図、図版15)

調査区南端36・37-7Gで検出された不整形円形の袋状土墳で、北側の浅い土墳に切られている。大きさは、東西径156cm、南北径158cmで、検出面から底面までの深さは最深部で29cmを測る。耕作等で削平されているが、北側を除き袋状土墳の形を残している。

覆土は5層に分かれ、各層から遺物が出土する。F4を主に縄文土器片66点と底部(第26図1)、石器剥片84点、磨石等1点が出土している。

## ⑩ S K35土壌 (第11図)

調査区中央南寄り39-9 Gで検出された不整形の土壌である。S K36土壌に切られており、断面が逆台形を呈する。大きさは東西径81cm、南北径80cm以上で、検出面から底面までの深さは23cmと浅い。

覆土は3層に分かれ、F1・2から縄文土器片2点と石器剥片5点が出土している。

## ⑪ S K36土壌 (第11図)

S K35土壌の南側39-8・9 Gで検出された不整形の袋状土壌である。大きさは東西径126cm、南北径134cmで、検出面から底面までの深さは最深部で52cmを測る。底面は鍋底状を呈し、断面が中程で奥に入り込む。

覆土は5層に分かれ、遺物はF1から縄文土器片15点と石器剥片67点、石核3点、磨石等2点および石器接合資料1点(第40~43図)が出土している。

## ⑫ S K37土壌 (第11図、図版14)

調査区38-12 Gで検出された不整形の袋状土壌である。耕作等で削平されているが、北側の一部が袋状土壌の形を残している。大きさは東西径121cm、南北径123cmで、検出面から底面までの深さは最深部で27cmを測る。また、底面に長さ40cm前後の円跡が2個並んで認められた。

覆土は3層に分かれ、遺物はF1から小型深鉢と深鉢が各1点(第17図15・16)、縄文土器片114点と石器剥片29点、磨石等4点、F2から縄文土器片10点と石器剥片2点が出土している。

## ⑬ S K38土壌 (第12図)

調査区中央東寄り40-10 Gで検出された不整形の土壌である。大きさは東西径91cm、南北径89cmで、検出面から底面までの深さは26cmを測る。

覆土は黒褐色シルトの単一層で、遺物は縄文土器片29点と磨石等3点が出土している。

## ⑭ S K39土壌 (第12図)

調査区東南端43-7・8 Gで検出された不整形の土壌である。大きさは、東西径156cm、南北径148cmで、検出面から底面までの深さは16cmと浅い。

覆土は黒褐色シルトの単一層で、遺物は認められなかった。

## ⑮ S X43落ち込み遺構 (第12図、図版12)

調査区西端31~33-15・17 Gで検出された不整形の落ち込み遺構である。西側がS K47土壌に切られており、大きさは東西径406cm、南北径351cm、検出面から底面までの深さは37cmである。覆土は5層に分かれるが、黄褐色粘質シルト主体の層にF1の黒色シルトが両側からレンズ状に入り込んでおり、風倒木の一種と考えられる。遺物はF1から、縄文土器片16点と石器剥片22点出している。

## ⑯ S K47土壌 (第12図、図版12)

調査区西端31-15 Gで検出された略楕円形の土壌で、北側のS X43落ち込み遺構を切って作られている。大きさは、東西径85cm、南北径75cmで、検出面から底面までの深さは最

深部で30cmを測る。

覆土は黒褐色シルトの単一層で遺物は縄文土器片1点と石器剥片4点が出土している。

(㉔) S K 48土壌 (第12図、図版12・14)

S X 43落ち込み遺構の東33-16Gで検出された不整楕円形の土壌である。大きさは、東西径71cm、南北径74cmで、検出面から底面までの深さは30cmを測る。

覆土は2層で、縄文土器深鉢(第17図14)と破片、石器剥片が各14点出土している。

(㉕) S K 52土壌 (第12図、図版14)

調査区北端39・40-20・21Gで検出された不整楕円形の袋状土壌である。断面が末広がり、大きさは東西径101cm、南北径200cmで、検出面から底面までの深さは71cmを測る。

覆土は4層に分かれ、遺物はF 1から縄文土器片25点と石器剥片4点が出土している。

(㉖) S K 57土壌 (第12図、図版15)

調査区中央36-13Gで検出された略円形の袋状土壌である。断面がやや末広がりで、大きさは東西径72cm、南北径73cmで、検出面から底面までの深さは35cmを測る。

覆土は黒褐色シルトの単一層で、遺物は認められなかった。

(㉗) S K 58土壌 (第14図、図版13)

調査区西端30-19・20Gで検出された不整楕円形の陥し穴と考えられる遺構である。壁が垂直に立ち上がり、中央に直径25cmほどの柱穴を有する。大きさは東西径56cm、南北径115cmで、検出面から柱穴底面までの深さは72cmを測る。

覆土は黒褐色シルトの単一層で、遺物は認められなかった。

(㉘) S K 59土壌 (第14図、図版13)

S K 58土壌の東側32-18Gで検出された不整楕円形の陥し穴と考えられる遺構である。壁が垂直に立ち上がり、中央に直径40cmほどの柱穴を有する。大きさは東西径57cm、南北径155cmで、検出面から柱穴底面までの深さは84cmを測る。

覆土は黒褐色シルトの単一層で、遺物は認められなかった。

(㉙) S K 62土壌 (第12図)

調査区南西端36-8Gで検出された略円形の袋状土壌である。断面がやや末広がりで、大きさは東西径101cm、南北径100cmで、検出面から底面までの深さは20cmを測る。

覆土は黒褐色シルトの単一層で、遺物は縄文土器片23点と底部1点(第26図25)、石器剥片10点、磨石類1点が出土している。

(㉚) S K 63土壌 (第12図)

調査区南西端34-8Gで検出された略円形の袋状土壌である。断面がやや末広がりで、南側の土壌に切られている。大きさは東西径62cm、南北径66cmで、検出面から底面までの深さは30cmを測る。覆土は2層に分かれ、遺物は縄文土器片11点と石器剥片8点、磨石類9点が出土している。

(㉛) S K 66土壌 (第13図、図版16)

調査区南西端34-9・10Gで検出された略円形の袋状土壌である。断面が末広がりで、

S K79土壌を切っている。大きさは東西径141cm、南北径132cmで、検出面から底面までの深さは57cmを測る。覆土は5層に分かれ、遺物はF 1～3から縄文土器片11点と石器剥片19点が出土している。

㉑ S K68土壌 (第13図、図版17)

調査区南西部35・36-9・10Gで検出された不整楕円形の土壌である。西側の土壌に切られ、大きさは東西径87cm、南北径118cmで、検出面から底面までの深さは23cmを測る。

覆土は5層に分かれ、遺物はF 1から深鉢体部 (第16図8)、縄文土器片26点と石器剥片17点が出土している。

㉒ S X69落ち込み遺構 (第13図)

調査区中央36・37-11・12Gで検出された不整楕円形の落ち込み遺構である。大きさは東西径343cm、南北径128cm以上、検出面から底面までの深さは37cmである。覆土は6層に分かれるが擾乱が著しい。遺物はF 1・2から縄文土器底部 (第27図19)、縄文土器片119点と石器剥片28点、磨石類1点が出土している。

㉓ S K70土壌 (第13図、図版17)

調査区南西部38-9・10Gで検出された略円形の土壌である。大きさは東西径103cm、南北径106cmで、検出面から底面までの深さは22cmを測る。底面に長さ25cm前後の円礫が2個並んで認められた。覆土は黒褐色シルトの単一層で、遺物は縄文土器片5点と石器剥片2点、磨石類3点が出土している。

㉔ S K71土壌 (第13図、図版17)

調査区東部43-12Gで検出された不整楕円形の袋状土壌である。断面が末広がり、大きさは東西径139cm、南北径132cmで、検出面から底面までの深さは60cmを測る。

覆土は5層に分かれ、遺物はF 1～3から縄文土器片1点と石器剥片5点、磨石類3点が出土している。

㉕ S K75土壌 (第14図、図版18)

調査区東端43・44-9Gで検出された略楕円形の陥し穴と考えられる遺構である。壁がほぼ垂直に立ち上がり、中央に直径30cmほどの柱穴を有する。大きさは東西径120cm、南北径165cmで、検出面から柱穴底面までの深さは73cmを測る。

覆土は黒褐色シルトの単一層で、遺物は認められなかった。

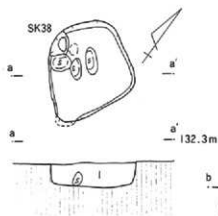
㉖ S K106土壌 (第13図)

調査区中央北寄り39-17Gで検出された略円形の土壌である。大きさは東西径65cm、南北径72cmで、検出面から底面までの深さは18cmと浅い。底面に長さ30cm前後の円礫が1個認められた。覆土は黒褐色シルトの単一層で、遺物は縄文土器片5点が出土している。

㉗ S K107土壌 (第13図)

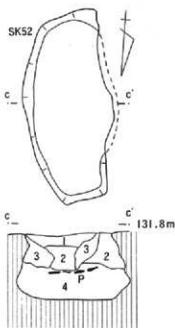
調査区中央39・40-11Gで検出された不整形の袋状土壌である。断面が末広がり、大きさは東西径75cm、南北径91cmで、検出面から底面までの深さは52cmである。底面に長さ20cmの円礫が1個認められた。覆土は黒褐色シルト層で、遺物は認められなかった。

IV 検出遺構



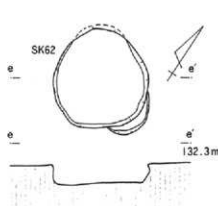
SK38土層註記

F1 10YR3/1 黒褐色シルト(遺物を少量含む)



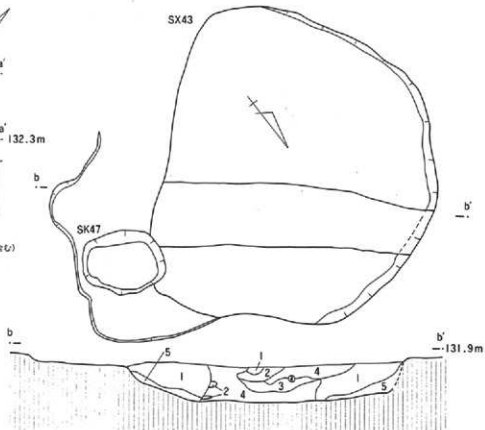
SK52土層註記

F1 10YR2/1 黒色シルト(遺物・灰化物を少量含む)  
 F2 10YR1/7 黒色シルト(F1より硬く、遺物・灰化物を少量含む)  
 F3 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト(遺物を微量含む)  
 F4 10YR5/1 鈍い黄褐色粘質シルト  
 (F4層にF2が混ったもの・無遺物)



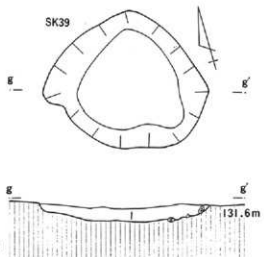
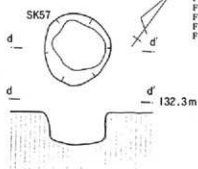
SK63土層註記

F1 10YR3/1 黒褐色シルト(遺物・灰化物を少量含む)  
 F2 10YR5/4 暗褐色粘質シルト(遺物を少量含む)



SX43土層註記

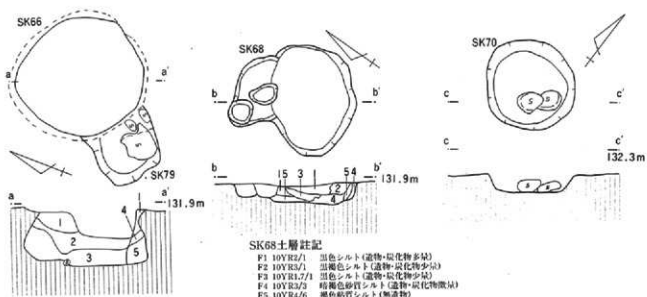
F1 10YR2/1 黒色シルト(遺物・灰化物を多く含む粒子が細かい)  
 F2 10YR4/6 暗褐色粘質シルト(無遺物層)  
 F3 10YR4/3 鈍い黄褐色シルト(無遺物)  
 F4 10YR7/6 暗黄褐色粘質シルト(無遺物層・池山IV層の上部移動)  
 F5 10YR5/1 鈍い黄褐色粘質シルト(無遺物層)



SK39土層註記

F1 10YR2/1 黒色シルト(無遺物)

0 1 : 40 1m

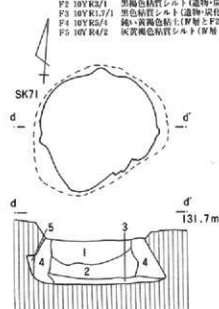


## SK66土層註記

- F1 10YR4/1 褐色粘質シルト (F層とF2の粗い混り, 遺物微量)  
 F2 10YR2/1 黒褐色粘質シルト (遺物・炭化物少量)  
 F3 10YR1.7/1 黒色粘質シルト (遺物・炭化物少量)  
 F4 10YR5/4 鈍い黄褐色粘土 (F層とF2の粗い混り, 無遺物)  
 F5 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト (F層とF2の粗い混り, 無遺物)

## SK68土層註記

- F1 10YR2/1 黒色シルト (遺物・炭化物多量)  
 F2 10YR3/1 黒褐色シルト (遺物・炭化物少量)  
 F3 10YR1.7/1 黒色シルト (遺物・炭化物少量)  
 F4 10YR3/3 暗褐色粘質シルト (遺物・炭化物微量)  
 F5 10YR4/6 褐色粘質シルト (無遺物)

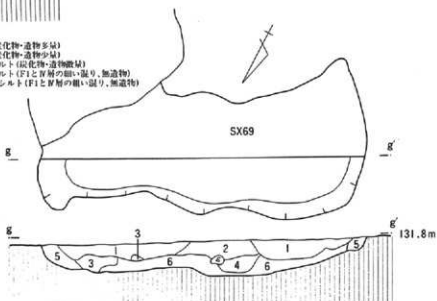


## SK71土層註記

- F1 10YR2/1 黒色シルト (炭化物・遺物多量)  
 F2 10YR1.7/1 黒色シルト (炭化物・遺物少量)  
 F3 10YR3/1 黒褐色粘質シルト (炭化物・遺物微量)  
 F4 10YR4/1 褐色粘質シルト (F1とF層の粗い混り, 無遺物)  
 F5 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト (F1とF層の粗い混り, 無遺物)

## SK106土層註記

- F1 10YR3/2 黒褐色シルト

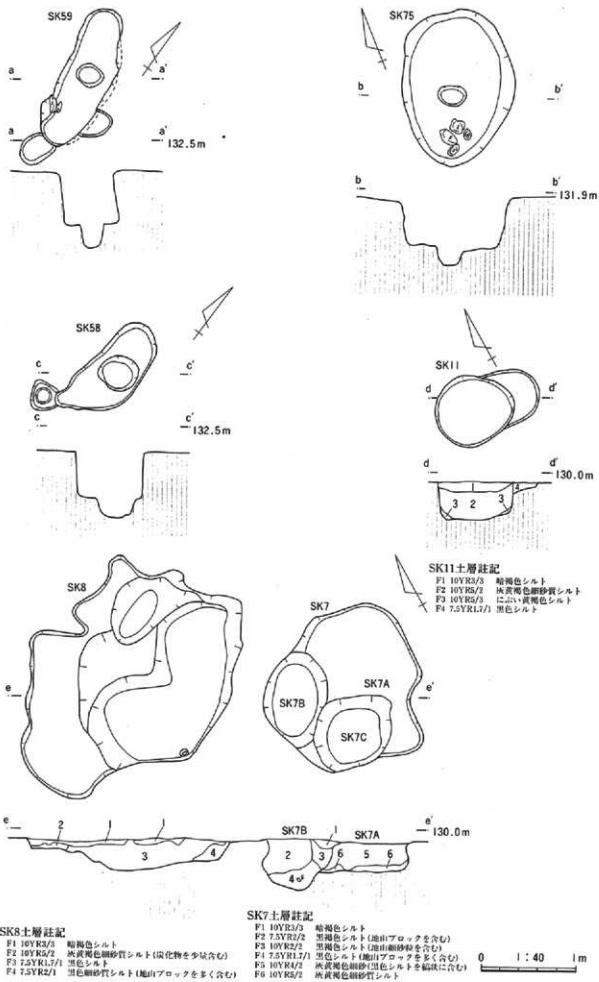


## SX69土層註記

- F1 10YR2/1 黒色シルト (遺物・炭化物少量)  
 F2 10YR1.7/1 黒色シルト (遺物・炭化物少量)  
 F3 10YR3/3 暗褐色粘質シルト (遺物なし)  
 F4 10YR4/4 褐色粘質 (遺物なし)  
 F5 10YR3/2 黒褐色粘質シルト (遺物なし)  
 F6 10YR2/4 褐色粘質 (遺物なし)

0 1:40 1m

IV 検出遺構



第14図 土壇(5)

表1 土壌等観察表

遺構番号	種別	検出地区(X-Y)G	平面形	規模(EW-N S)cm	深さ(cm)	備考
S K 7	土壌	43・44-36・37G	不整形円形	171×166	54	以下3基C区の土壌
S K 8	土壌	42~44-37・38G	不整形方形	220×228	33	
S K 11	土壌	41-31G	略円形	82×74	40	東側の土壌を切る
S K 21	袋状土壌	30・31-20・21G	不整形円形	97×107	60	以下B区の土壌
S K 22	土壌	33・34-20G	隅丸長方形	150×117	18	
S K 23	袋状土壌	35・36-19・20G	略円形	103×116	34	
S K 24	土壌	38・39-20・21G	不整形円形	77×252	43	
S K 25	土壌	40-17・18G	不整形円形	101×104	36	底面に礫
S K 27	土壌	34-15・16G	不整形円形	118×96	29	南側の土壌を切る
S K 28	土壌	30・31-12・13G	不整形長方形	97×104	17	
S K 29	土壌	32・33-12・13G	不整形円形	103×110	12	覆土中に礫
S K 30	袋状土壌	33-11G	不整形円形	115×116	24	
S K 31	土壌	33-12G	略円形	94×98	17	
S K 32	土壌	34-9G	隅丸長方形	108×84	11	
S K 33	土壌	35・36-6・7G	不整形円形	169×156	20	
S K 34	袋状土壌	36・37-7G	不整形円形	156×158	29	北側の土壌を切る
S K 35	土壌	39-9G	不整形円形	81×(80)	23	S K 36に切られる
S K 36	袋状土壌	39-8・9G	不整形円形	126×134	52	
S K 37	袋状土壌	38-12G	不整形円形	121×123	27	底面に礫
S K 38	土壌	40-10G	不整形方形	91×89	26	
S K 39	土壌	43-7・8G	不整形方形	156×148	16	
S X 41	落ち込み遺構	37-19・20G	不整形方形	191×167	13	
S X 43	落ち込み遺構	31~33-15~17G	不整形円形	406×351	37	風倒木
S K 47	土壌	31-15G	略楕円形	85×75	21	S X 43を切る
S K 48	土壌	33-16G	不整形円形	71×74	30	
S K 51	土壌	38・39-20G	不整形楕円形	124×54	16	
S K 52	袋状土壌	39・40-20・21G	不整形円形	101×200	71	
S K 56	土壌	35-14G	不整形楕円形	56×133	17	
S K 57	袋状土壌	36-13G	略円形	72×73	35	
S K 58	陥し穴	39-19・20G	不整形楕円形	56×115	72	
S K 59	陥し穴	32-18G	不整形楕円形	57×156	84	
S K 60	土壌	39-12G	隅丸方形	41×56	20	
S K 62	袋状土壌	36-8G	略円形	101×100	20	東側の土壌を切る
S K 63	袋状土壌	34-8G	略円形	62×66	30	南側の土壌に切られる
S K 64	土壌	31-11G	略円形	56×62	15	
S K 65	土壌	34-7G	略円形	83×76	6	
S K 96	袋状土壌	34-9・10G	略円形	141×132	57	南側の土壌を切る
S K 67	土壌	33・34-6G	楕円形	110×92	10	S K 79を切る
S K 68	土壌	35・36-9・10G	不整形円形	87×118	23	西側の土壌に切られる
S X 69	落ち込み遺構	36・37-11・12G	不整形楕円形	343×(128)	37	南側の落ち込みに切られる
S K 70	土壌	38-9・10G	略円形	103×106	22	底面に礫
S K 71	袋状土壌	43-12G	不整形楕円形	139×132	60	
S K 72	土壌	41-11G	円形	41×40	8	
S K 75	陥し穴	43・44-9G	略楕円形	120×165	73	
S K 76	土壌	30・40-19G	不整形楕円形	51×37	19	
E U 77	埋設土器	39-19G	円形	29×22	22	
S K 78	土壌	37-10・11G	不整形楕円形	71×92	15	底面に礫
S K 79	土壌	33-19G	不整形方形	(64)×69	13	底面に礫
S K 80	土壌	32・33-9G	略楕円形	52×66	16	西側の落ち込みに切られる
S K 106	土壌	39-17G	略円形	65×72	18	底面に礫
S K 107	袋状土壌	39・40-11G	不整形方形	75×91	52	底面に礫



## V 出土遺物

今回の調査によって出土した遺物は、整理箱にして167箱である。内訳は、縄文土器が58箱、打製石器が68箱、磨製石器が32箱、須恵器・陶磁器等弥生時代以降の土器が9箱となる。

### 1 縄文土器 (第15～26図、図版19～29)

B区西半部以外に明確な土壌等の遺構がなかったため、A区のSG1河川跡とC区のSG2河川跡の埋土から出土したものが大半を占める。遺構の性格上、小片や細片がほとんどである。B区の遺構ではSK21・25・32・36・37土壌の計5ヶ所で縄文土器がややまとまって出土しており、復元のうえ図示ができた縄文土器はすべてこれらの遺構から出土したものである。

これらの縄文土器を、器形、文様構成、施文手法等から時期の古い順に9群31類に分けて記述する。

#### 第I群土器 (第18図17・18)

大木7b式に含まれる土器を本群に一括する。胎土には、石英、長石、黒雲母などを含み焼成も比較的良好である。内面はよく磨かれている。文様構成、施文手法等からつぎの2類に細分される。

1類：口縁部にS字状の粘土貼り付け文を有し、体部上半に縄文原体による側面圧痕文が施されているものである。SG2河跡F3から1点出土している(17)。器形は浅鉢になると思われる。

2類：横方向の隆帯と連続した半截竹管文を有するものである。SG2河川跡F3から1点出土している(18)。器種は深鉢になると思われる。

#### 第II群土器 (第18図19・22)

大木8b式に含まれる土器を本群に一括する。胎土には、長石、黒雲母などを含み焼成も良い。内外面はよく磨かれている。本群の資料はB区II層から出土した2点だけで、同一類に属する。

1類：隆線ないし隆沈線による渦巻文が施されているもので、器形は頸部が長く胴部が膨らむキャリバー形の深鉢である。

#### 第III群土器 (第15図1～4、第18図20・21・23～25・27～34)

曲線的な縄文帯あるいは無文帯が器面に展開する土器群で、大木10式に属するものを本群に含めた。SK21土壌からややまとまって出土している。胎土には、石英、長石などを含み、焼成はあまり良くない。施文手法や文様構成等からつぎの6類に細分される。

1類：隆帯と沈線によるS字形あるいはC字形の縄文充填区画文が主として横方向に展開するものである。器形はすべて深鉢で、口縁部が直線的に立ち上がるもの(20・23)と、胴部がやや膨らむもの(21・30)の二つがある。

2類：隆帯ないし沈線による区画の中に円形の刺突文が施されているものである。器種はすべて深鉢で、28は隆帯と沈線による区画、29は沈線による文様区画がなされている。

3類：隆帯と沈線によるS字形あるいはC字形の区画文の中が磨消しされている無文になっているものである。器種は深鉢であるが、全体の器形ははっきりしない(31・32)。

4類：口縁部文様の展開が隆帯によって行われているもので、体部は縄文は地文となっている。明瞭な沈線は認められず、隆帯の断面が山型を呈するのが特徴である。口縁が内湾する深鉢で、主たるモチーフはO字形ないしC字形をなすと思われる(第15図1・2)。本類には口縁部に橋状の把手を有するものもみられる(33)。

5類：口縁部に幅広い無文帯を有し、体部の地文との境が隆帯によって区画されている粗製の深鉢である。口縁部が内傾するもの(3、27)と、やや外傾するもの(24・25)の二つがある。

6類：口縁部に幅広い無文帯を有し、体部の地文との境が沈線によって区画されている粗製の深鉢である。口縁部が内傾するもの(4、157)と、やや外傾するもの(34)の二つがある。

#### 第IV群土器(第15図5・6、第16図7、第18図26、第19図、第20図62~68)

岩手県の「門前式」といわれる土器より古い要素を持っている縄文時代後期初頭の土器群で、とくにボタン状貼付文や連鎖状隆帯文がほとんどみられないことを大きな特徴としている。ちなみに富沢I遺跡では第IV群~第VI群土器が主体をなしている。第IV群土器はSK25土壌からややまとまって出土している。胎土には、石英、長石などを含み、焼成はあまり良くない。施文手法や文様構成等からつぎの6類に細分される。

1類：頭部に隆帯あるいは沈線をめぐらしているもので、胴部文様帯をもたない土器を本群に一括する。多くは隆帯上に刻目文や刺突文を施しているが、施文手法によりいくつかに分けられる。

- ① 隆帯上に刻目文を施しているもの(36)
- ② 隆帯上に刺突文を施しているもの(35・37・49)
- ③ 隆帯と沈線文を施しているもの(7)
- ④ 隆帯のみを施しているもの(67)
- ⑤ 沈線文のみを施しているもの(5、43~46、155・156)

2類：1類とは違って胴部文様を有する土器群である。隆帯をもつもの、沈線文をもつもの等施文手法によりいくつかに分けられる。

- ① 隆帯上に刻目文を施しているもの(26)
- ② 隆帯上に刺突文を施しているもの(38~40、66)

- ③ 沈線区画の中に刻目文を施しているもの (58)
- ④ 隆帯のみを施しているもの (9、41・42)
- ⑤ 沈線のみを施しているもの (6、43~46・57、63・64・68、155・156)
- ⑥ 刺突文を施しているもの (47・48・50~53)
- ⑦ 隆帯による区画の中に充填縄文を施しているもの (54~56、62)
- ⑧ 口縁部に有孔の大きな把手を有するもの (59~61)

3類：第IV群に伴うと思われる粗製土器を一括した。口縁部が内湾するもの (65) とほぼ直立するものがある。

第V群土器 (第16図8・10、第17図12・16、第20図69~84、第21図85~108)

連鎖状隆帯やボタン状貼付文、立体的な大形把手を有する土器群である。SK36土壌からややまとまって出土している。胎土には、石英、長石、黒雲母などを含み、焼成は比較的良い。灰褐色になるほど良好に焼かれた土器も存在する。施文手法や文様構成等から、つぎの4類に細分される。

1類：本類は口頸部に連鎖状隆帯やボタン状貼付文などがみられるが、胴部文様帯をもたないものである。器形にはA、口縁がゆるやかにすぼまるもの、B、口頸部ですぼまる口縁が外反するもの大きく2種類がある。数量が少なく詳細な記述は難しい (69~74)。

2類：胴部文様帯があり、懸垂文等が発達した土器である (75~106)。器形上では大形の把手をもつものが目立つ。すべて破片で全体がわかるものはないが、器形にはA、頸部がやや膨らみ大波状口縁をもつもの (78・85・86・97・98)、B、平縁で口縁がほぼ直立するもの (83)、C、筒形に近い器形のもの (77・82) の大きく3種類がある。78には、二列の連鎖状隆帯による懸垂文が認められる。85・86には連鎖状隆帯やボタン状貼付文と口縁部から展開する沈線による山形の区画文が認められる。105・106は隆帯に太い斜方向の沈線が施されているもので、やや様相を異にする。本類に属する明確な把手は認められなかったが、あるいは第IV群土器2類⑧がこれに伴うのかもしれない。

3類：爪形文をもつものを本類に一括する。SG2河川跡から蓋形土器が1点出土している (第17図15)。中央につまみ部、両側に2個のボタン状貼付文を有し、沈線によって山形の区画の中に連続した爪形文が施されている。また、胴部文様帯をもつ深鉢の仲間で隆帯に爪形文をもつものもSG2河川跡から1点出土している (107)。このほか二種の縄文原体を摺り合せて爪形文的な効果をだしているものが1点 (108) あるが、便宜上これも本類に含めておく。

4類：第V群に伴うと思われる粗製土器である。器形がある程度わかるものがSK36土壌から1点 (第16図10) とSK37土壌から2点 (第17図12・16)、SK68土壌から1点 (第16図8) 出土している。器形は、口縁部がほぼ直立する深鉢 (10) とやや内傾する深鉢 (12) および小形の深鉢 (16) などがある。表裏縄文のある土器 (184・186) も本期に前後する時期かもしれない。

## 第VI群土器（第17図11・13、第22図109～133、第23図134～154）

全体的な特徴として倒卵状ないし渦巻状磨消縄文や波状懸垂文等を有する一群である。第V群土器にみられた連鎖状隆帯やボタン状貼付文はあまり認められず、沈線による区画文や円形の刺突文が主体になる。本群がまとまって出土した遺構はない。胎土には、石英長石、黒雲母などを含み、焼成は比較的良い。施文手法や文様構成等から、つぎの5類に細分される。

1類：口縁部に沈線や刺突文によって区画された比較的幅の広い無文帯をもち、主たる文様が胴部にあるものである（109～111、114～126）。大形の土器が多くなる。器形は口縁部がほぼ直立するもの（109・110）と、胴中央部より上に最大径をもち、頸部で一端すばまって口縁が外反するもの（124・126ほか）とがある。118～122の土器には赤色顔料が塗られている。

2類：口縁部に無文の隆帯あるいは連鎖状の隆帯がめぐっているもので、第V群のものとは少し違う要素をもっている土器を一括した。器種はすべて橋状把手ないし波状口縁をもつ深鉢である（127～133）。沈線を主体に文様が施されているもの（127・128）と、Y字形の磨消縄文をもつもの（13・130）がある。

3類：波状口縁の頂部から直接胴部の文様が展開するものや、幅の狭い口縁部の無文帯をもつものである（11・134～149）。器種は波状口縁で口縁が内傾する深鉢（11）と、外反する深鉢（134～139）がある。文様は太い沈線の区画による渦巻文ないしS字文を主とするもの（134～143）と、縄文の地文に沈線による山形文を主とするもの（144～149）とがある。

4類：口縁部に区画文や口縁部文様帯をもつもので、比較的横方向への展開が現れてくるものである。細い沈線による弧状文が施されているもの（150）と、縄文の地文に粗い間隔で平行沈線文が施されているもの（152～154）がある。

5類：第VI群に伴うと思われる粗製土器である。胴部に最大径があり、口頸部は屈曲する深鉢類は特徴と思われるが、富沢I遺跡で明らかに本類と認定出来るものはないが、地文に縋糸文をもつ仲間の一部が該当するかもしれない（188～191・194）。

## 第VII群土器（第17図14、第24図158～162）

短い連鎖状の円形刺突文と横方向に展開する磨消縄文を特徴とし、第VI群土器に後続するともまれる土器群である。資料が少ないがつぎの2類に分けられる。

1類：橋状の把手と太い円形刺突文を特徴とするものである（159～162）。160・161は、把手がかなり発達し、内外面に各々1個の円形刺突文を有する。159・162は巻貝状の細長い把手をもち、短い連鎖状の円形刺突文と頸部に磨消縄文を有する。

2類：短い連鎖状の円形刺突文と横方向に展開するS字状の磨消縄文を特徴とするものである。SK32土壇から口縁部を欠くもののほぼ完形の深鉢が出土している（14）。158も本類に含まれる。

## 第VIII群土器 (第17図12、第24図163~175)

後期中葉頃に属する土器を本群としたが、ほとんど小破片であるため詳しい分類は出来ない。器種は浅鉢ないし口縁部が大きく外反する深鉢が多くなる。施文手法や文様構成等から、つぎの4類に細分される。

1類:頸部に隆帯と斜方向の刻目文を有するものである(163~165)。器形は頸部がくびれ、口縁部が外反する鉢形ものが想定される。

2類:口唇部と頸部に縦方向の刻目文、その間に短い同一原体による羽状の縄文を有するものである(166~169)。器形は頸部がくびれ、口縁部が外反する鉢形が想定される。

3類:口縁部および体部上半に幅広い縄文帯を有するものである(171~173)。体部上半の磨消縄文は入組文の祖型となる。口縁部は外反する大きな波状口縁となる。

4類:第VIII群に伴うと思われる粗製土器である。外面が全面研磨され、無文となっている深鉢が特徴的である。口縁部は平縁で内傾するもの(12)と肥厚するもの(170)とがある。粗い刷毛目文の仲間(192・193)も本類に含まれるかもしれない。

## 第IX群土器 (第25図176~183)

縄文時代晩期に属すると思われる土器群を本群に一括する。施文手法や文様構成等からつぎの4類に細分される。

1類:口縁部および体部に沈線による三叉文を有するものである(176~177)。器形は両方とも浅鉢と思われる。

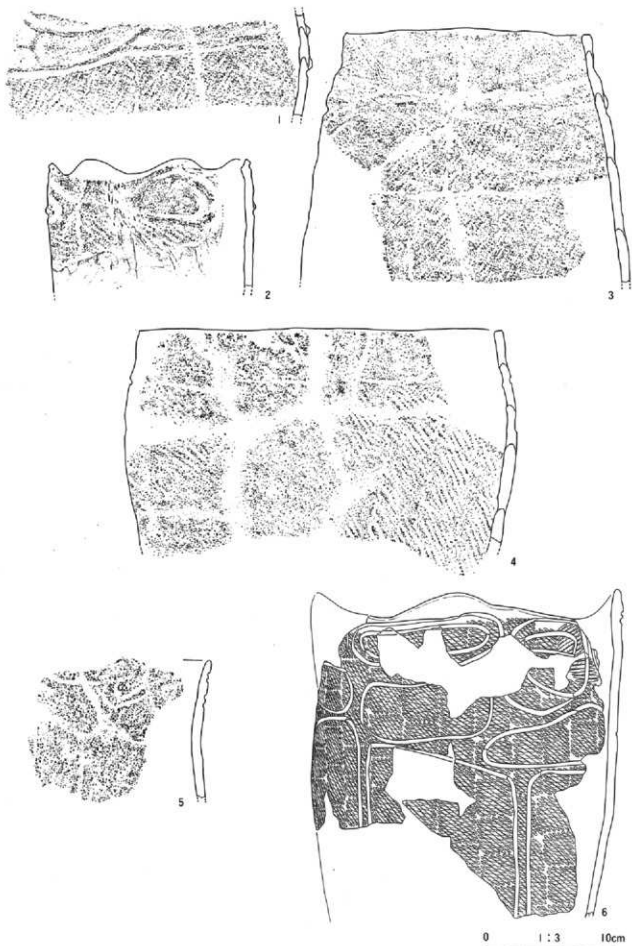
2類:平行沈線に刻目ないし隆帯を伴う工字文を有するものである(179~182)。器形は179が深鉢、180~182が大形の浅鉢である。

3類:平行沈線による工字文を有するものである(183)。器形は小形の浅鉢である。

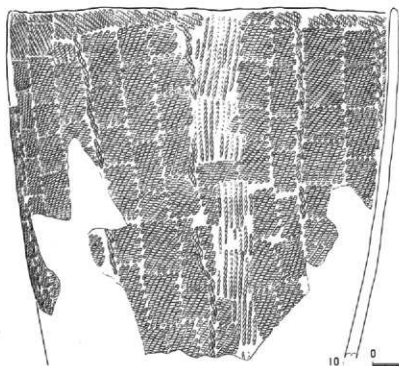
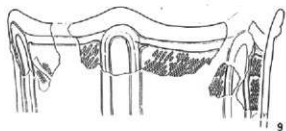
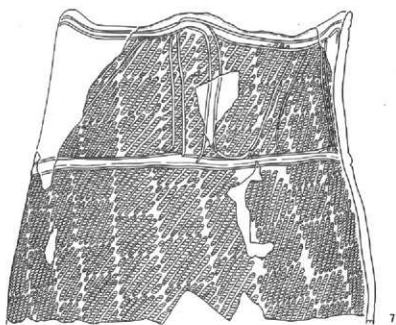
4類:第IX群に伴うと思われる粗製土器である。口唇部が強く外側に屈曲する深鉢(178)は器形等から1類に伴う可能性が高い。

表2-1 縄文土器観察表

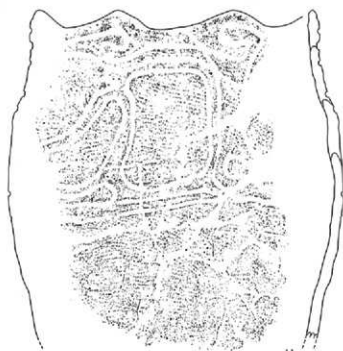
Nu	出土地点・層位	器種・部位	文様・観察等	分類	挿図	図版
1	S K21 F3	深鉢・口縁部	隆帯による縄文充満区画文	III-4	15-1	19-1
2	S K21 F1	深鉢・口縁部	同上	III-4	15-2	19-2
3	S K21 F3	深鉢・体部上半	口縁部と体部の境に隆帯	III-5	15-3	19-3
4	S K21 F3	深鉢・体部上半	口縁部と体部の境に沈線	III-6	15-4	19-4
5	S K25 F1	深鉢・体部上半	口縁部にS字状の沈線文	IV-1⑩	15-5	19-5
6	S K25 F1	深鉢・体部上半	全面に沈線による方形区画文	IV-2⑤	15-6	19-6
7	S K25 F1	深鉢・体部上半	頸部に隆帯とU字状の沈線文	IV-1⑩	16-7	20-7
8	S K68 F1	深鉢・体部中位	体部上半にLR縄文、その下は無文	V-4	16-8	20-8
9	B区 II層	深鉢・口縁部	口縁部から胴部にU字状の隆帯文	IV-2④	16-9	20-9
10	S K36 F2	深鉢・体部上半	胴部近のR縄文と無節縄文の組合せ	V-4	16-10	20-10
11	S K32 F1	深鉢・体部上半	波状口縁と沈線による方形区画の磨消縄文	VI-3	17-11	21-11
12	S K37 F1	深鉢・体部上半	外面が全面ミガキによる無文	V-4	17-12	21-12
13	S G 2 F1	深鉢・口辺部	沈線区画によるY字形の磨消縄文	VI-2	17-13	21-13
14	S K48 F2	深鉢・略壳形	横方向のS字形磨消縄文	VII-2	17-14	21-14
15	S G 2 F2	蓋・略壳形	ボタン状貼付文と沈線・爪形文	V-3	17-15	21-15
16	S K37 F1	小形深鉢・体部下半	体部にRL縄文	V-4	17-16	21-16
17	S G 2 F3	浅鉢・口縁部	S字状貼付文と縄文原体側面圧痕文	I-1	18-17	22-17
18	S G 2 F3	深鉢・口縁部	粘土隆帯と連続した平截竹管文	I-2	18-18	22-18
19	B区 II層	深鉢・口縁部	隆帯による渦巻文	II-1	18-19	22-19
20	B区 II層	深鉢・口縁部	隆鉢縁による縄文充満区画文	III-1	18-20	22-20



第15図 縄文土器 (1)



10 0 1:3 10cm



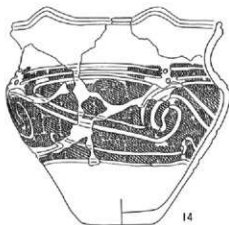
11



12



13

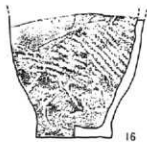


14

0 1:3 10cm



15

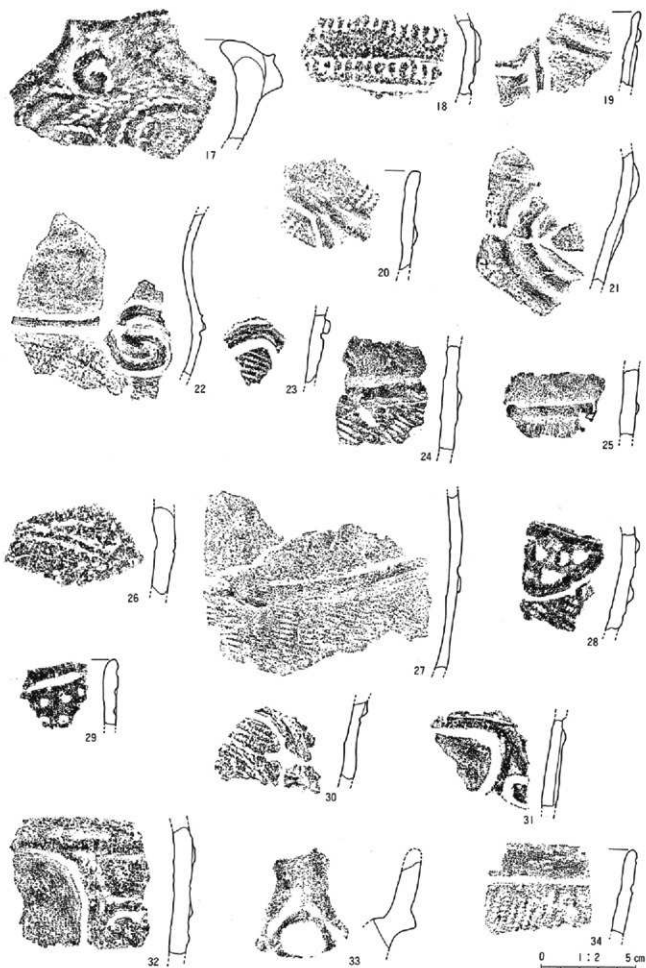


16

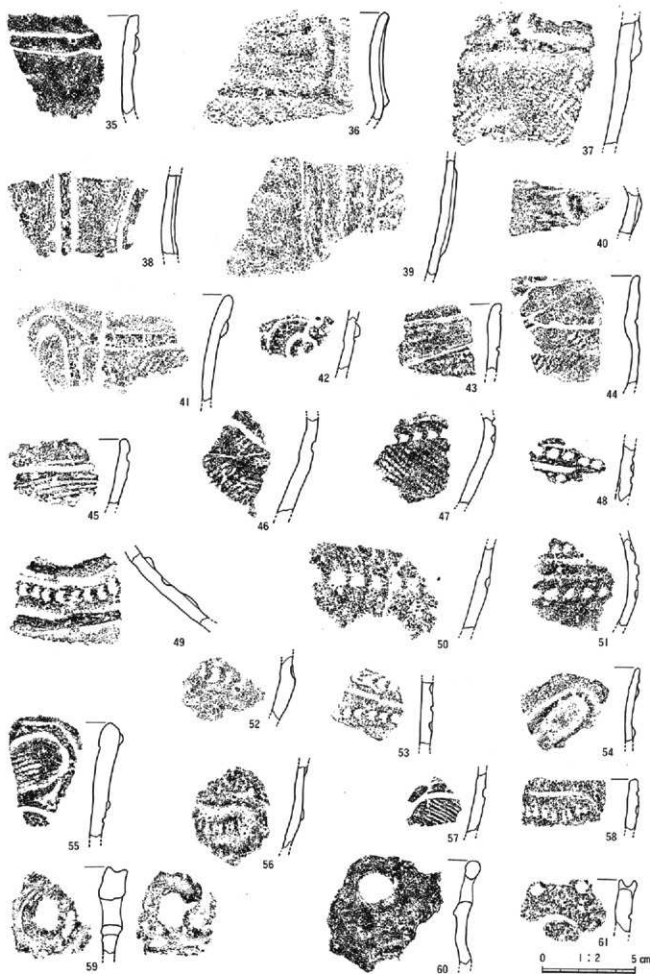
0 1:2 5cm



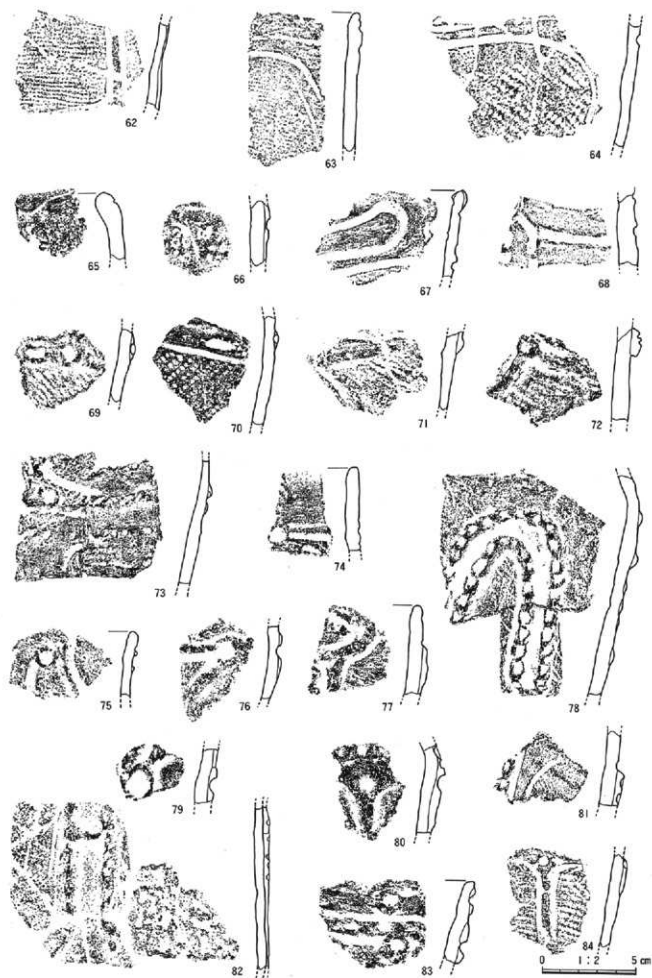




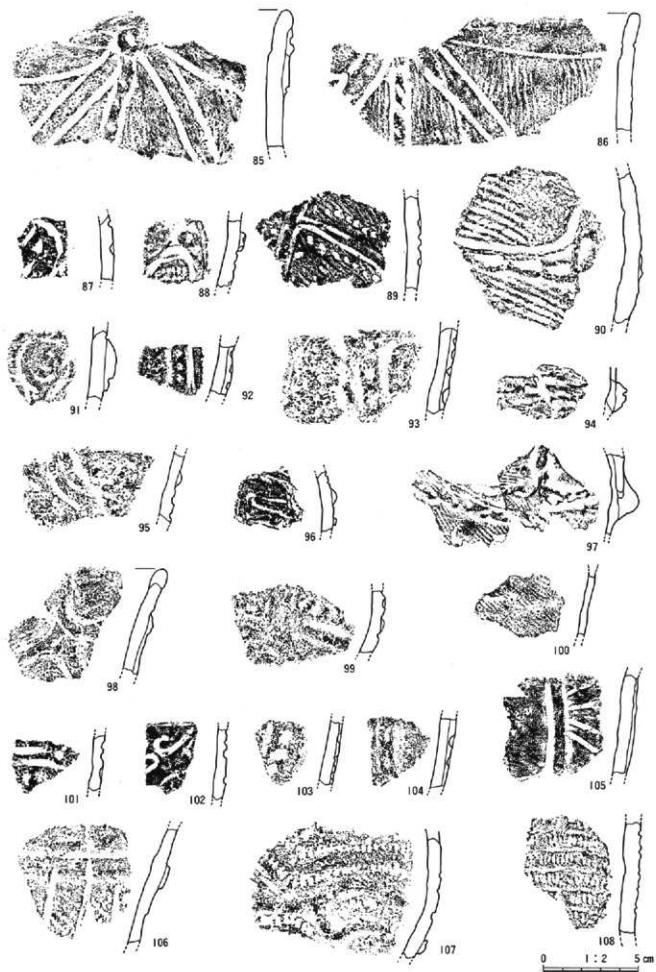
第16圖 縄文土器(4)



第19図 縄文土器 (5)

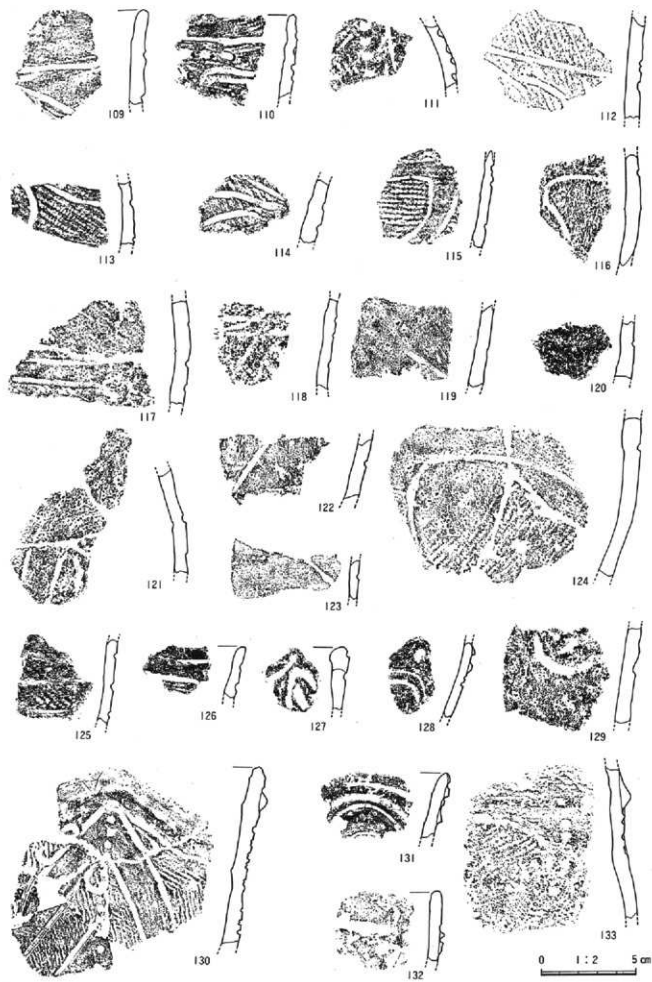


第20圖 編文土器 (6)

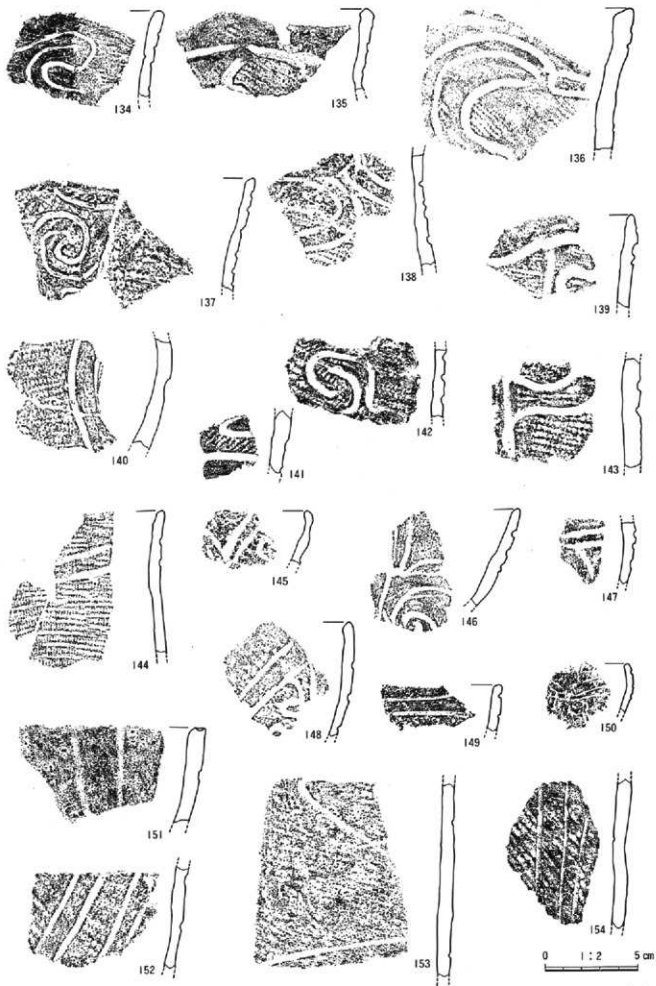


第21圖 縄文土器 (7)

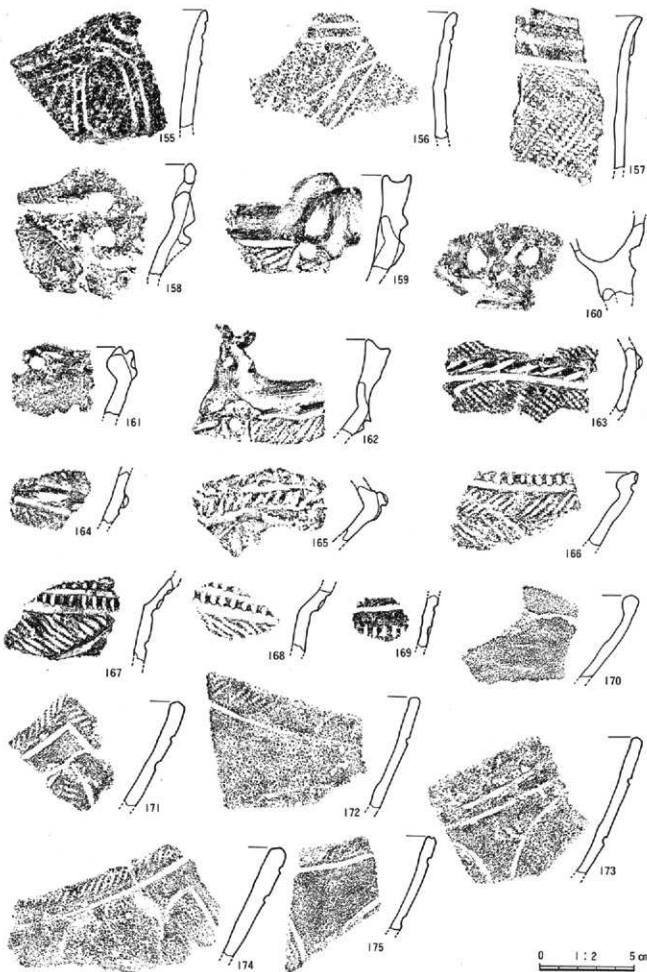
V 出土遺物



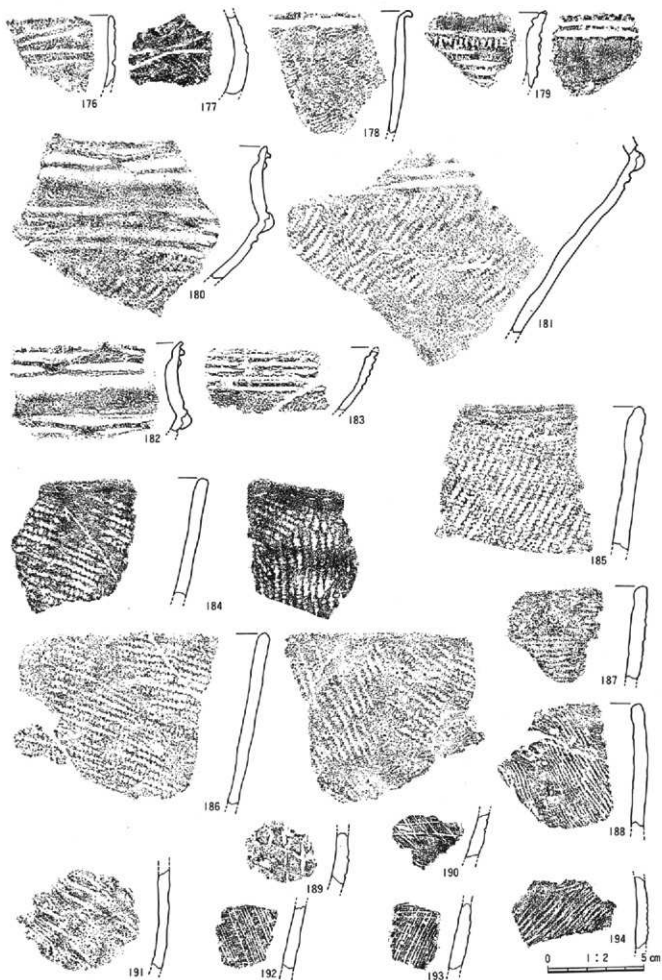
第22圖 縄文土器 (8)



第23回 縄文土器 (9)



第24圖 縄文土器 (10)



第25図 縄文土器 (11)



## V 出土遺物

表 2-2 縄文土器観察表

№	出土地点・層位	器種・部位	文様・調整等	分類	編年	図版
21	C区 I層	深鉢・口辺部	同上	Ⅲ-1	18-21	22-21
22	B区 II層	深鉢・口辺部	隆沈線による渦巻文	Ⅲ-1	18-22	22-22
23	SG2 F1	深鉢・体部	隆沈線による縄文光順区画文	Ⅲ-1	18-23	22-23
24	SG2 F3	深鉢・口縁部	口縁部と体部の境に隆帯	Ⅲ-5	18-24	22-24
25	SG2 F2	深鉢・口縁部	同上	Ⅲ-5	18-25	22-25
26	SK21 F1	深鉢・体部	胴部の隆帯上に刻目文	Ⅳ-2①	18-26	22-26
27	B区 II層	深鉢・口辺部	口縁部と体部の境に隆帯	Ⅲ-4	18-27	22-27
28	SG2 F1	深鉢・体部	隆沈線区画による円形刺突文	Ⅲ-2	18-28	22-28
29	SG2 F1	深鉢・口縁部	沈線区画による円形刺突文	Ⅲ-2	18-29	22-29
30	SG1 F1	深鉢・体部	隆沈線による縄文光順区画文	Ⅲ-1	18-30	22-30
31	SG2 F1	深鉢・体部	隆沈線区画による磨消粗文	Ⅲ-3	18-31	22-31
32	B区 II層	深鉢・体部	同上	Ⅲ-3	18-32	22-32
33	SG2 F2	深鉢・口縁部	横状の把手	Ⅲ-4	18-33	22-33
34	SG1 F1	深鉢・口縁部	口縁部と体部の境に沈線	Ⅲ-6	19-34	23-34
35	SK25 F2	深鉢・口縁部	隆帯上に刺突文	Ⅳ-1②	19-35	23-35
36	SG2 8トレ III層	深鉢・体部	同上	Ⅳ-1②	19-36	23-36
37	SG2 F2	深鉢・口縁部	同上	Ⅳ-1②	19-37	23-37
38	SG1 F4	深鉢・体部	胴部の隆帯上に刺突文	Ⅳ-2②	19-38	23-38
39	SK56 F1	深鉢・体部	同上	Ⅳ-2②	19-39	23-39
40	SG4 F1	深鉢・体部	同上	Ⅳ-2②	19-40	23-40
41	B区 II層	深鉢・口縁部	口縁部から胴部にU字状の隆帯文	Ⅳ-2④	19-41	23-41
42	SK25 F1	深鉢・体部	同上	Ⅳ-2④	19-42	23-42
43	SG2 F1	深鉢・口縁部	口縁部に2条の沈線	Ⅳ-1⑤	19-43	23-43
44	SG2 F2	深鉢・口縁部	頸部に1条の沈線	Ⅳ-1⑤	19-44	23-44
45	SG2 F2	深鉢・口縁部	口縁部に1条の沈線	Ⅳ-1⑤	19-45	23-45
46	SX9 F1	深鉢・口縁部	頸部に1条の沈線	Ⅳ-1⑤	19-46	23-46
47	B区 II層	深鉢・口縁部	体部に連続した刺突文	Ⅳ-2⑥	19-47	23-47
48	SG2 F1	深鉢・口縁部	同上	Ⅳ-2⑥	19-48	23-48
49	SX9 F1	煮・口縁部	胴部に隆帯と刺突文・刻目文	Ⅳ-1②	19-49	23-49
50	SG1 F1	深鉢・体部	体部に連続した刺突文	Ⅳ-2⑥	19-50	23-50
51	SG2 F1	深鉢・口辺部	同上	Ⅳ-2⑥	19-51	23-51
52	SG1 F3	深鉢・体部	同上	Ⅳ-2⑥	19-52	23-52
53	SG4 F2	深鉢・体部	同上	Ⅳ-2⑥	19-53	23-53
54	SG2 F2	深鉢・口縁部	隆帯区画の中にC字形の充塞縄文	Ⅳ-2⑦	19-54	23-54
55	SG2 F2	深鉢・口縁部	同上	Ⅳ-2⑦	19-55	23-55
56	SG1 F3	深鉢・体部	同上	Ⅳ-2⑦	19-56	23-56
57	SG2 F1	深鉢・体部	沈線の中に充塞縄文	Ⅳ-2⑧	19-57	23-57
58	SG2 F1	深鉢・口縁部	沈線区画の中に刻目文	Ⅳ-2⑧	19-58	23-58
59	SG1 F4	深鉢・口縁部	有孔の大きな把手	Ⅳ-2⑧	19-59	23-59
60	SG1 F4	深鉢・口縁部	同上	Ⅳ-2⑧	19-60	23-60
61	SG2 F1	深鉢・口縁部	同上	Ⅳ-2⑧	19-61	23-61
62	B区 II層	深鉢・体部	隆沈線の中に充塞縄文	Ⅳ-2⑧	20-62	24-62
63	SG2 F1	深鉢・口縁部	口縁部から体部に沈線文	Ⅳ-2⑨	20-63	24-63
64	B区 II層	深鉢・体部	胴部に沈線文	Ⅳ-2⑨	20-64	24-64
65	SG2 F3	深鉢・口縁部	蓋文土瘤	Ⅳ-3	20-65	24-65
66	SK54 F1	深鉢・体部	隆帯上に円形の刺突文	Ⅳ-2⑩	20-66	24-66
67	SG2-8トレ III層	深鉢・口縁部	胴部に隆帯と刺突文	Ⅳ-1②	20-67	24-67
68	SG2 F2	深鉢・体部	口縁部に沈線文	Ⅳ-2⑤	20-68	24-68
69	C区 段丘T	深鉢・口縁部	連続状隆帯	V-1	20-69	24-69
70	SG2 F2	深鉢・体部	胴部の隆帯上に刺突文	V-1	20-70	24-70
71	SG1 F3	深鉢・体部	同上	V-1	20-71	24-71
72	SG2 F1	深鉢・体部	胴部に隆帯とボタン状貼付文	V-1	20-72	24-72
73	SK38 F1	深鉢・体部	連続状隆帯とボタン状貼付文	V-1	20-73	24-73
74	SG2 F2	深鉢・口縁部	胴部に沈線と円形刺突文	V-1	20-74	24-74
75	SG2 F2	深鉢・口縁部	ボタン状貼付文と沈線文	V-2	20-75	24-75
76	C区 I層	深鉢・体部	隆帯と円形刺突文	V-2	20-76	24-76
77	SG1 F2	深鉢・口縁部	隆沈線文	V-2	20-77	24-77
78	SG2 F2	深鉢・体部	連続状隆帯による懸垂文	V-2	20-78	24-78
79	SG2 F1	深鉢・体部	隆帯とボタン状貼付文	V-2	20-79	24-79
80	B区 II層	深鉢・体部	連続状隆帯	V-2	20-80	24-80

表2-3 縄文土器観察表

No.	出土地点・層位	器種・部位	文様・調整等	分類	母図	図版
81	SG 2 F 3	深鉢・体部	連続状隆帯と沈線文	V-2	20-81	24-81
82	SK68 F 1	深鉢・体部	同上	V-2	20-82	24-82
83	SG 1 F 1	深鉢・口縁部	連続状隆帯とボタン状貼付文	V-2	20-83	24-83
84	B区 I層	深鉢・体部	隆帯と円形刺突文	V-2	20-84	24-84
85	SK69 F 1	深鉢・口縁部	連続状隆帯とボタン状貼付文	V-2	21-85	25-85
86	SX69 F 1	深鉢・口縁部	連続状隆帯と沈線文	V-2	21-86	25-86
87	A区 II層	深鉢・体部	同上	V-2	21-87	25-87
88	SG 2 F 1	深鉢・体部	ボタン状貼付文と沈線文	V-2	21-88	25-88
89	SG 2 F 1	深鉢・体部	沈線と連続刺突文	V-2	22-89	25-89
90	SG 1 F 3	深鉢・体部	連続状隆帯と沈線	V-2	21-90	25-90
91	SG 2 F 2	深鉢・体部	ボタン状貼付文	V-2	21-91	25-91
92	SG 2 F 2	深鉢・体部	連続状隆帯と沈線	V-2	21-92	25-92
93	SG 1 F 1	深鉢・体部	同上	V-2	21-93	25-93
94	SK36 F 1	深鉢・体部	胴部に連続状隆帯	V-2	21-94	25-94
96	SG 1 F 1	深鉢・体部	連続状隆帯と沈線	V-2	21-96	25-96
97	SK30 F 1	深鉢・体部	隆帯と沈線	V-2	21-96	25-96
97	SK36 F 1	深鉢・体部	T字形の連続状隆帯	V-2	21-97	25-97
98	SG 1 F 2	深鉢・口縁部	連続状隆帯	V-2	21-98	25-98
99	SG 2 F	深鉢・体部	隆帯と連続刺突文	V-2	21-99	25-99
100	SK36 F 1	深鉢・体部	97体部下のLR縄文	V-2	21-100	25-100
101	SG 2 F 3	深鉢・口縁部	沈線と連続刺突文	V-2	21-101	25-101
102	SG 2 F 1	深鉢・体部	同上	V-2	21-102	25-102
103	SG 2 F 1	深鉢・体部	連続状隆帯	V-2	21-103	25-103
104	SG 2 F 1	深鉢・体部	同上	V-2	21-104	25-104
105	SG 2 F 1	深鉢・体部	隆帯と斜方向の沈線文	V-2	21-105	25-105
106	SK37 F 1	深鉢・体部	同上	V-2	21-106	25-106
107	SG 1 F 1	深鉢・体部	隆帯と爪形文	V-3	21-107	25-107
108	SG 2 F 1	深鉢・体部	二種の縄文原体による爪形文的効果	V-3	21-108	25-108
109	SG 2 F 1	深鉢・体部	胴部に山形の沈線文	VI-1	22-109	26-109
110	SG 2 F 1	深鉢・口縁部	刺突文とS字状の沈線文	VI-1	22-110	26-110
111	SG 1 F 3	深鉢・体部	円形刺突文と沈線	VI-1	22-111	26-111
112	SK25 F 1	深鉢・体部	弧状の沈線文	IV-2⑤	22-112	26-112
113	SK38 F 1	深鉢・体部	同上	IV-2⑤	22-113	26-113
114	SG 2 F 1	深鉢・体部	同上	VI-1	22-114	26-114
115	SG 2 F 2	深鉢・体部	倒卵形の磨消縄文	VI-1	22-115	26-115
116	SG 2 F 2	深鉢・体部	同上	VI-1	22-116	26-116
117	SK78 F 1	深鉢・体部	弧状の沈線文	VI-1	22-117	26-117
118	SK39 F	深鉢・体部	渦巻状の磨消縄文・円塗	VI-1	22-118	26-118
119	SX60 F 1	深鉢・体部	同上・円塗	VI-1	22-119	26-119
120	SX69 F 1	深鉢・体部	同上・円塗	VI-1	22-120	26-120
121	SG 1 F 1	深鉢・体部	倒卵形の磨消縄文・円塗	VI-1	22-121	26-121
122	SG 2 F 2	深鉢・体部	同上・円塗	VI-1	22-122	26-122
123	SG 2 F 2	深鉢・体部	同上	VI-1	22-123	26-123
124	SG 1 F 2	深鉢・体部	同上	VI-1	22-124	26-124
125	SG 2 F 1	深鉢・体部	帯状の磨消縄文	VI-1	22-125	26-125
126	SG 2 F 3	深鉢・口縁部	弧状の沈線文	VI-1	22-126	26-126
127	SG 2 F 3	深鉢・口縁部	橋状把手とS字状の沈線文	VI-2	22-127	26-127
128	SG 2 F 1	深鉢・体部	円形刺突文と沈線文	VI-2	22-128	26-128
129	SG 1 F 2	深鉢・体部	渦巻状の磨消縄文	VI-2	22-129	26-129
130	SG 2 F 2	深鉢・口縁部	連続状刺突文とY字形の磨消縄文	VI-2	22-130	26-130
131	B区 II層	深鉢・口縁部	帯状の磨消縄文	VI-2	22-131	26-131
132	SG 1 F 5	深鉢・口縁部	ボタン状貼付文と沈線	VI-2	22-132	26-132
133	B区 II層	深鉢・体部	連続状刺突文と隆沈線文	VI-2	22-133	26-133
134	SG 2 F 1	深鉢・口縁部	S字状の磨消縄文	VI-3	23-134	27-134
135	B区 II層	深鉢・口縁部	同上	VI-3	23-135	27-135
136	SG 2 F 1	深鉢・口縁部	同上	VI-3	23-136	27-136
137	SK25 F 1	深鉢・口縁部	渦巻状の磨消縄文	VI-3	23-137	27-137
138	B区 II層	深鉢・口縁部	弧状の磨消縄文	VI-3	23-138	27-138
139	SG 2 F 3	深鉢・口縁部	S字状の磨消縄文	VI-3	23-139	27-139
140	SG 1 F 1	深鉢・口縁部	渦巻状の磨消縄文	VI-3	23-140	27-140

## V 出土遺物

表2-4 縄文土器観察表

No	出土地点・風位	器種・部位	文様・調整等	分類	番号	版
141	SG 2 F 2	深鉢・体部	S字状の磨消縄文	VI-3	23-141	27-141
142	SG 4 F	深鉢・体部	同上	VI-3	23-142	27-142
143	SG 1 F 2	深鉢・体部	同上	VI-3	23-143	27-143
144	SK 37 F 1	深鉢・口縁部	沈線による山形文	VI-3	23-144	27-144
145	SX 69 F 1	深鉢・口縁部	沈線による山形文と渦巻文	VI-3	23-145	27-145
146	SG 1 F 1	浅鉢・口縁部	同上	VI-3	23-146	27-146
147	SG 2 F 1	深鉢・口縁部	沈線による山形文	VI-3	23-147	27-147
148	SK 69 F 1	深鉢・口縁部	同上	VI-3	23-148	27-148
149	SK 25 F 1	深鉢・口縁部	沈線による帯状の磨消縄文	VI-3	23-149	27-149
150	SK 37 F 1	深鉢・口縁部	弧状の縦い沈線文	VI-4	23-150	27-150
151	SG 2 F 2	深鉢・口縁部	口唇部に刻目、口縁部に太い縦方向の磨消縄文	Ⅶ-1	23-151	27-151
152	B区 II層	深鉢・体部	縄文地に粗い平行沈線文	VI-4	23-152	27-152
153	SK 34 F 4	深鉢・体部	同上	VI-4	23-153	27-153
154	SG 2 F 2	深鉢・体部	同上	VI-4	23-154	27-154
155	SK 25 F 1	深鉢・口縁部	頸部にU字状の沈線文	IV-1 ㊦	24-155	28-155
156	SK 25 F 1	深鉢・体部	同上	IV-1 ㊦	24-156	28-156
157	SK 34 F 1	深鉢・口縁部	口縁部と体部の境に沈線文	Ⅲ-6	24-157	28-157
158	SK 48 F 2	深鉢・口縁部	短い連続状の円形刺突文	Ⅶ-2	24-158	28-158
159	SK 55 F 1	深鉢・口縁部	楕円状把手上の円形刺突文	Ⅶ-1	24-159	28-159
160	SG 2 F 2	深鉢・口縁部	同上	Ⅶ-1	24-160	28-160
161	SG 1 F 1	深鉢・口縁部	同上	Ⅶ-1	24-161	28-161
162	SG 2 F 2	深鉢・口縁部	同上	Ⅶ-1	24-162	28-162
163	SG 1 F 5	鉢・体部	頸部に隆帯と斜方向の刻目	Ⅶ-1	24-163	28-163
164	SG 2 F 3	鉢・体部	同上	Ⅶ-1	24-164	28-164
165	SG 2 F 1	鉢・体部	同上	Ⅶ-1	24-165	28-165
166	SK 43 F 1	鉢・口縁部	口唇部に刻目、口縁部に羽状縄文	Ⅶ-2	24-166	28-166
167	SG 2 F 1	鉢・体部	頸部に刻目と縄文	Ⅶ-2	24-167	28-167
168	SG 2 F 3	鉢・体部	同上	Ⅶ-2	24-168	28-168
169	SG 2 F 1	鉢・体部	同上	Ⅶ-2	24-169	28-169
170	CK 1層	浅鉢・口縁部	肥厚した口縁部と曇文	Ⅶ-4	24-170	28-170
171	SG 2 F 2	深鉢・口縁部	口縁部と体部上半に幅広い曇文帯	Ⅶ-3	24-171	28-171
172	SG 2 F 2	深鉢・口縁部	同上	Ⅶ-3	24-172	28-172
173	SG 1 F 2	深鉢・口縁部	同上	Ⅶ-3	24-173	28-173
174	SG 2 F 2	深鉢・口縁部	同上	Ⅶ-3	24-174	28-174
175	SG 2 F 2	深鉢・口縁部	同上	Ⅶ-3	24-175	28-175
176	SG 2 F 1	浅鉢・口縁部	沈線による三叉文	IX-1	25-176	29-176
177	SG 4 F 4	浅鉢・口縁部	同上	IX-1	25-177	29-177
178	SG 3 7トレ IV層	深鉢・口縁部	細いLR縄文	IX-4	25-178	29-178
179	SG 2 F 1	深鉢・口縁部	平行沈線と刻目文	IX-2	25-179	29-179
180	SG 2 8トレ III層	浅鉢・体部	隆帯を伴うI字文	IX-2	25-180	29-180
181	SG 2 8トレ III層	浅鉢・口縁部	同上	IX-2	25-181	29-181
182	SG 2 8トレ III層	浅鉢・口縁部	同上	IX-2	25-182	29-182
183	SG 2 F 1	浅鉢・口縁部	平行沈線によるI字文	IX-3	25-183	29-183
184	B区 II層	深鉢・口縁部	表裏縄文	IV-VI	25-184	29-184
185	SG 2 8トレ III層	深鉢・口縁部	L R縄文	Ⅲ-V	25-185	29-185
186	B区 II層	深鉢・口縁部	表裏縄文	IV-VI	25-186	29-186
187	SG 2 F 2	深鉢・口縁部	R L縄文	IV-VI	25-187	29-187
188	SG 2 F 2	深鉢・口縁部	斜位の燃赤文	IV-VI	25-188	29-188
189	SG 1 F 1	深鉢・体部	斜位の燃赤文	IV-VI	25-189	29-189
190	SK 24 F 1	深鉢・体部	同上	IV-VI	25-190	29-190
191	SG 2 F 1	深鉢・体部	斜位の燃赤文	IV-VI	25-191	29-191
192	SG 2 F 3	深鉢・体部	細い刷毛目文	Ⅶ-4	25-192	29-192
193	SG 2 F 3	深鉢・体部	同上	Ⅶ-4	25-193	29-193
194	SX 60 F 1	深鉢・体部	斜位の燃赤文	IV-VI	25-194	29-194

## 2 縄文土器の底部（第27～30図、表3、図版30～32）

富沢Ⅰ遺跡からは破片を含め合計68点の縄文土器の底部が確認されている。出土地点を地区毎にみると、A区のSG1から23点、B区の土壇および包含層から24点、C区のSG2・SX4から21点となっており、各地区から平均して出土していることがわかる。

これらは底部の圧痕文によって、(1)網代痕、(2)木葉痕、(3)無文、(4)不明の四つに大別される。つぎに、各区分毎に順をおって説明する。

### (1)網代痕について

網代痕を有する底部は37点出土し、そのうち編み方が判別できる底部は30点である。編み方の分類については、松岡敦子氏による仙台市六反田遺跡の分析結果を参考にした（文献16）。松岡氏は六反田遺跡の資料をもとに、縄文土器の底部にみられる網代痕をⅠ～Ⅶ類まで7形式に分類しているが、富沢Ⅰ遺跡の資料にはこのうちⅤ類とⅦ類に相当するものがいないため、5形式に分類して説明することにする。

各形式の組織図、単位、編み方の内容については、松岡氏の記述をそのまま引き継いで第30図に網代模式図を載せてある。図の表示は、タテの材がヨコの材の上にあるところを斜線で示し、タテの材がヨコの材の下にあるところを白で示してある。

Ⅰ類は「1本越え、1本潜り」に編まれているもので、B区SK34から1点だけ出土している（第27図1）。Ⅱ類は「1本越え、2本潜り、1本送り」に編まれているもので、各区からあわせて13点出土している。左1本送り（2A類；第27図2～8）と、右1本送り（2B類；第27図2～12）の割合は、7：6でほぼ同じである。2・3・6・9・12には、網代痕を付した後にミガキが認められる。

Ⅲ類は「2本越え、2本潜り、1本送り」に編まれているもので、松岡氏はこれを「網代あみ（2本とび）」と呼んでいる。SG1・2大溝から計3点出土している。左1本送り（3A類；第27図13）と、右1本送り（3B類；第28図14・15）の割合は、1：2である。13には、網代痕を付した後にミガキが認められる。Ⅳ類は「3本越え、3本潜り、1本送り」に編まれているもので、松岡氏はこれを「網代あみ（3本とび）」と呼んでいる。本類はSG1河川跡とB区Ⅰ層から各1点（第28図16）出土している。

Ⅴ類にはおもてとうらの二種類の圧痕がみられる。おもては「2本潜り、2本越え」に編まれているもの、うらは「2本越え、2本潜り」に編まれているものである。松岡氏の7形式分類ではⅤ類に相当する。Ⅴ類・おもては各区から10点（第28図17～23）、Ⅴ類・うらはB区SK62から1点（第28図25）出土している。19・25には、網代痕を付した後にミガキが認められる。

底部の網代痕のうち編み方が不明なものが、各区から計7点（第28図24・26、第29図26～30）出土している。30には、網代痕を付した後にミガキが認められる。

編物圧痕の付されている土器の底径は、78～160mmの範囲におさまるが、底径100～120mmものが多く出土している。

## (2)木葉痕について

木葉痕を有する縄文土器の底部は、計5点出土している。木葉を1枚のみ使用しているもの(第29図31・33)と、木葉を2～3枚重ねて使用しているもの(第29図32、第30図35・37)の二種類がある。出土地点はA～C区の各区にわたる。2枚以上の葉を止めるために通すヨコ材の存在は確認されなかった。木葉の木の種類については、正式な鑑定を行っていない。

木葉痕の付されている土器の底径は、96～155mmの範囲におさまるが、底径が130mmを超えるものも3点あり、縄物圧痕を有する底部に比べてどちらかといえば底径が大きい。

## (3)無文について

無文は、底部が全面丁寧に研磨されているもので、ある種の動物(編物、木葉など)が利用されたとしてもその圧痕の凹みのほとんどが磨消されている可能性があるものも含まれる。

富沢I遺跡ではB区のSK37・48から2点(第17図16、第29図34)出土しているが、いずれも底径が50mm未満と小さい台付鉢と小形深鉢のものである。

## (4)不明

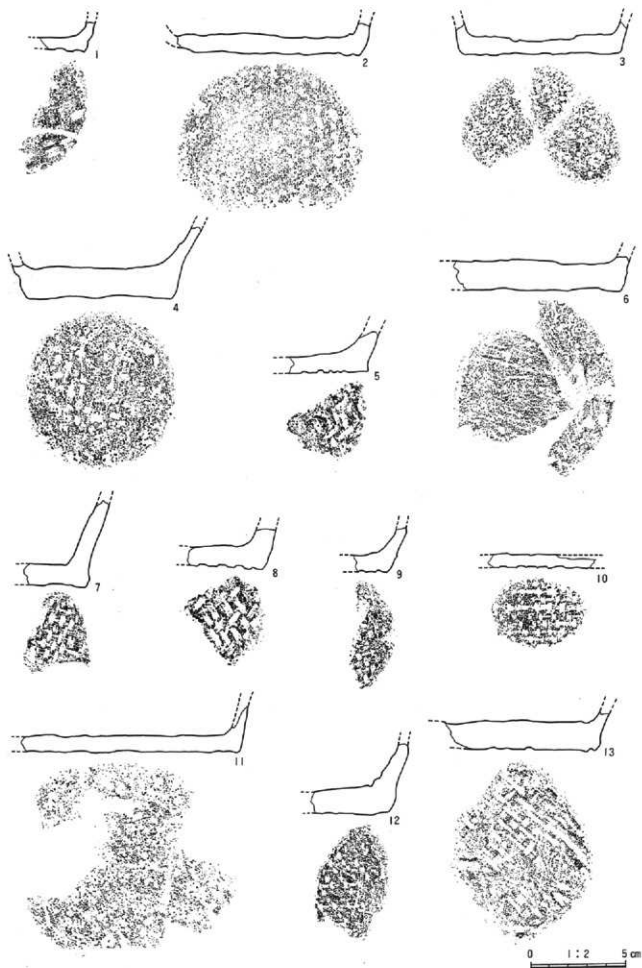
不明圧痕ののち研磨されている底部と、摩滅や剝落のため内容が不明な底部を一括してこの中に含める。あわせて24点出土している。

第30図36は、全面にミガキが施されているが、細かい筋が2～3mmの幅でみられ、イネ科植物などの中空な茎をタテにさき、それを広げ敷き並べた可能性もある。第17図14はほぼ完形の深鉢の底部であるが、摩滅や剝落のため内容が不明である。

富沢I遺跡出土の底部資料68点は、分類毎に多い順に並べると、網代圧痕II類13点、同V類11点、同不明7点、同III類3点、木葉痕2枚葉以上3点、同1枚葉2点、無文2点網代圧痕同IV類2点、I類1点、不明圧痕8点、不明16点となる。量的に多いのが網代圧痕II類と同V類で、それぞれ全体の19.1%、16.2%を占める。また、網代圧痕計37点における比率は、網代圧痕II類が網代圧痕全体の35.1%、同II類が29.7%を占める。

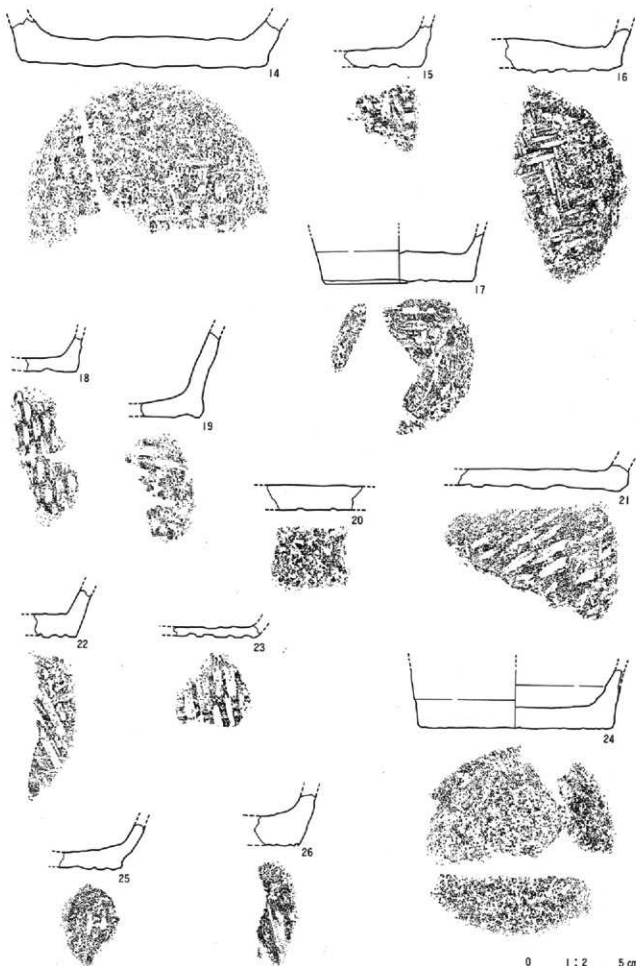
富沢I遺跡の底部圧痕の時期は縄文時代中期末から後期初頭頃と思われるが、時期的にほぼ同じである仙台市六反田遺跡では、網代圧痕VI類(富沢I遺跡のV類)が網代圧痕全体の40.6%、同II類が22.3%と多くを占めている。II類とV類の比率がやや異なるが、富沢I遺跡の総資料の少なさを加味すればほぼ同じ傾向と考えてよいと思われる。

つぎに木葉痕についてであるが、六反田遺跡では27点の木葉を使用している底部が確認されている。とくに底径が100mm以上の底部について編物の上に木葉を置いたり、木葉を2枚重ねる等の工夫があったことが想定されている。富沢I遺跡の2枚以上の木葉痕のある底部3点の底径もすべて96mm以上となっており、その可能性は高いと考えられる。

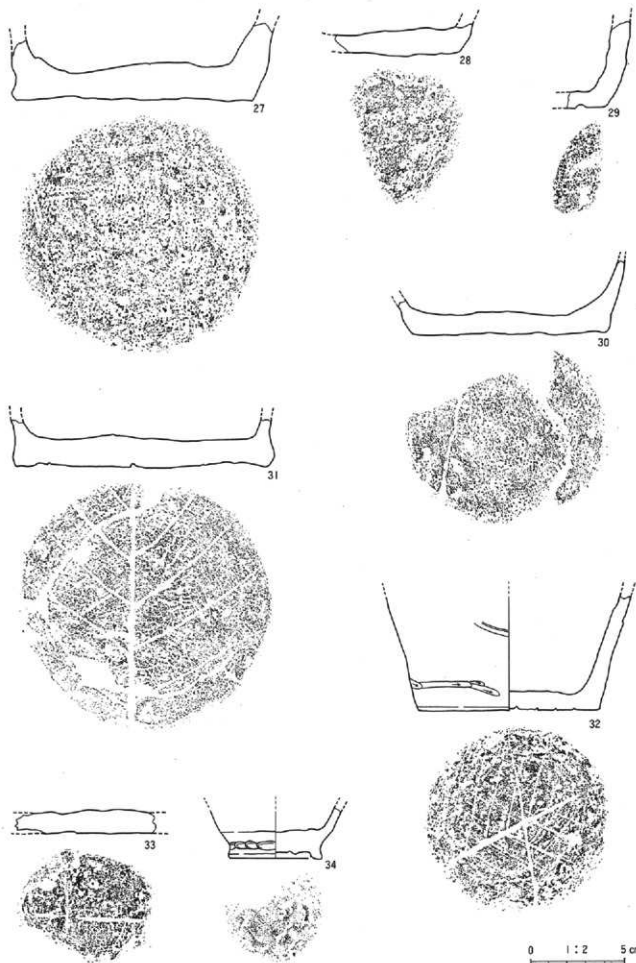


第26圖 縄文土器底部 (1)

V 出土遺物



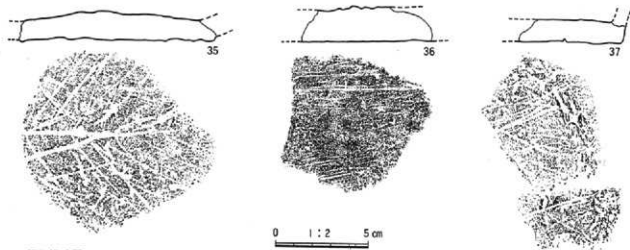
第27圖 縄文土器底部(2)



第28圖 縄文土器底部 (3)

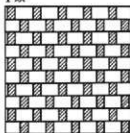


V 出土遺物



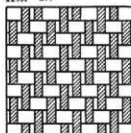
〈網代横式図〉

I類



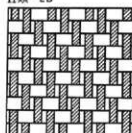
単位  
編み方 横(白コ) 1本起え 1本落り  
縦(クサ) 1本落り 1本起え

II類-2A



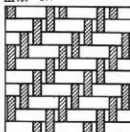
単位  
編み方 横(白コ) 1本起え 2本落り  
縦(クサ) 1本落り 2本起え

II類-2B



単位  
編み方 横(白コ) 2本起え 1本落り  
縦(クサ) 2本起え 1本落り

III類-3A



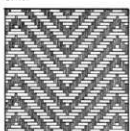
単位  
編み方 横(白コ) 2本起え 2本落り  
縦(クサ) 2本落り 2本起え

III類-3B



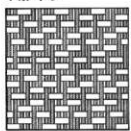
単位  
編み方 横(白コ) 2本起え 2本起え  
縦(クサ) 2本起え 2本落り

IV類



単位  
編み方  
横(白コ) 3本起え 3本落り  
縦(クサ) 3本落り 3本起え

V類・うら



単位  
編み方 横(白コ) 2本起え 4本落り  
縦(クサ) 1本落り 1本起え  
1本落り 4本起え  
1本落り 1本起え

V類・おもて



単位  
編み方 横(白コ) 2本起え 4本起え  
縦(クサ) 1本起え 1本落り  
1本起え 4本落り  
1本起え 1本落り

表3-1 縄文土器底部観察表

No	出土地点・層位	器種	分類	備考	口径	器高	器厚	捺痕	図版
1	SK34 F4	深鉢	縄代Ⅰ類		(27)	(16)	5.5	26-1	30-1
2	SK48 F2	深鉢	縄代Ⅱ類2A	のちミガキ	94	(16)	10	26-2	30-2
3	SK79 F1	深鉢	縄代Ⅱ類2A	のちミガキ	86	(17)	10	26-3	30-3
4	SG1 F2	深鉢	縄代Ⅱ類2A		78	(38)	16	26-4	30-4
5	SG2 F2	深鉢	縄代Ⅱ類2A		(42)	(18)	10	26-5	30-5
6	SG2 F2	深鉢	縄代Ⅱ類2A	のちミガキ	(85)	(18)	15	26-6	30-6
7	SG2 F1	深鉢	縄代Ⅱ類2A		(100)	(45)	10	26-7	30-7
8	SG2 F1	深鉢	縄代Ⅱ類2A		(38)	(21)	7	26-8	30-8
9	B区 I層	深鉢	縄代Ⅱ類2B	のちミガキ	(19)	(24)	9	26-9	30-9
10	SG1 F2	深鉢	縄代Ⅱ類2B		(51)	(8)	8	26-10	30-10
11	SG2 F1	深鉢	縄代Ⅱ類2B		(114)	(12)	9	26-11	30-11
12	B区 I層	深鉢	縄代Ⅱ類2B	のちミガキ	(36)	(37)	12	26-12	30-12
13	SG1 F1	深鉢	縄代Ⅱ類3A	のちミガキ	(77)	(22)	15.5	26-13	30-13
14	SG1 F3	深鉢	縄代Ⅱ類3B		130	(26)	16	27-14	31-14
15	SG2 F2	深鉢	縄代Ⅱ類3B		(32)	(22)	9	27-15	31-15
16	SG1 F1	深鉢	縄代Ⅲ類4A		(53)	(22)	18	27-16	31-16
17	SG1 F3	深鉢	縄代Ⅲ類おもて		80	(24)	17	27-17	31-17
18	SK40 F1	深鉢	縄代Ⅲ類おもて		(25)	(19)	8	27-18	31-18
19	SK69 F1	深鉢	縄代Ⅲ類おもて	のちミガキ	(30)	(35)	7	27-19	31-19
20	SG2 F1	深鉢	縄代Ⅲ類おもて		(38)	13	13	27-20	31-20
21	SG1 F2	深鉢	縄代Ⅲ類おもて		(84)	(13)	10	27-21	31-21
22	SG2 F1	深鉢	縄代Ⅲ類おもて		(21)	(25)	11.5	27-22	31-22
23	SG4 F1	深鉢	縄代Ⅲ類おもて		(42)	(6)	6	27-23	31-23
24	SG1 F3	深鉢	縄代Ⅲ類(不明)		102	(30)	11	27-24	31-24
25	SK62 F1	深鉢	縄代Ⅲ類うら	のちミガキ	(32)	(24)	8	27-25	31-25
26	B区 II層	深鉢	縄代Ⅲ類(不明)		(19)	(27)	15.5	27-26	31-26
27	SG1 F3	深鉢	縄代Ⅲ類(不明)		124	(34)	20	28-27	32-27
28	SG2 F2	深鉢	縄代Ⅲ類(不明)		(60)	(18)	9	28-28	32-28
29	SG2 F2	深鉢	縄代Ⅲ類(不明)		(22)	(41)	8	28-29	32-29
30	SG2 F1	深鉢	縄代Ⅲ類(不明)	のちミガキ	(102)	(38)	12	28-30	32-30
31	SK25 RP7	深鉢	木葉直	1枚葉	138	(23)	15	28-31	32-31
32	SK78 F1	深鉢	木葉直	二枚葉重ぬ	96	(60)	10	28-32	32-32
33	SG1 F3	深鉢	木葉直	1枚葉	(71)	(11)	12	28-33	32-33
34	SK41 F	付鉢	無文	のちミガキ	48	(26)	14	28-34	32-34
35	SG2 F1	深鉢	木葉直	2〜3枚葉重ぬ	(105)	(10)	15	29-35	32-35
36	B区 II層	深鉢	不明圧痕	のちミガキ	(70)	(18)	18	29-36	32-36
37	SG2 F1	深鉢	木葉直	2〜3枚葉重ぬ	(55)	(11)	12	29-37	32-37
38	SK37 F1	小形深鉢	無文	のちミガキ	42	(63)	5	29-3	32-3
39	SK48 F2	深鉢	不明		37	(17)	9.5	29-4	32-4
41	B区 I層	深鉢	縄代Ⅳ類4A	のちミガキ	(71)	(42)	12		
42	SG1 F3	深鉢	縄代Ⅳ類2B	のちミガキ	(53)	(41)	12		
43	EU 77	深鉢	縄代Ⅳ類おもて		164	(10.3)	14		
44	SG1 F3	深鉢	縄代Ⅳ類おもて		(56)	(22)	12		
45	SG1 F1	深鉢	縄代Ⅳ類2B		(19)	(65)	8		
46	SK21 F3	深鉢	不明		38	(19)	6		
47	SG2 F2	深鉢	不明圧痕		23	(30)	18		
48	SG2 F1	深鉢	不明圧痕		(48)	(35)	12		
49	SG1 F3	深鉢	不明	のちミガキ	(50)	(21)	12		
50	SK21 F3	深鉢	不明圧痕	のちミガキ	122	46	16		
51	SG1 F2	深鉢	不明		(43)	(42)	10		
52	SG1 12トレ III層	深鉢	不明		(23)	(7)	23		
53	B区 III層	深鉢	不明圧痕	のちミガキ	(60)	(33)	11		
54	SG1.2トレ IV層	深鉢	不明		(28)	(39)	9		
55	SG2 F1	深鉢	不明	のちミガキ	(72)	(12)	8		
56	SG1 F1	深鉢	不明		(23)	(19)	8		
57	SG2 F1	深鉢	不明		(30)	(30)	9		
58	SG3.7トレ IV層	深鉢	不明	上げ底風	42	(10)	10		
59	SG2トレIIIIV	深鉢	不明		(52)	(3)	15		
60	SG1 F4	深鉢	不明圧痕		(62)	(29)	8.5		
61	EP F1	深鉢	不明		(41)	(22)	8.5		
62	SG1 F2	深鉢	不明圧痕		(88)	(45)	8		
63	B区 I層	深鉢	不明圧痕		(32)	39	8		
64	B区 II層	深鉢	不明	上げ底風	55	(125)	8		
65	SG2 F1	深鉢	不明		(14)	(16)	6.5		
66	SG1 F2	深鉢	縄代Ⅲ類(不明)		(80)	(8)	12.5		
67	SG1 F3	深鉢	不明		(15)	(19)	10		
68	SG2 F2	深鉢	不明	上げ底風	50	56	10		

## 3 土製品・石製品 (第30図、図版)

## (1)円盤状土製品 (第30図1~16)

円盤状土製品は16点出土している。ほとんどがSG 2 河川跡の覆土から出土したもので土壌出土のものはSK 24土壌の1点(第30図1)だけである。

すべて無孔のもので、土器の体部破片を利用している。文様は有文のもの、地文のみもの、無文のものがあり、そのいずれかに集中することはない。大きさは直径3.5~4.5cmで4cm前後のものが多い。重量は6~33gまで種々である。円盤状土製品の周縁は敲打調整が加えられ全体の形が作られている。明らかに周縁を研磨しているものは認められない。

時期については、文様のあるものが少なくはっきりしないが、第30図11等から大半は縄文時代中期末葉から同後期初頭頃に属するものと思われる。

## (2)円盤状石製品 (第30図18~24)

円盤状石製品は11点出土している。大半がSG 1 河川跡とSG 2 河川跡の覆土から出土したもので、土壌出土のものはない。

ほとんどが扁平な石の周縁を打ち欠いて、円盤状に仕上げたものであるが、22と25は上面に山型の稜を有する。大きさは直径1.6~4.5cmで3cm前後のものが多い。重量は4~107gまで種々である。

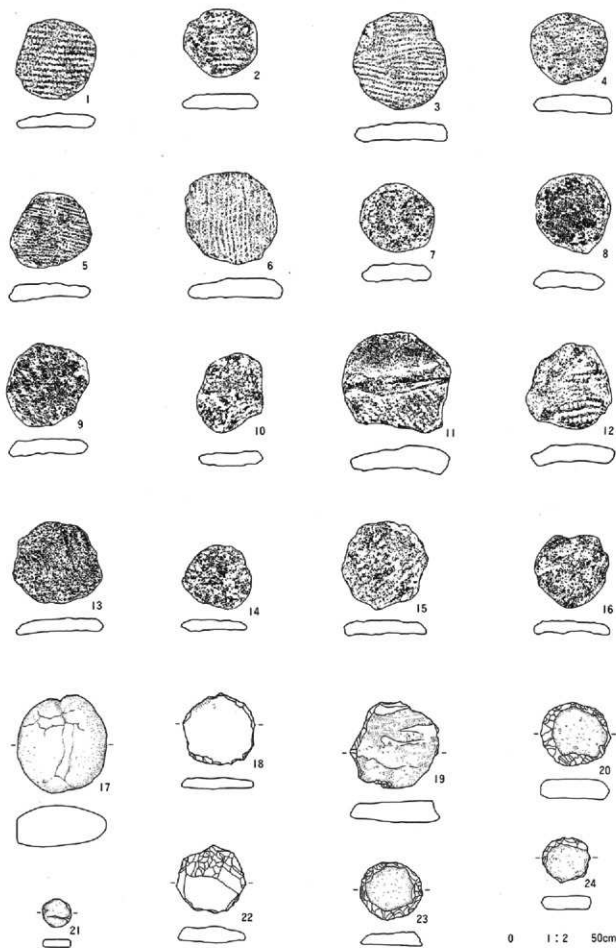
時期についてははっきりしないが、富沢I遺跡全体の出土土器からみて縄文時代中期末葉から同後期中葉に属するものと思われる。

## (3)石錘 (第30図17)

SG 1 河川跡から石錘が1点出土している。平面が略円形で、両端に擦切り手法による切れ目が入っている。重量は235gを量る。

表4 円盤状土製品・石製品

No.	区分	出土地点・層位	重量	押印	図版	No.	区分	出土地点・層位	重量	押印	図版
1	円盤状土製品	SK 24-F 1	13.8	30-1	33-1	15	円盤状土製品	SG 2-F 2	15.8	30-15	33-15
2	円盤状土製品	SG 2-F 1	11.7	30-2	33-2	16	円盤状土製品	SG 2-F 2	10.1	30-16	33-16
3	円盤状土製品	SG 2-F 1	24.2	30-3	33-3	17	石錘	SG 1-F 3	235.4	30-17	33-17
4	円盤状土製品	SG 2-F 1	16.6	30-4	33-4	18	円盤状石製品	SG 1-F 3	33.6	30-18	33-18
5	円盤状土製品	SG 2-F 1	16.1	30-5	33-5	19	円盤状石製品	SG 3-8トレ	107.9	30-19	33-19
6	円盤状土製品	SG 2-F 2	31.5	30-6	33-6	20	円盤状石製品	SG 2-F 3	50.0	30-20	33-20
7	円盤状土製品	SG 2-F 1	10.5	30-7	33-7	21	円盤状石製品	B区I層	4.1	30-21	33-21
8	円盤状土製品	SG 2-F 1	13.4	30-8	33-8	22	円盤状石製品	SG 2-F 2	36.2	30-22	33-22
9	円盤状土製品	SG 2-F 2	15.3	30-9	33-9	23	円盤状石製品	SG 2-F 1	30.7	30-23	33-23
10	円盤状土製品	SG 2-F 1	11.5	30-10	33-10	24	円盤状石製品	SG 2-F 1	16.4	30-24	33-24
11	円盤状土製品	SG 2-F 1	33.0	30-11	33-11	25	円盤状石製品	SG 1-F 1	19.55		
12	円盤状土製品	SG 2-F 1	20.7	30-12	33-12	26	円盤状石製品	SG 2-F 2	95.44		
13	円盤状土製品	SG 2-F 3	15.6	30-13	33-13	27	円盤状石製品	SG 1-F 3	14.70		
14	円盤状土製品	SG 2-F 2	6.2	30-14	33-14	28	円盤状石製品	6トレ12-14G II	42.17		



第30圖 土製品・石製品

## 4 石器

本遺跡の第1次、第2次調査では、約25,500点の石器が出土した。そのうち剥片素材のいわゆるtoolが1,091点、磨製石器が340点あるほかは、ほとんどが石器生産にかかわる剥片、石核類である。器種は、剥片を素材とするものに石鏃、尖頭器、石錐、石匙、石笥、搔器、削器、ピース・エスキューのほか、剥片の縁辺に簡単な2次調整あるいは使用の際の刃こぼれがみられるものがある。また、磨製石器では磨製石斧、磨石、凹石、石皿が出土している。以下では各器種毎の分類を中心にその概要を述べる。

## 石 鏃 (第31図1~29・表5・図版34-1~46)

石鏃は46点が出土した。そのうちの28点がSG1堆積土層内からの出土である。使用されている石材は、玉髄質、鉄石英が各2点、黒輝石が1点あるほかは、すべて頁岩である。これらは基部の形態により大別され、さらに細分できる。

I類：基部側に挟り込みのはいるもの。全部で25点の出土がある。

a：丸みをおびた深い挟り込みがはいるもの。さらに細分できる。

1. 左右対称形となるもの(第31図1・3~6・8・10~12・14・19、図版34-1・3~6・8・10・12~14・16・20・24)。13点が出土した。

2. 片脚となるもの(第31図2、図版34-2)。1点が出土した。

b：半円形となる浅い挟り込みがはいるもの。これらも同様に細分される。

1. 左右対称となるもの(第31図9・18、図版34-9・11・18・23)。

2. 片脚が小さく左右非対称となるもの(第31図7・17、図版34-7・17・22)。

1が4点、2が3点の出土である。

c：挟り込みの形が「v」字状となるもの(第31図13・15・16、図版34-15・19・21)。挟りの状態はaよりもさらに深くなる。3点が出土している。

d：基部に凹弧状のわずかな挟り込みがはいるもの(図版34-25)。1点が出土している。

II類：基部側が丸みを帯びて突出する、いわゆる円基鏃(第31図20~22・23~25、図版34-26~32)。7点が出土した。I類よりも大形化する傾向がみられる。

III類：基部側が直線状となるもの(第31図26、図版34-33・34)。いわゆる平基鏃である。2点が出土した。大きさ、重量ともにII類に近い値をとる。

IV類：基部に茎をもついわゆる有茎鏃(第31図27・28、図版34-35・36)。2点出土。

V類：特殊な形態となるもの。図版34-37は尖頭部中央で肩を張り、下半部の平面形が凹弧状となる。基部側は緩い凸弧状となる。掲載した1点のみの出土である。

VI類：折損して基部の形態が不明なものをVIa(図版34-39・41・43・46)、石鏃の未成品と考えられるものをVIb(第31図29、図版34-38・40・42・44・45)とした。

VIaが4点、VIbが5点出土している。

## 尖頭器 (第31図30・31・第32図32、表7、図版34-47~51)

両面加工または片面加工によって尖った先端部を作出した石器を尖頭器とした。以下のように分類できる。

- I類：背面側、主要剥離面側ともに素材の中央に達する加工で覆われ、一縁辺が凹弧状、もう一縁辺が凸弧状となるもの(第31図30・31、図版34-47~49)。いわゆる「嘴形石器」である。大きさは、円基または平基の石鏃と同程度であるが、左右非対称となるため先端部が凹弧側に傾く。3点が出土した。石材は2点が玉髄質、1点が頁岩である。
- II類：中央部付近が石器の最大幅となり、平面形が木葉形となる槍先形の尖頭器である(第32図32、図版34-50)。図示した1点が出土した。背面側は全面が調整加工で覆われるが、主要剥離面側は右側縁および両末端部に加工が施される。
- III類：尖頭部の両側縁が直線状となり基部が凸弧状を呈する、円基鏃を大きくしたような平面形をもつもの(図版34-51)。1点が出土した。
- IV類：基部資料を一括した。図示しなかったが4点出している。木葉形あるいは柳葉形となる尖頭器の基部になるものとみられるが、石鏃の基部の可能性もある。

## 石鏃 (第32図33~47、表6、図版35・36)

素材となった剥片の縁辺に調整加工を施して、その一端あるいは相対する両端に尖った先端部を作出した石器を石鏃とした。全部で61点出している。石材は玉髄質が1点あるほかは頁岩製である。これらは形態の特徴によって以下のように分類される。

- I類：長い尖頭部をもつもの。尖頭部の加工が顕著であり、基部との間にノッチがはいるため部位の区別は明瞭である。さらに細分される。
- a：平面形が左右対称となるもの(第32図33・34・36・37・39~41・43・44、図版35-1・3・4・6~8・11・12・14・16・18・19・22・23・図版36-31・32・35・36・39・41・43~45)。24点の出土があり、完形品が10点、先端部を欠損するものが14点ある。
- b：基部の片側が張り出して左右非対称形となるもの(第32図42・47、図版35-2・9・15・20・21・26・図版36-37)。8点が出土した。そのうち完形品が4点、先端部を欠損するものが3点、基部を欠損するものが1点ある。
- II類：細長い棒状の形態となるもの(第32図35、図版35-5)。図示したのもも含めて3点の出土がある。調整加工は背面側の両側縁部と末端部分に限られ、尖頭部と基部の境界が不明瞭である。
- III類：素材となる剥片の一端を尖らせて短い尖頭部を作出したもの(第32図38・46、図版35-10・13・17・25・27・図版36-28~30・33・34・38・40・42・46・47・49~55)。23点が出土した。基部と尖頭部の境界が不明瞭となるものが多い。
- IV類：I~III類に該当しない特殊な形態となるもの(第32図45、図版35-24・図版36-

48)。全部で3点が出土している。第32図45は、尖頭部を欠損するが基部の平面形が三角形を呈し、背面側基部の全面にわたって調整加工が施される。主要剥離面側は尖頭部のみ加工となる。石匙からの転用の可能性が高い。図版35-24は平面形「T」字形を呈し、背面側の片面加工によって分厚く短い尖頭部を作出している。基部と尖頭部との境界はノッチによって明瞭に区別できる。

#### 石 匙 (第32図48~55・表8・図版37)

相対する二つのノッチを入れることによって作出されたつまみをもつ石器を石匙とした。12点の出土がある。石材にはすべて頁岩を用いている。これらは、つまみと刃部との位置関係によって以下のように分類できる。

I類：つまみを上方に置いたときに側縁が刃部となる縦形のもの。

a：左右が対称形となるもの。先端部の形態によってさらに細分できる。

1. 尖頭器のように尖った先端部をもつもの(第32図50~52、図版37-5・7・8)。3点が出土した。このうち第32図50は半両面加工であるが、51・52はつまみ部を除いて主要剥離面側への加工が認められない。
2. 先端部が幅広となり、ここにも加工があつて刃部となり得るもの(第32図48、図版37-3)。1点のみの出土である。
3. 折損のため先端部の形態が不明なもの(第32図55、図版37-2・11)。2点が出土した。

b：左右が非対称なもの。

1. 左側縁が「く」字状となり、右側縁が凸弧を描くもの(第32図54、図版37-10)。図示した1点の出土である。
2. 左側縁が凸弧状、右側縁が直線状となるもの(第32図49、図版37-1・4・12)。3点出土しているが、いずれも下半部を折損する。
3. 左側縁が直線状、右側縁が凸弧状となるもの(図版37-6)。1点が出土した。つまみ部にはいったノッチ以外に加工が認められないが、両縁刃部は非常に鋭利である。

II類：縦形であるが幅広の形態となるもの(第32図53、図版37-9)。縁辺部のみ加工であるが、背面側は全周にわたって加工が施され、三縁辺が刃部となり得る。また主要剥離面側はつまみ部作り出しのノッチがはいるほかは、左側縁に不連続な剥離がみられる程度である。

#### 石 篋 (第33図・表9・図版38~40)

素材となった剥片の、背面と主要剥離面の両面に加工され、その長軸の末端が刃部になると考えられる一群、また、背面側だけの片面加工であっても、刃部と考えられる末端の刃角が小さく、掻器とはなり得ないものもここで扱った。この定義にあてはまる石器は全

部で56点出土している。素材として用いられている石材はすべて頁岩である。これらは平面的なかたち、刃部の形態、加工部位の相違により以下のように分類できる。

I類：撮形で刃部が片刃状となるもの。

- a：両面加工であり、素材の両面ほぼ全体が調整加工で覆われるもの（図版40-28・31）。2点が出土しており、刃部の形態はいずれも直線状となる。また双方共に基部を欠損する。
- b：背面側は全体が調整加工で覆われるが、主要剝離面側には素材面を残すもの（第33図65、図版38-10・図版39-25）。2点が出土した。第33図65は刃部に、図版39-25は基部側に素材面を残す。いずれも刃部は丸みを帯びる。
- c：背面側よりも主に主要剝離面側に面的な加工が施されているもの（第33図63、図版39-8・図版40-38）。第33図63は主要剝離面の全面が調整加工で覆われる。また図版40-38は基部側にバルブを取り去るための調整加工がはいる、刃部は両面とも無加工となる。刃部は丸みを帯びる。

II類：撮形で刃部が両刃状となるもの。

- a：両面加工となり、調整が素材のほぼ全体に及ぶもの。
  1. 刃部が丸みを帯びるもの（第33図58・69、図版38-3・14）。2点出土。
  2. 刃部が直線状となるもの（第33図68、図版38-13）。1点が出土した。
- b：素材のほぼ全面が調整加工で覆われるが、刃部の両面に素材面を残し、刃部の加工が主要剝離面側のみに施されているもの（第33図56、図版38-1）。1点が出土した。刃部は直線状となる。
- c：背面側はほぼ全面が調整加工で覆われるが、主要剝離面側は側縁部のみ加工となり、素材面を大きく残すもの（第33図62、図版38-7・図版39-19・27）。3点が出土し、いずれも刃部は直線状となる。
- d：両面に素材面を大きく残すもの。図版39-18に掲載した1点が出土した。

III類：短冊形で刃部が片刃状となるもの。

- a：両面加工となり、素材のほぼ全面が調整加工で覆われるもの（第33図70、図版38-15）。2点が出土している。刃部は丸みを帯びる。
- b：素材の背面側はほぼ全面が調整加工で覆われるが、主要剝離面側は周辺部のみ加工となるもの。
  1. 刃部が丸みを帯びるもの（第33図66、図版38-11・図版40-30）。掲載したものを含めて3点が出土している。
  2. 刃部が直線状となるもの（図版39-21・26）。2点が出土した。
- c：背面側は素材面を大きく残すが、主要剝離面側は全面が調整加工で覆われるもの。図版39-17に掲載した1点が出土した。

IV類：短冊形で刃部が両刃状となるもの。

- a：両面加工となり、素材のほぼ全体が調整加工で覆われるもの。



1. 刃部が丸みを帯びるもの（図版39-24・図版40-29）。2点が出土した。

2. 刃部が直線状となるもの（図版40-32）。2点が出土した。

b: 背面側はほぼ全面が調整加工で覆われるが、主要剥離面側は側縁部の周辺加工のみが施され、その結果素材面を大きく残すもの（第33図61・67、図版38-6・12）。2点が出土しており、いずれも刃部の主要剥離面側は無加工となる。刃部の形態は丸みを帯びる。

c: 背面側、主要剥離面側ともに素材面を残すもの（第33図57、図版38-2）。図示した1点が出土した。背面側の側縁および刃部、主要剥離面側の左側縁に周辺加工が施されるが、右側縁はバルブを除去するための調整が素材の中央に及んでいる。刃部の形態は直線状となる。

V類: 楕形の形態となるが刃部の折損するもの（第33図64、図版38-9・図版40-33）。掲載したものを合わせて6点の出土がある。

VI類: 短冊形であるが刃部が折損するもの（図版39-22・図版40-34・35）。6点出土。

VII類: 平面形が楕形にも短冊形にもならないもの（第33図59・60、図版38-4・5・図版39-16・20・23）。多様な形態をとるが、いずれも長軸先端を刃部と認めることができる。全部で7点が出土した。

VIII類: 制作段階の途中もしくは製作中の折損により廃棄されたとみられる一群である。未成品、失敗品と考えられる（図版40-36・37・39）。8点が出土している。

#### 搔器（第34図71~74・表10・図版41）

急角度の調整加工によって刃部を作出した石器を搔器とした。この定義にあてはまる石器は18点出土している。素材は縦長剥片が多く用いられ、長軸端には必ず刃部が作出される。すべて頁岩製である。これらは刃部の位置と数により以下のように分類される。

I類: 素材の一縁辺を除く三縁辺が刃部となり得るもの（第34図71~74、図版41-5・6・12・14）。いずれも縦長剥片を素材とする。5点の出土があり、そのうちの1点（第34図74）が打面側に刃部を作出している。

II類: 背面側を表、打面を上にした場合の左側縁と末端が刃部となり得るもの（図版41-3・13）。2点が出土した。

III類: 比較的幅広い剥片を用い、その右側縁と末端に刃部を作出したもの。図版41-11に掲載した1点が出土している。

IV類: 素材の長軸先端部に刃部を作出したもの。他の側縁には調整加工が認められても、角度が浅く、搔器の刃部とはならない。さらに細分される。

a: 縦長剥片を素材とするもの（図版41-7・8）。全部で4点が出土した。

b: 幅広い剥片を素材とするもの（図版41-1）。この1点のみである。

V類: 基部の折損したもの（図版41-2・4・9・10）。いずれも末端部には刃部となり得る調整加工が施されている。全部で5点の出土がある。

## 削 器 (第34図75~84・第35図85~93 表11 図版42・43)

剥片の縁辺に連続的な調整加工を施して、刃部を作出した石器を削器とした。素材のかたちを大きく変えることがないため不定形である。製作に使用されている石材は玉髄質が1点あるほかはすべて頁岩である。掲載し得なかったものも含めて102点が出土した。これらは形態、刃部の作出方法と位置関係の相違により次のように分類できる。

I類：素材となる剥片の背面側を表、打面を上にして置いた場合の両側縁に調整加工を施し、刃部を作出するもの。

a：両側縁全体に調整加工が施されるもの。加工部位によりさらに細分できる。

1. 片面加工で背面側に調整加工が施されるもの(図版42-1)。4点出土。
2. 一側縁が背面側、もう一側縁が主要剥離面側に調整加工が施されるもの(図版42-2)。1点の出土である。
3. 原則背面側への片面加工であるが、主要剥離面側に部分的な調整が加えられ、一部両面加工となるもの(図版42-3)。2点が出土した。

b：一側縁は全体、もう一側縁は一部に調整加工が施されるもの(図版42-4)。2点が出土しているが、いずれも背面側への片面加工となる。

II類：両側縁から先端に調整加工を施し、先端部が尖った形態となるもの。

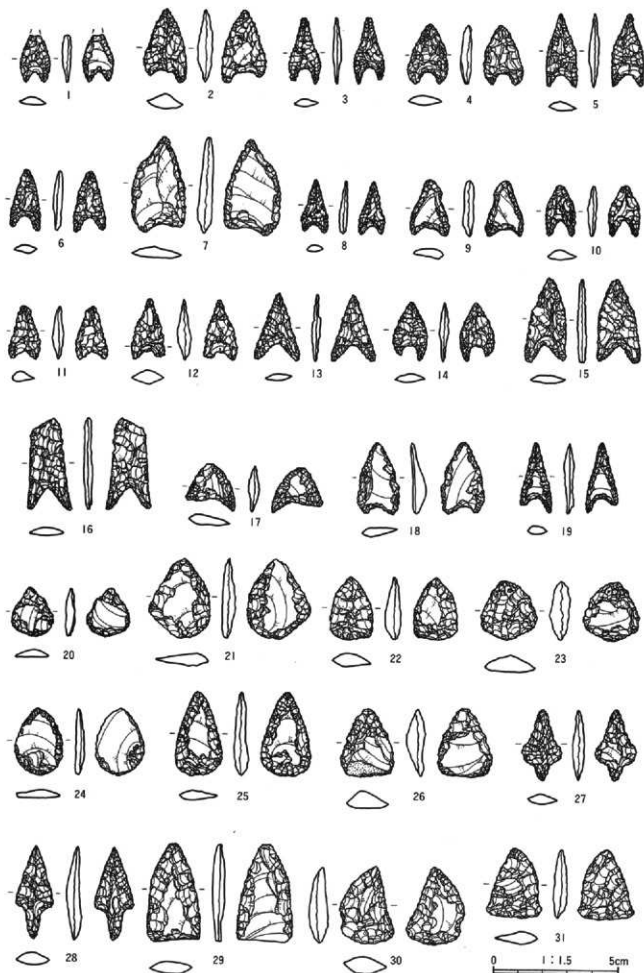
a：平面形が左右対称となるもの。縦長剥片を素材とし片面加工となる。

1. 両側縁の縁辺全体に調整加工が及ぶもの(第34図75・78・81、図版42-5)。4点が出土した。
2. 一側縁と先端部付近に調整加工がみられるもの(第34図79・83、図版42-6)。4点が出土した。
3. 先端部付近を中心に調整加工が施され、両側縁の加工が全辺に及ばないもの(第34図80、図版42-7)。6点が出土した。
4. 一側縁が剥離面側、もう一側縁が主要剥離面側に調整加工が施されるもの。図版42-8に掲載した1点の出土である。

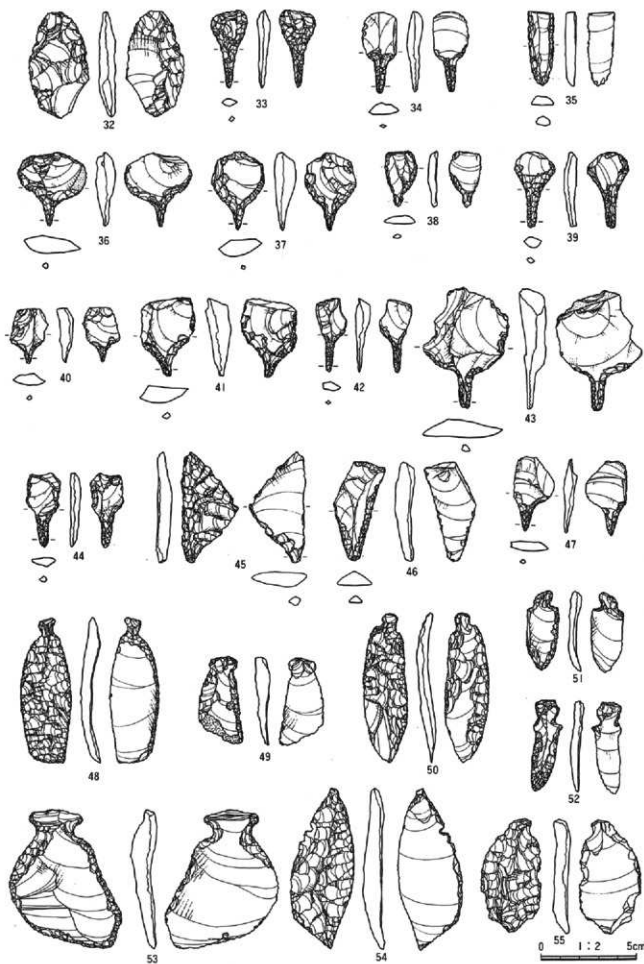
b：一側縁と長軸の両端に加工が施されるもの(第34図82、図版42-9)。2点が出土しており、いずれも片面加工となる。

c：左側縁が「く」字状に曲って肩を張る形態となるもの。

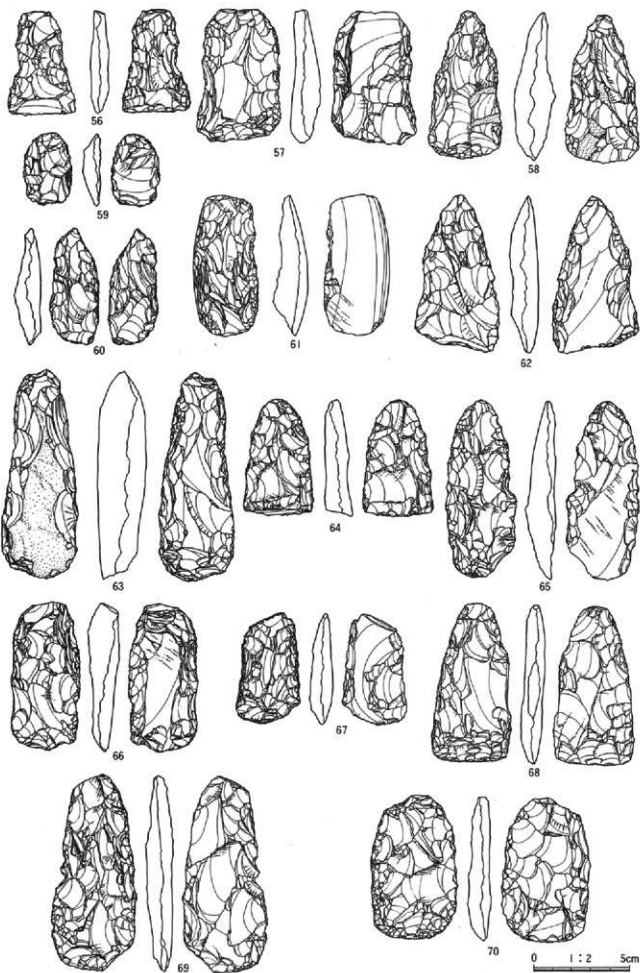
1. 片面加工で背面側の両側縁全体に加工がみられるもの(第34図77、図版42-10)。2点が出土した。
2. 片面加工で背面側の下半部から先端部にかけて調整加工が施されるもの(第35図88、図版42-11)。3点が出土した。
3. 片面加工で先端部付近を中心に調整加工が施されるもの(図版42-12)。2点が出土した。
4. 原則背面側への片面加工であるが、主要剥離面側にも加工され部分的に両面加工となるもの(図版42-13)。1点が出土した。



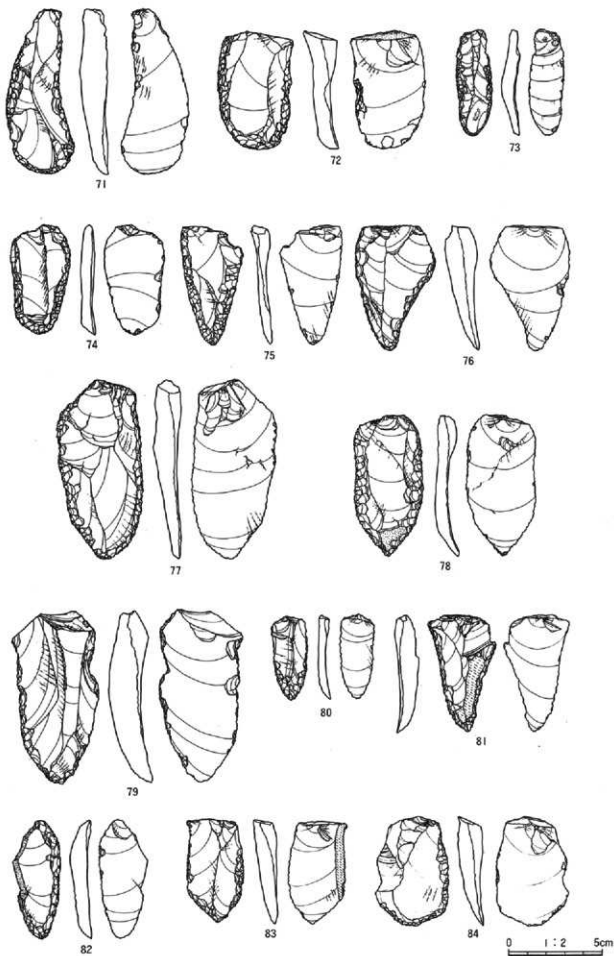
第31圖 石鏃・尖頭器実測圖



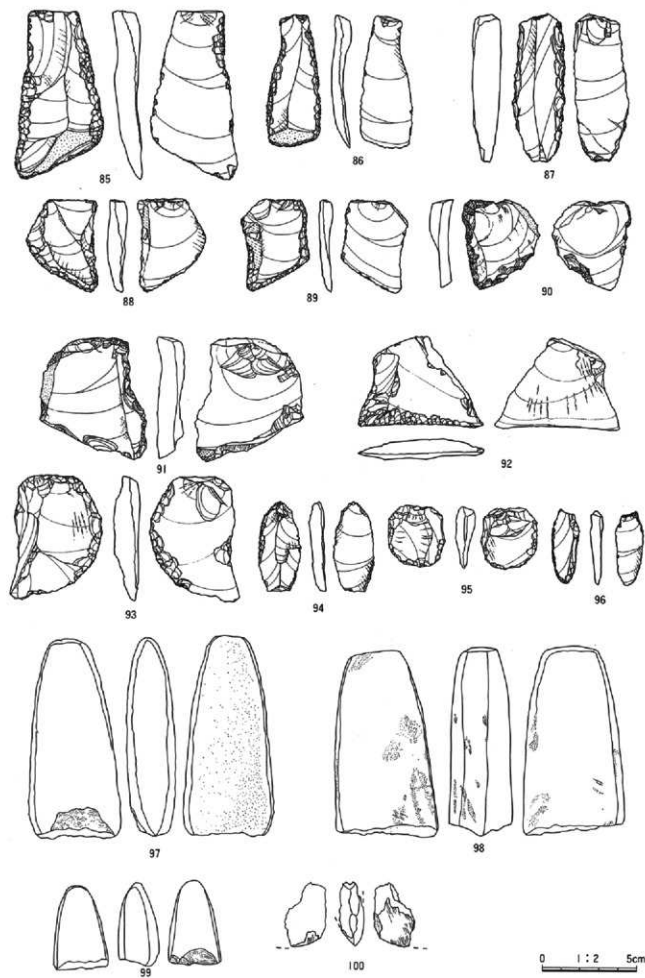
第32圖 尖頭器・石錐・石匙実測圖



第33圖 石莖実測図



第34圖 搔器・削器実測図



第35図 削器・加工痕ある剥片・磨製石斧実測図



第36図 石鏃模式図

## 属性記法

- 1 大きさ 長、幅は第36図に示したように、その全長、ならびに最大幅である。厚さは最大厚を測定した。折損部については( )を付し残存値を示した。単位はmmである。
- 2 抉痕・基部 第36図に示したように、抉痕は無茎の石鏃の抉りの痕さ、基部は最大幅の位置より下位の長さを測定した。前者には一、後者には十を付して示した。単位はmmである。
- 3 磨大端 磨大端の位置をつぎのように示した。尖頭部にあるものをA、基部、脚部にあるものをB、また、下端にある場合は'を付した。
- 4 側縁 側縁の形態を直線状のa、凸弧のb、凹弧のc、「 $\angle$ 」の字状に曲るdに分けて示した。
- 5 折損部位 尖頭部先端をa、左の脚部(図左)をb、右をc、円基部分をdとして示した。

表5 石鏃属性表

No.	出土区	石材	大きさ (mm)			重量 (g)	抉痕 (長さ)	磨大端	側縁		折損部位	分期	種別	図版
			長	幅	厚				左	右				
1	13-20-SG1F4	玉髄質	(18.0)	11.3	3.0	(0.6)	-4.4	A	b	b	a	Ia1	31-1	34-1
2	16-14-SG1F4	頁岩	28.7	16.6	5.1	2.1	-3.8	A	b	b		Ia2	31-2	34-2
3	15-16-SG1F3	頁岩	26.0	11.7	2.6	0.6	-6.1	B	b	b		Ia1	31-3	34-3
4	17-13-SG1F3	頁岩	22.6	15.0	3.7	1.1	-5.2	B	b	b		Ia1	31-4	34-4
5	12-17-SG1F3	頁岩	28.3	12.0	3.3	1.0	-4.7	A	b	b		Ia1	31-5	34-5
6	18-13-SG1F3	頁岩	22.7	11.5	2.5	0.7	-5.0	B'	b	a		Ia1	31-6	34-6
7	20-8-SG1F3	頁岩	36.8	21.3	5.5	4.5	-3.0	A	b	a		Ib2	31-7	34-7
8	21-10-SG1F3	頁岩	20.2	9.4	2.3	0.4	-3.1	A	d	d		Ia1	31-8	34-8
9	15-15-SG1F2	玉髄質	21.7	(19.1)	4.2	(1.2)	-2.7	B'	c	c	b	Ib1		34-9
10	15-16-SG1F2	頁岩	(15.7)	16.4	3.9	(0.9)	-4.9	B	c	a	a	Ia1		34-10
11	18-12-SG1F2	頁岩	21.1	14.3	3.1	1.1	-2.7	B	b	a		Ib1	31-9	34-11
12	15-18-SG1F1	頁岩	20.9	11.9	3.8	0.8	-2.9	B	a	b		Ia1	31-11	34-12
13	15-16-SG1F1	頁岩	19.4	11.1	2.6	0.6	-6.2	A	b	b		Ia1	31-10	34-13
14	17-18-SG1F1	頁岩	23.4	12.8	5.0	1.1	-3.4	B	b	a		Ia1	31-12	34-14
15	21-10-SG1F3	鉄石英	25.7	16.9	2.7	0.7	-6.2	B'	a	a		Ic	31-13	34-15
16	SG1F	頁岩	22.0	12.8	3.2	0.7	-5.7	A	b	b		Ia1	31-14	34-16
17	34-39-SG2F1	頁岩	20.8	(16.5)	2.0	(0.7)	(-1.2)	B	d	a	c	Ib2		34-17
18	37-40-SG2F1	頁岩	(17.5)	(12.7)	2.2	(0.6)	(-2.1)	A	b	a		Ib1		34-18
19	46-20-SG2F1	頁岩	32.7	16.1	2.7	1.5	-7.0	B'	d	b		Ic	31-15	34-19
20	47-16-SX12F1	頁岩	(17.7)	17.0	2.9	(0.7)	-5.8	B	b	b	a	Ia1		34-20
21	47-17-SX12F1	頁岩	(35.1)	16.9	2.8	(1.5)	-8.5	B'	a	a	a	Ic	31-16	34-21
22	SK33	頁岩	19.0	18.0	3.7	0.9	-4.6	B	a	b		Ib2	31-17	34-22
23	SK33	頁岩	28.9	16.2	4.0	1.5	-3.1	A	b	b		Ib1	31-18	34-23
24	SK34	頁岩	27.5	11.8	3.0	0.6	-4.8	B	a	a	b	Ia1	31-19	34-24
25	1次13トローⅢ	頁岩	32.0	12.6	3.5	1.4	-0.8	A	b	a		I d		34-25
26	16-13-SG1F2	頁岩	18.5	15.8	2.3	0.8	+4.8	A	b	b		II	31-20	34-26
27	1次2トローSG1F4	鉄石英	36.8	23.9	6.1	3.3	+11.3	A	d	b		II	31-21	34-27
28	17-13-SG1F3	頁岩	24.0	16.6	5.6	2.1	+1.8	A	b	b		II	31-22	34-28
29	18-14-SG1F2	頁岩	36.5	25.9	8.4	5.6	+5.4	A	a	a		II		34-29
30	15-15-SG1F1	頁岩	22.4	21.3	7.3	3.2	+6.0	A	d	d		II	31-23	34-30
31	17-13-SG1F1	頁岩	25.6	18.3	2.9	1.8	+4.8	A	b	b		II	31-24	34-31
32	SG1F1	頁岩	32.4	18.7	4.9	2.9	+4.6	A	a	a		II	31-25	34-32
33	38-44-SX4F1	頁岩	24.9	(18.3)	5.8	(2.6)	$\pm 0$	A	d	d		III		34-33
34	42-16-II	頁岩	26.0	20.6	6.3	3.1	+1.2	A	d	b		III	31-26	34-34
35	40-34-SG2F1	頁岩	26.8	15.0	3.6	1.2	+5.9	A	nb	ab		IV	31-27	34-35
36	15-17-SG1F	頁岩	36.4	14.6	6.3	1.6	+11.4	A	a	a		IV	31-28	34-36
37	A区-II	頁岩	23.7	17.1	3.9	1.7	+8.6	A	d	d		V		34-37
38	18-12-SG1F4	頁岩	35.6	22.5	10.0	7.3	+6.7	A	b	b		Vlb		34-38
39	22-9-SG1F4	頁岩	(19.7)	(15.2)	2.3	(0.7)		a	b	d	Vla		34-39	
40	17-12-SG1F3	頁岩	20.6	13.9	2.3	0.8	$\pm 0$	A	a	d		Vlb		34-40
41	17-14-SG1F2	黒曜石	(20.6)	14.4	4.0	(0.7)		A	b	d		VI		34-41
42	47-18-SX12F1	頁岩	37.6	20.5	4.7	3.6	$\pm 0$	A	b	b		Vlb	31-29	34-42
43	38-43-SX4F1	頁岩	(26.9)	15.8	2.8	(1.0)		b	b	d	Vla		34-43	
44	A区-II	頁岩	34.1	25.8	7.5	6.5	+5.4	A	d	d		Vlb		34-44
45	37-17-II	頁岩	31.3	23.9	7.8	5.2	+5.2	A	b	b		Vlb		34-45
46	42-20-I	頁岩	(21.4)	(12.1)	3.0	(0.8)	-0.4	A	b		c	Vla		34-46



## 属性表注

- 1 大きさ 長、幅、厚は全長、最大幅、最大厚を記し、折損品には( ) を付けて残存数を示した。
- 2 尖頭部 長は尖頭部の長さ、幅は尖頭部の中間位置における厚、厚は先端部から5mmの位置で計測した。また断面形もこの位置で観察した。折損するものは折れ口で観察した。I期の尖頭部の長さは先端に向かって収束する変曲点の位置から先端までを計測した。同じくII期についても、I期、II期に準じたが、なお、不明確なものについては裏面の調整加工のある部分から先端までを計測した。
- 3 尖頭部加工 先端部を下に向けて、素材の背面側の上に置いた時の右側をa、左側をb、裏面の右側をc、左側をdとした戻ってaとd、bとcで縁辺を形成することになる。○印のあるものが加工のあるものである。

表6 石錐属性表

No.	出土区	石材	大きさ(mm)			重量(g)	尖頭部				折損	分類	標記	観察				
			長	幅	厚		長	幅	断面形	a					b	c	d	
1	22-9-SG1F5	頁岩	41.1	18.4	5.3	3.2	20.0	4.7	3.2	菱形	○	○	○	Ia	32-33	35-1		
2	20-11-SG1F5	頁岩	(36.8)	14.6	8.3	(2.7)	(17.5)	4.1	3.9	三角形	○	○	○	先端	Ib	35-2		
3	11-18-SG1F4	頁岩	(56.3)	29.5	8.2	(10.5)	(11.3)	6.8	3.6	凸レンズ	○	○	○	先端	Ia	35-3		
4	17-14-SG1F4	頁岩	42.4	17.9	6.0	3.8	16.5	4.2	2.7	菱形	○	○	○	○	Ia	32-34	35-4	
5	12-18-SG1F3	頁岩	(18.0)	(13.4)	5.2	4.0	22.1	11	4.2	台形	○	○	○	基部	II	32-35	35-5	
6	15-17-SG1F3	頁岩	(27.2)	20.4	8.0	(3.1)	(8.8)	4.6	3.6	凸レンズ	○	○	○	○	先端	Ia	35-6	
8	19-10-SG1F3	頁岩	30.5	28.0	4.5	2.7	9.3	4.0	2.7	菱形	○	○	○	○	Ia	35-7		
8	19-10-SG1F3	頁岩	38.4	35.4	9.9	8.2	11.2	3.5	2.9	菱形	○	○	○	○	Ia	32-36	35-8	
9	SG1F3	高麗岩	(42.9)	25.0	12.2	(9.6)	(13.9)	5.8	5.5	菱形	○	○	○	○	先端	Ib	35-9	
10	12-16-SG1F2	頁岩	40.5	20	3.4	2.5	15.2	4.3	1.8	菱形	○	○	○	○	III	35-10		
11	13-17-SG1F2	頁岩	(35.5)	26.5	5.1	(4.0)	(9.2)	4.9	3.7	凸レンズ	○	○	○	○	先端	Ia	35-11	
12	13-18-SG1F2	頁岩	40.9	26.9	11.2	8.7	9.4	3.3	2.6	菱形	○	○	○	○	Ia	32-37	35-12	
13	15-14-SG1F2	頁岩	28.9	16.2	5.0	2.0	6.4	3.8	2.0	三角形	○	○	○	○	III	32-38	35-13	
14	15-16-SG1F2	頁岩	(39.3)	20.7	5.3	(3.4)	(18.7)	4.2	2.9	三角形	○	○	○	○	先端	Ia	32-39	35-14
15	15-16-SG1F2	頁岩	46.7	20.2	8.6	6.6	6.2	3.6	2.7	三角形	○	○	○	○	Ib	35-15		
16	21-9-SG1F2	頁岩	29.6	18.2	7.5	3.1	6.0	2.3	2.7	菱形	○	○	○	○	Ia	32-40	35-16	
17	23-8-SG1F2	頁岩	35.2	16.3	4.7	2.1	12.8	3.0	2.2	菱形	○	○	○	○	III	35-17		
18	15-16-SG1F1	頁岩	(29.6)	28.5	8.0	(4.5)	(6.4)	5.7	4.1	菱形	○	○	○	○	先端	Ia	35-18	
19	15-11-SG1F1	頁岩	40.5	28.5	9.7	10.7	8.6	4.0	3.3	凸レンズ	○	○	○	○	Ia	32-41	35-19	
20	16-15-SG1F1	頁岩	39.0	15.4	6.0	2.7	15.8	3.4	1.8	菱形	○	○	○	○	Ib	32-42	35-20	
21	SG1F1	頁岩	50.2	24.7	8.5	6.3	14.0	4.3	2.6	凸レンズ	○	○	○	○	Ib	35-21		
22	41-SG2F1	頁岩	(63.5)	44.9	12.2	(22.1)	(16.8)	5.6	2.7	凸レンズ	○	○	○	○	先端	Ia	32-43	35-22
23	AR-II	頁岩	38.8	17.0	4.6	2.6	17.8	4.9	3.2	菱形	○	○	○	○	Ia	32-44	35-23	
24	AR-II	頁岩	(57.8)	30.0	7.4	(10.9)	(7.9)	5.4	4.7	菱形	○	○	○	○	先端	IV	32-45	35-24
25	SK34	頁岩	51.0	25.2	8.2	9.9	16.5	9.8	4.3	三角形	○	○	○	○	Ia	32-46	35-25	
26	SK36F1	頁岩	38.6	20.9	5.8	3.6	13.5	4.7	2.4	菱形	○	○	○	○	Ib	32-47	35-26	
27	38-20	頁岩	32.3	17.1	6.9	2.4	11.9	3.2	3.1	三角形	○	○	○	○	III	35-27		
28	12-13-SG1F4	頁岩	52.5	55.7	14.4	45.0	6.0	4.3	4.1	台形	○	○	○	○	III	36-28		
29	13-19-SG1F4	頁岩	57.9	37.1	12.2	24.9	7.1	6.4	2.8	三角形	○	○	○	○	III	36-29		
30	17-12-SG1F4	頁岩	74.0	46.0	16.5	52.5	6.2	6.0	3.1	三角形	○	○	○	○	III	36-30		
31	17-14-SG1F4	頁岩	28.3	24.7	4.2	2.0	8.1	4.2	1.6	凸レンズ	○	○	○	○	Ia	36-31		
32	18-13-SG1F4	頁岩	(44.4)	24.4	6.5	(5.8)	(6.5)	4.7	1.7	凸レンズ	○	○	○	○	先端	Ia	36-32	
33	23-9-SG1F4	頁岩	66.7	49.2	13.8	37.1	9.1	7.7	2.7	台形	○	○	○	○	III	36-33		
34	12-18-SG1F3	頁岩	48.9	24.5	12.2	12.6	3.3	4.6	2.5	凸レンズ	○	○	○	○	III	36-34		
35	13-13-SG1F3	頁岩	(45.3)	28.2	4.0	(6.5)	(10.1)	4.1	3.1	凸レンズ	○	○	○	○	先端	Ia	36-35	
36	13-16-SG1F3	頁岩	(19.8)	19.8	3.4	(1.5)	(4.0)	3.9	2.3	凸レンズ	○	○	○	○	先端	Ia	36-36	
37	15-17-SG1F3	頁岩	(43.2)	34.3	7.5	(10.8)	(6.8)	5.1	4.6	三角形	○	○	○	○	先端	Ib	36-37	
38	SG1F3	頁岩	35.3	33.3	6.8	5.5	8.7	3.3	2.5	菱形	○	○	○	○	III	36-38		
39	SG1F3	頁岩	(38.1)	45.6	9.3	(13.0)	(6.1)	3.5	2.6	菱形	○	○	○	○	III	36-39		
40	17-12-SG1F2	頁岩	32.8	18.6	5.8	2.2	5.6	2.3	2.1	三角形	○	○	○	○	III	36-40		
41	12-20-SG1F2	頁岩	(24.4)	20.6	5.7	(2.6)	(1.8)	2.5	2.0	凸レンズ	○	○	○	○	先端	Ia	36-41	
42	18-12-SG1F2	頁岩	31.2	24.7	4.9	2.9	4.1	2.1	2.1	三角形	○	○	○	○	III	36-42		
43	14-11-SG1F1	頁岩	(29.4)	32.3	5.6	(7.2)	(2.6)	4.0	3.6	菱形	○	○	○	○	先端	Ia	36-43	
44	18-14-SG1F1	頁岩	41.3	34.8	6.0	5.7	13.3	7.7	4.1	凸レンズ	○	○	○	○	Ia	36-44		
45	19-13-SG1F1	頁岩	(30.5)	24.4	6.0	(3.4)	(7.6)	3.5	4.4	凸レンズ	○	○	○	○	先端	Ia	36-45	
46	AR-II	頁岩	32.2	29.6	6.4	5.2	3.6	2.8	2.1	凸レンズ	○	○	○	○	III	36-46		
47	40-36-SG2F2	頁岩	59.5	34.4	11.7	21.1	4.0	4.1	3.3	三角形	○	○	○	○	III	36-47		
48	41-33-SG2F2	頁岩	39.0	52.3	18.5	20.4	6.1	5.7	2.7	台形	○	○	○	○	IV	36-48		
49	41-34-SG2F2	頁岩	52.6	33.6	14.0	20.2	4.5	2.7	1.5	三角形	○	○	○	○	III	36-49		
50	39-37-SG2F1	頁岩	61.5	40.6	9.2	21.6	3.0	4.2	2.0	台形	○	○	○	○	III	36-50		
51	47-16-SK12F1	頁岩	47.8	28.6	5.3	6.4	6.2	3.5	2.0	三角形	○	○	○	○	III	36-51		
52	CR-I	頁岩	33.7	31.3	10.7	9.3	3.9	7.4	3.0	凸レンズ	○	○	○	○	III	36-52		
53	SP67F1	頁岩	32.0	27.2	6.7	5.4	4.9	2.4	1.8	三角形	○	○	○	○	III	36-53		
54	SK24F1	頁岩	48.5	36.2	7.8	6.7	10.9	2.9	2.3	菱形	○	○	○	○	III	36-54		
55	37-14-II	頁岩	39.6	27.3	7.0	5.9	3.8	3.2	2.7	三角形	○	○	○	○	III	36-55		
56	16-13-SG1F4	頁岩	32.1	17.9	12.7	4.9	7.7	4.9	3.2	三角形	○	○	○	○	IV	36-56		
57	17-11-SG1F4	頁岩	41.4	23.6	6.2	4.9	1.7	2.3	2.5	三角形	○	○	○	○	III	36-57		
58	18-12-SG1F4	頁岩	(39.7)	30.1	9.8	(7.1)	(6.0)	5.8	4.1	三角形	○	○	○	○	先端	Ia	36-58	
59	19-11-SG1F4	頁岩	30.7	12.1	7.9	3.1	6.2	5.2	2.6	凸レンズ	○	○	○	○	II	36-59		
60	21-10-SG1F3	頁岩	28.0	11.1	3.3	1.2	9.3	5.2	3.3	三角形	○	○	○	○	II	36-60		
61	23-9-SG1F2	頁岩	(28.0)	13.8	5.2	(1.5)	8.4	4.5	3.1	凸レンズ	○	○	○	○	基部	Ib	36-61	

## 属性表注

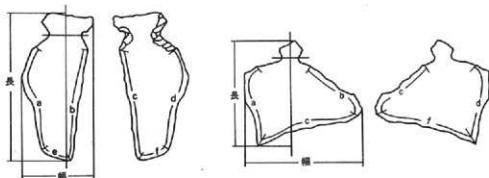
- 1 大きさ 長、幅は、第37図に示したように、その全長、ならびに最大幅である。厚は最大厚とした。折損品については( )を付し残存数を示した。
- 2 最大幅の位置 全長を二分した場合、その上半部にあるものをA、下半部にあるものをBとし、下端にあるものはB'とした。
- 3 側縁 先端部を上に向け、調整加工が入り易い方を上に置いて置いたものを左、右をc、右とし、先端部から基部までの側縁の形態を、直線状を示すa、凸弧を描くb、凹弧を描くc、「く」の字状となるdの四種類に分けて示した。
- 4 残存部位 全長を三等分して、先端部をA、中央部をB、基部側をCとして、折損品の残っている部分を示した。



第37図 尖頭器模式図

表7 尖頭器属性表

No	出土区	石材	大きさ (mm)			重量 (g)	側縁の位置		折損部位	分類	押印	図版	
			長	幅	厚		左	右					
1	13-20-SG1F4	玉髄質	29.8	22.1	6.8	3.9	B	b	c	I	31-30	34-47	
2	1次2トレ-SG1F4	玉髄質	26.6	21.5	4.8	2.6	B	a	b	I	31-31	34-48	
3	9-13-SG5F1	頁岩	(19.2)	(21.2)	6.5	(2.2)		b	c	A	I	34-49	
4	17-13-SG1F4	頁岩	(55.7)	30.4	7.9	(14.6)	B	b	b	B+C	II	32-32	34-50
5	13-16-SG1F2	頁岩	52.5	36.7	8.4	13.9	B	d	d	III		34-51	
6	13-17-SG1F4	頁岩	(27.2)	23.1	6.7	(4.0)		b	b	C	IV		
7	SG1F3	頁岩	(38.8)	24.4	8.7	(7.0)		b	b	C	IV		
8	47-18-SX12F1	頁岩	(47.5)	32.5	10.2	(13.2)		b	b	C	IV		
9	42-10-II	頁岩	(35.7)	24.3	7.5	(5.6)		b	b	C	IV		



第38図 石匙模式図

## 属性表注

- 1 大きさ 第38図に示したように、長は左右のノッチの最も高部を結んだ線に垂線を引き、上端、下端の最も突出する位置から、この垂線に直交する線を引きその距離を計測した。幅はこの垂線を軸として、左、右の最も突出する位置から、垂線に平行な線を引き、その距離を計測した。したがって、長、幅ともみかけの大きさとなる。厚は最大厚をとった。
- 2 加工部位と種類 第38図のように素材の背面を上にして、つまみ部を上方に置いた場合、表面の左側面をa、右側面をb、裏面の左側面をc、右側面をd、また、表面の下縁をe、その背面をfとし、それぞれの部位の加工状況を示した。先端の突出するものは、e、f側に×を入れ、加工のないものは—とした。加工の種類は1：通常側磨 2：フルーティング様側磨 3：奥行2mm前後の微細な側磨の三種類に分け、縁辺の全長にわたるものについてはA、縁辺を三等分した場合、その1/3以上が加工されているものをB、1/3未満のものをCとして、その組み合わせで表記した。また一端辺が異なる種類の側磨で加工されているものは、上部から順に、3・1・Aのように記した。なお、加工が素材の中央部に達する間隔的な加工が施されているものは、数字をCで囲み、縁辺全体が加工されているが、折損しているものを付した。
- 3 縁辺の状況と平均角 縁辺が直線状になるものをA、凸弧を描くものをB、凹弧を描くものをCとし、たとえば第38図のa・bのように凸弧を二つもつものについては、B・Bというように上部から順に表記した。また角角についてはa・d、b・c、e・fによって構成される各縁辺について、加工の有無を問わずに2cmに1ヶ所ずつ、5度ごとにキザミを入れたボーム紙を使って計測しその平均値を記した。

表8 石匙属性表

No	出土区	石材	大きさ (mm)			重量 (g)	加工部位と種類										縁辺状況と平均角			残存部位	分類	図版				
			長	幅	厚		a	b	c	d	e	f	a・d	角	b・c	角	e・f	角								
1	17-11-SG1F4	頁岩	34.8	27.8	4.2	4.3	3C	3A	3C	3C							B	31	A	24	下半	1b2	37-1			
2	1次4トレ-SG1F4	頁岩	30.5	23.0	9.3	6.6	1A	1A	3B								A	72	A	70	下半	1a3	37-2			
3	12-18-SG1F3	頁岩	76.9	25.5	7.0	13.4	QA	QA	—	1A	QA	3C	B	58	B	44	B	42				1a2	32-48	37-3		
4	16-15-SG1F1	頁岩	45.8	24.0	6.8	5.4	3A	1A	3C				B	51	A	47					下半	1b2	32-49	37-4		
5	16-17-SG1F1	頁岩	78.3	26.7	4.9	11.5	QA	QA	QA	QA	QA	QA	QA	QA	QA	QA	QA	QA	QA	QA	QA	QA	QA	QA	QA	QA
6	42-39-SG2F2	頁岩	63.0	43.4	7.0	13.0																				
7	57-24-SG2F1	頁岩	42.0	17.1	5.2	3.4	3B	1A																		
8	47-17-SX12F1	頁岩	47.5	15.6	4.2	2.8	1QA	1QA																		
9	89-41-SG2F1	頁岩	72.5	57.0	10.9	33.2	A	1A	1B																	
10	C区脱丘トレ	頁岩	84.6	32.7	9.7	24.2	1A	QA	—	13A	A	×	C	54	B	54	×									
11	BK-II	頁岩	60.5	31.7	7.5	17.0	AA	QA	3C	1A	×		B	57	B	45										
12	38-11-I	頁岩	39.5	34.7	7.4	7.9	QA	1B	3A				B	58	A	47					下半	1b2	37-12			



表10 掘器属性表

No	出土区	石材	大きさ(mm)			重量(g)	加工部位と種類							縁刃状況と平均角			残存 分相	押印	図版				
			長	幅	厚		a	b	c	d	e	f	a+d 角	b+c 角	e+f 角								
1	20-11-SG1F5	貫石	50	144	9.12	5.23	1A	-	-	-	1A	-	B	66	A	34	B	81	I <b>b</b>		41-1		
2	14-14-SG1F3	貫石	28	126	9.8	7.5	1A	1B	3A	-	1A	3A	-	B	58	A	70	B	62	C	V	41-2	
3	23-19-SG1F3	貫石	79	64	7.15	3.58	5	1B	1B	3B	-	1B	-	B	69	CB	53	B	65	C	V	41-3	
4	SG1F3	貫石	45	3	130	7.6	11.0	1A	1A	-	1C	1A	3C	C	60	B	68	B	78	C	V	41-4	
5	11-17-SG1F2	貫石	67	9	108	10.3	28.9	1B	1A	1C	13C	2A	-	B	68	C	52	B	73	C	V	34-71(1)-5	
6	15-14-SG1F2	貫石	64	5	138	16.6	33.3	1A	1B	1C	-	1A	1C	B	56	A	56	B	63	I	34-72(1)-6		
7	17-12-SG1F2	貫石	46	224	6.4	7.6	3B	13B	-	3B	1A	-	BC	57	C	56	B	67	I <b>a</b>		41-7		
8	25-9-SG1F2	貫石	55	5	129	13.6	22.0	3C	3C	3C	13B	1A	-	B	79	B	63	B	75	I <b>a</b>		41-8	
9	17-14-SG1F1	貫石	36	827	8.11	0.13	3	1A	2A	3B	3C	2A	13B	A	63	A	61	B	67	C	V	41-9	
10	1044-32-SG2F3	貫石	34	843	6.13	9.13	6	1A	1B	1A	-	A	74	A	46	B	77	C	V		41-10		
11	1139-34-SG2F1	貫石	68	1	61	312	7.67	1	1A	-	1C	1B	1A	B	72	B	63	B	74	I <b>b</b>		41-11	
12	12SK36F1	貫石	55	8	118	3.6	6.8	6	1A	1B	-	2A	3C	A	52	B	42	B	60	I	34-73(1)-12		
13	13SP90F1	貫石	68	1	61	312	7.67	1	1A	-	1A	3B	1A	B	67	DB	51	A	70	I <b>b</b>		41-13	
14	1432-11-1	貫石	58	3	31	4.6	6.15	2	1A	1B	1C	3C	1A	3C	B	68	A	60	B	65	I	34-74(1)-14	
15	1520-12-SG1F2	貫石	45	3	143	8.14	32.9	6	1A	3B	3B	-	1A	B	59	B	43	B	73	C	V		
16	1641-33-SG2F2	貫石	49	9	37	9.11	0.25	3	1B	-	1C	-	1B	1B	D	69	CB	66	B	63	I <b>a</b>		
17	BK-II	貫石	57	8	34	4.10	3	19	8	1A	1A	-	1C	1A	-	B	64	A	69	B	68	I	
18	1857-17-1	貫石	33	8	23	8	4	0	1	1B	1A	-	2A	-	B	52	D	47	B	61	I <b>a</b>		

表11 削器属性表

No	出土区	石材	大きさ(mm)			重量(g)	加工部位と種類							縁刃状況と平均角			残存 分相	押印	図版				
			長	幅	厚		a	b	c	d	e	f	a+d 角	b+c 角	e+f 角								
1	SK37F1	貫石	74	0	42	6.16	8.50	9	1A	1B	-	-	-	B	63	B	61	A	55	I <b>a</b>		42-1	
2	17-14-SG1F2	貫石	93	5	130	8.11	7.34	6	1B	-	1B	-	-	A	69	D	70	-	-	I <b>a2</b>		42-2	
3	1次・2トレ-1	貫石	82	8	96	0.13	7.44	0	1A	1B	-	1C	-	-	B	66	C	56	-	-	I <b>a3</b>		42-3
4	111-17-SG1F3	貫石	84	4	132	8.1	126.5	1	1B	1C	-	-	-	A	42	D	57	-	-	I <b>b</b>		42-4	
5	22-15-SG1F5	貫石	63	4	132	6.7	11.0	2	2A	2B	-	3C	3C	x	x	A	47	A	43	x	-	I <b>a</b> 134-75(2)-5	
6	SG2F3	貫石	71	3	136	4.6	23.2	3	1A	1A	-	x	x	AB	49	B	42	x	-	I <b>a</b> 134-78			
7	17-15-SG1F	貫石	62	3	135	9.11	0.19	0	2A	1A	2A	-	x	x	A	57	A	69	x	-	I <b>a</b> 134-81		
8	15-16-SG1F2	貫石	90	6	144	4.16	2.67	5	1A	1B	1B	1C	x	x	B	60	B	59	x	-	I <b>a</b> 234-79(2)-6		
9	BK-II	貫石	55	1	130	10.0	1	16	8	3A	1A	1B	-	x	D	58	B	59	x	-	I <b>a</b> 234-83		
10	10-19-SG1F2	貫石	43	8	118	6.4	9	4	0	2B	2B	-	x	x	A	62	A	45	x	-	I <b>a</b> 234-80(2)-7		
11	SK62F1	貫石	63	4	144	0.11	6.22	6	3A	1C	1B	-	x	x	B	63	B	67	x	-	I <b>a</b> 2	42-8	
12	1247-16-SX12F1	貫石	62	5	25	2.7	0	12	6	2B	1A	-	x	x	DB	80	B	55	x	-	I <b>b</b> 34-82(2)-9		
13	19-12-SG1F3	貫石	94	3	142	8.13	3.50	0	1A	1A	-	3C	x	x	D	49	AB	62	x	-	I <b>c</b> 134-77(2)-10		
14	1413-12-SG1F3	貫石	49	3	138	2.9	1	15	4	3A	1B	-	x	x	D	51	C	53	x	-	I <b>c</b> 235-88(2)-11		
15	1917-13-SG1F4	貫石	45	8	136	1	13	7	17	9	3B	1B	3C	3C	x	D	39	B	42	x	-	I <b>c</b> 3	42-12
16	1640-43-SX4F2	貫石	68	2	133	8.9	8	17	3	1B	1A	1B	x	x	D	71	C	77	x	-	A	I <b>c</b> 4	42-13
17	18-8-SG1F3	貫石	66	4	142	2.16	3.32	4	1A	1A	3A	-	1C	x	x	B	66	D	53	x	-	I <b>d</b> 134-76(2)-14	
18	1817-12-SG1F2	貫石	46	9	141	7.9	3	16	2	1A	1B	3B	x	x	A	53	D	74	x	-	I <b>d</b> 235-90(2)-15		
19	1913-18-SG1F2	貫石	34	9	140	0.6	5.7	9	1C	1C	-	x	x	A	45	D	39	x	-	-	I <b>d</b> 3	43-16	
20	17-14-SG1F1	貫石	51	5	132	1.8	10	8	3	20	3	28	13B	x	C	47	DB	58	x	-	I <b>d</b> 4	43-17	
21	2144-33-SG2F1	貫石	48	8	134	6.11	8	15	9	1A	1A	-	x	x	D	55	D	57	x	-	I <b>e</b>	43-18	
22	2247-17-SX12F1	貫石	70	1	127	7.7	0	13	1	1A	1A	-	-	3A	-	CB	39	B	48	B	53	I <b>b</b> 135-86	
23	SG2F3	貫石	48	3	142	7.5	1	9	8	1B	1B	-	-	1A	-	C	52	C	44	A	37	I <b>a</b> 135-89(4)-13	
24	12-14-SG1F4	貫石	76	5	127	5.14	0.35	0	1A	1A	-	-	1A	B	74	A	73	A	55	I <b>a</b> 235-87(4)-20			
25	17-13-SG1F2	貫石	89	8	147	8.13	7.46	1	1B	1B	3B	1C	3A	3B	A	56	A	48	A	44	I <b>a</b> 135-85(4)-21		
26	1615-17-SG1F1	貫石	44	0	132	4.4	8	7	8	1A	3A	1B	1A	A	59	CB	67	A	63	I <b>a</b> 4		43-22	
27	38-4-1	貫石	46	1	65	6.8	2	27	7	1B	1C	-	-	2A	-	C	49	B	-	A	42	I <b>b</b> 135-93(4)-23	
28	16-13-SG1F4	貫石	31	5	23	3.4	2	3	7	1C	13B	-	-	-	A	66	B	70	B	65	I <b>b</b> 2	43-24	
29	1815-11-SG1F3	貫石	59	6	138	3.12	5	23	3	-	1A	-	-	1A	-	BC	61	A	60	B	41	I <b>b</b> 134-84(4)-25	
30	20-12-SG1F2	貫石	59	3	172	5.13	4	73	7	1B	-	-	1B	1A	A	58	A	-	C	75	I <b>v</b>	43-26	
31	43-13-1	貫石	102	3	164	7.12	30	70	8	1A	-	-	-	-	B	50	BA	39	B	-	V <i>a</i> 1	43-27	
32	23-9-SG1F3	貫石	50	2	135	9.5	13	5	1A	2C	-	1B	3C	-	B	47	B	62	A	50	V <i>a</i> 2	43-28	
33	18-14-SG1F1	貫石	45	5	158	2.10	0.51	6	-	1A	-	1C	B	-	B	64	CB	76	-	-	V <i>b</i> 135-91(4)-29		
34	11-35-SG2F3	貫石	66	4	132	3.13	0.36	8	3C	1B	1B	1C	x	x	BC	53	B	43	x	-	V <i>b</i> 235-92(4)-30		
35	19-13-SG1F2	貫石	69	4	139	9.15	11	54	0	-	1C	-	-	1A	1C	-	B	-	B	67	V <i>c</i>	43-31	

表12 ビエス・エスキュー計測表

No	出土区	大きさ(mm)			重量(g)	図版
		長	幅	厚		
1	1次・2トレ出	35.2	28.7	8.7	9.4	44-1
2	18-12-SG1F1	31.6	32.4	9.8	10.9	44-2
3	39-38-SG2F2	38.9	35.5	10.3	13.9	44-3

表13 磨砕石弁計測表

No	出土区	大きさ(mm)		重量(g)	残存 部位	押印	図版	
		長	厚					
1	SK60F1-RO6	105.8	47.5	25.1	219.1	基部	35-97	46-1
2	42-16-II	100.2	38.3	33.7	284.1	基部	35-98	46-2
3	SK25F	44.2	28.6	21.1	41.3	基部	35-99	46-3
4	40-37-SG2F1	33.8	21.8	10.1	9.5	基部	35-100	46-4

d：右側縁が「く」字状に曲がって肩を張る形態となるもの。

1. 片面加工で背面側の両側縁全体に加工がみられるもの（第34図76、図版42-14）。4点が出土した。
  2. 片面加工で背面側の左側縁のほぼ全辺と右側縁下半部に調整加工が施されるもの（第35図90、図版42-15）。4点が出土した。
  3. 片面加工で先端部付近を中心に調整加工が施されるもの（図版43-16）。2点が出土した。
  4. 原則背面側への片面加工であるが、主要剝離面側にも加工され部分的に両面加工となるもの（図版43-17）。1点が出土した。
- e：両側縁が「く」字状に曲がって両肩が張る形態となるもの（図版43-18）。背面側への片面加工で両側縁の全辺に調整加工が施される。1点が出土した。

III類：先端部が幅広となり、この部分にも調整加工が施されるもの。

a：基部を除く三縁辺が加工されるもの。

1. 背面側の片面加工となるもの（第35図86・89、図版43-19）。8点が出土した。
2. 両側縁が背面側、先端が主要剝離面側に加工されるもの（第35図87、図版43-20）。
3. 一側縁の一部が両面加工となるもの（第35図85、図版43-21）。
4. 先端が両面加工となるもの（図版43-22）。

b：左側縁と先端が加工されるもの。

1. 背面側の片面加工（第35図93、図版43-23）。5点が出土した。
2. 先端背面側、側縁主要剝離面側の片面加工（図版43-24）。1点が出土した。

c：右側縁と先端が加工されるもの（第34図84、図版43-25）。7点が出土し、すべて背面側への片面加工となる。

IV類：横長斜片の左側縁と両端に調整加工が施されるもの（図版43-26）。1点のみの出土である

V類：一縁辺のみに調整加工が施されるもの。

a：左側縁が加工されるもの。

1. 背面側の片面加工となるもの（図版43-27）。12点が出土した。
2. 両面加工となるもの（図版43-28）。1点が出土した。

b：右側縁が加工されるもの。

1. 背面側の片面加工となるもの（第35図91、図版43-29）。10点が出土。
2. 両面加工となるもの（第35図92、図版43-30）。3点が出土した。

c：先端に調整加工が施されるもの。（図版43-31）。5点が出土し、いずれも背面側の片面加工となる。

**ピエス・エスキーユ (表12・図版44-1~3)**

ハンマーによる加撃と対象物からの衝撃による剥離痕が認められる石器である。3点が出土した。いずれも縦断面形は凸レンズ状となる。

**加工痕跡ある剥片 (第35図94~96・図版44-4~14)**

剥片に二次加工を施しながらも、刃部を形成するような連続した加工とはなっていないものである。全部で784点が出土している。その一部を掲載した。

**石核 (図版45)**

剥片石器の製作において、母岩からの剥片剥離工程の最終段階で放棄された残核である。全部で991点が出土している。母岩とした石材の大きさや剥片剥離行程の数、作業面の選択など技術的にはかなりのバリエーションが存在するが、多くは多方向からの剥離面で構成され、頻繁な打面転移を繰り返す剥片剥離技術の存在を伺わせる。石材は玉髄質、黒曜石、鉄石英が若干認められるほかは、頁岩が使用される。特に頁岩は現在、本遺跡ののり段丘直下を流れる寒河江川やA区SG1河川跡の礫層中に一般的にみられる岩石であり、今回出土した剥片石器においてもっとも多用される石材である。

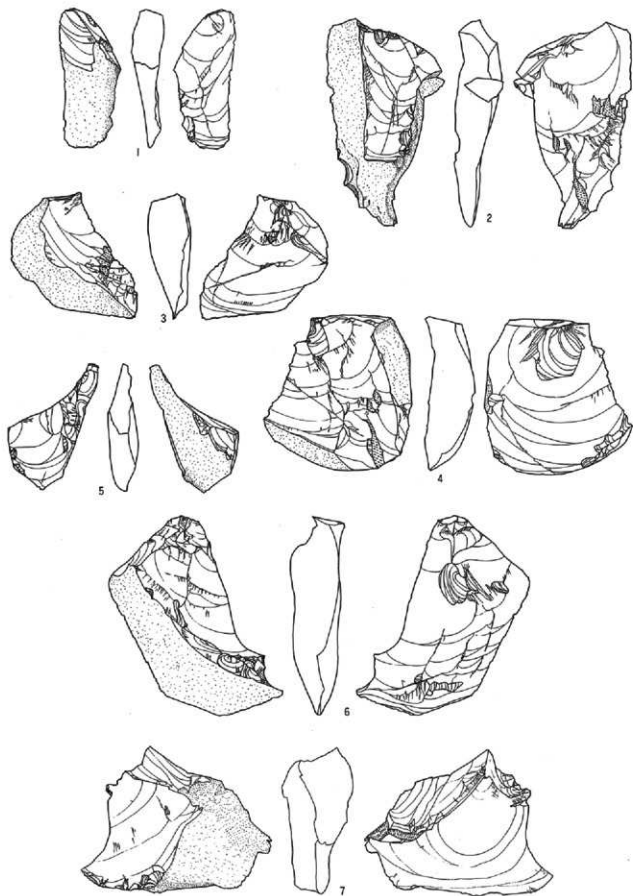
**接合資料 (第40図~第47図・表14・図版56~図版60)**

今回の調査では多量の石核・剥片類が得られており、多数の接合資料の存在が予想された。しかし、それらの多くがSG1・SG2河川跡の堆積土層中からの出土であり、多数の母岩から剥離された剥片が、広範囲に散乱している状況を呈していた。そのため、整理段階での接合作業およびそれに伴う分析が不十分であり、今後も作業を継続する必要があるが、以下では現段階までの整理状況である程度まとまったものについて概要を述べる。

**母岩1 (第40図~第43図・表14・図版56~60)**

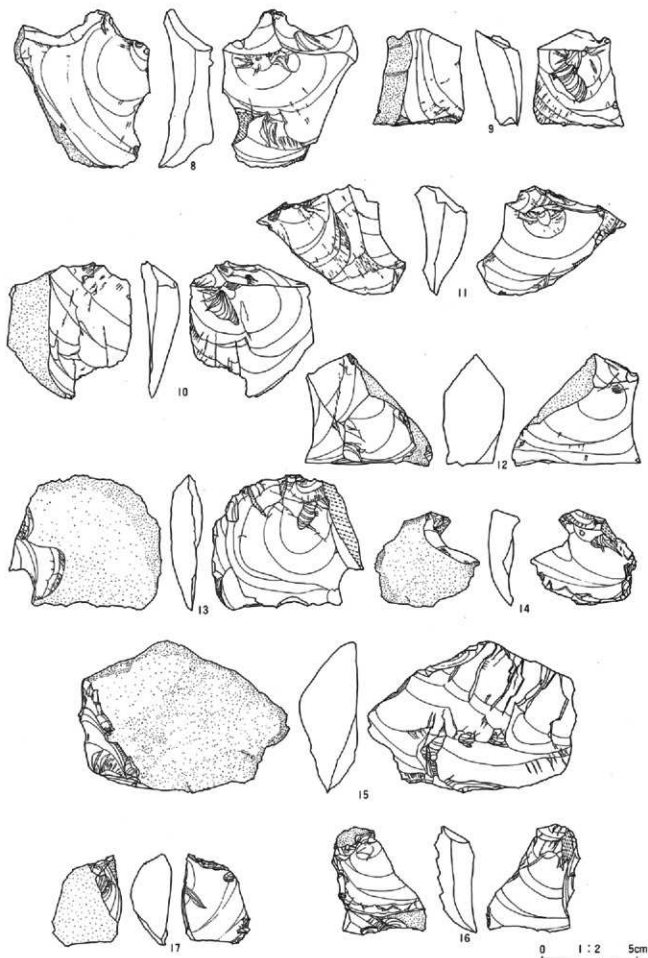
B区SK36袋状土壌の堆積土層内から出土した。剥片剥離の作業終了後、目的剥片を抜き取った後に、初期の機能を失った土壌内一括廃棄されたものとみられる。石核1点到剥片20点が接合した。初期段階に剥離された剥片が失われているものの、ほぼ原石の状態まで復元し得た。素材は頁岩の河原石を分割せずに使用しており、残存部の大きさが長軸長197mm、短軸長153mm、最大幅90mmを測る。剥離工程の概要は次のようになる(以下に使用している番号は表14の相対剥離順である)。

母岩の選択→初期の剥離(2回以上)→打面転移(初回の剥離面)→1→2→3→4・5(1回の加撃による同時剥離)→打面転移→剥離(1回以上)→打面転移(初回の剥離面)→6→打面転移(6の剥離面)→7(上半部節理による折断・剥片無し)→8→9(節理面からの剥落)→10→打面転移(8の剥離面)→11→12→13・14・15(1回の加撃による同時剥離)→打面転移(14の剥離面)→16a・16b(折断)→17→剥離(1回以上)→18a・18b(折断)→石核廃棄



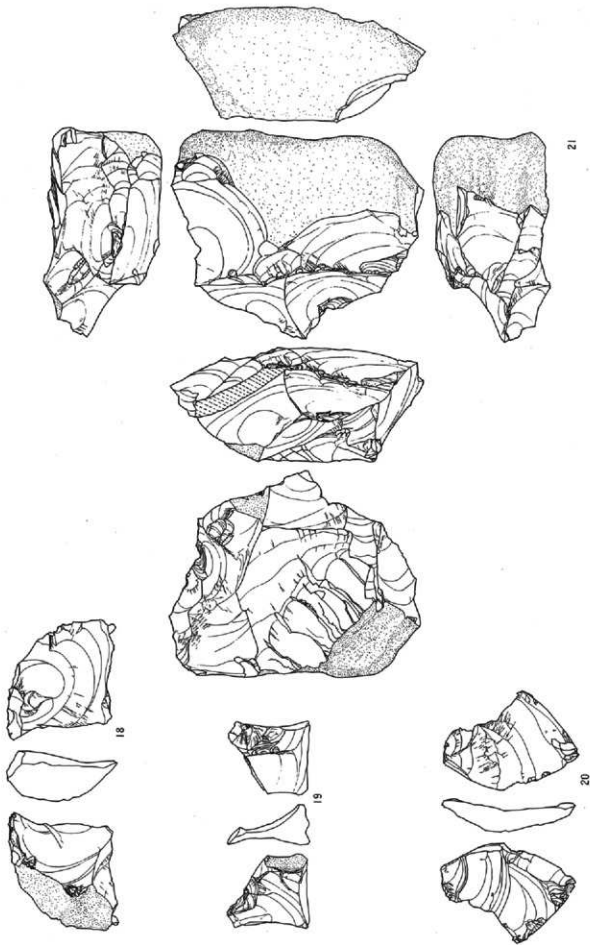
0 1:2 5cm

第40图 母岩上接合剥片实测图(1)

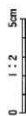


第41圖 母岩1接合剝片実測圖(2)

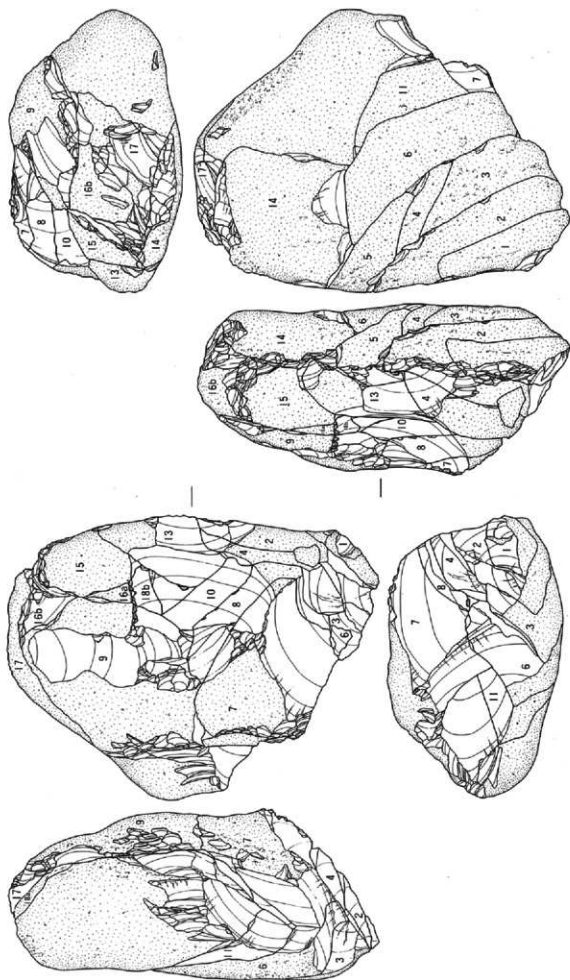




第42圖 母 寺 一 塚 石 碑 片 之 拓 本 圖



第43図 母岩1家湖図

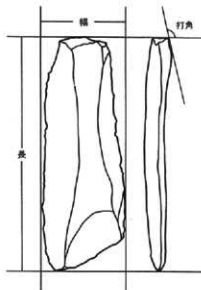


※番号は相對的順序順

以上のように約18回の剝離作業の間に6回の打面転移が繰り返されている。打面は自然面または先行剝離面がそのまま利用され、打面調整は行われない。打角を大きくとり、大形で分厚い剝片を意図的に生産した模様が伺えるが、中間工程では目的剝片が得られなかったものとみられほとんどが残存している。石核は最終剝離面のある面を正面、その打面を上とした場合の長さ133mm、幅112mm、厚さ63mm、重量940gを測り、比較的大きな状態で放棄されているが、おそらく素材の内部に発達した節理のためと考えられる。なおSK36からは第V群2類の縄文土器が共伴している。

## 属性表注

- 1 大きさ 長、幅は第44図に示すように基部を上位に置いた時の全長ならびに最大幅である。厚は最大厚を記載した。折損するものは残存部を記したが、ネガティブ面により復元可能な場合はその横を( )内に示した。
- 2 打面 打面にみられる調整が1枚の剝離によるものを単、複数回の剝離によるものを複、点状となるものを点、表皮を打面としているものを表皮、節理面を打面としているものを節理面、欠損するもの欠と記し、二次調整もしくは切断等により不明なものは空欄とした。
- 3 打角 打角は第44図に示すように打面とバルブの頂点がなす角度を計測した。打面が欠損し、あるいは点となるものは空欄とした。
- 4 末端 末端の表記は、  
F：フェザーフラクチャー  
H：ヒンジフラクチャー  
S：ステップフラクチャー  
RH：リバーシブルヒンジフラクチャー  
(ウートラバツセ)  
欠：末端の欠損するものとし、不明なもの、もしくはどれにもあてはまらないものは空欄とした。

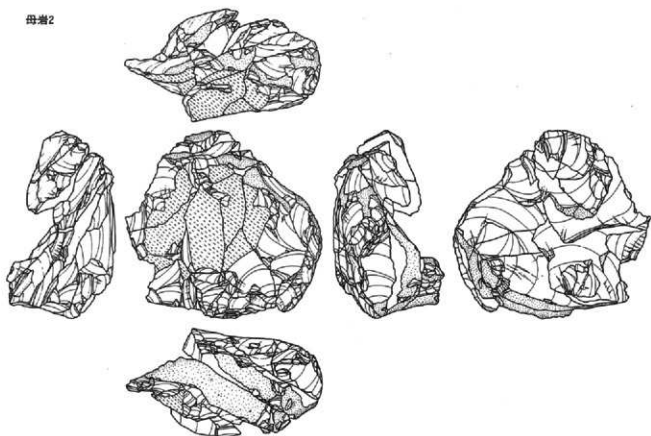


第44図 剝片模式図

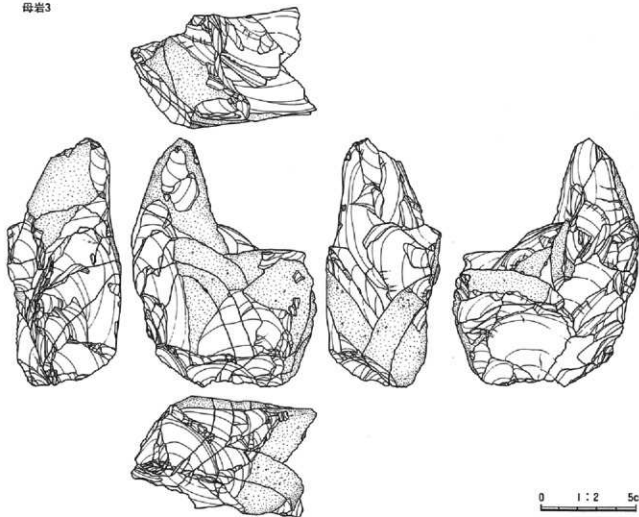
表14 母岩1接合剝片属性表

相対剝離順	出土区	層位	器種	大きさ(mm)			重量(g)	打面	打角	末端	表皮	押戻	図版	備考
				長	幅	厚								
1	SK36	1	剝片	74	33	16	25.8	点		F	有	40-1	56-1	
2	SK36	1	剝片	110	62	20	115.5	単	125	F	有	40-2	56-2	
3	SK36	1	剝片	67	67	17	59.3	単	124	F	有	40-3	56-3	
4	SK36	1	剝片	82	78	20	150.9	単	116	H	有	40-4	56-4	
5	SK36	1	剝片	67	49	16	29.5			F	有	40-5	56-5	
6	SK36	1	剝片	106	92	23	160.1	単	113	F	有	40-6	56-6	4~5:1回の加撃による同時剝離
7	SK36	1	剝片	78	102	36	169	点		F	有	40-7	56-7	
8	SK36	1	剝片	84	71	21	123.2	単	133	F	有	41-8	57-8	
9	SK36	1	剝片	80	112	27	248.4	表皮		F	有	41-15	58-15	
10	SK36	1	剝片	52	46	21	46.8	単	124	F	有	41-9	57-9	
11	SK36	1	剝片	73	65	14	62.8	単	134	F	有	41-10	57-10	
12	SK36	2	剝片	58	79	19	57.9	単	138	H	無	41-11	57-11	
13	SK36	1	剝片	59	68	33	121.0	単	142	節理面	有	41-12	57-12	
14	SK36	1	剝片	72	80	16	102.0			F	有	41-13	57-13	
15	SK36	1	剝片	51	55	14	31.8			RH	有	41-14	57-14	
16a	SK36	1	剝片	57	50	17	35.7	単	119	F	有	41-16	58-16	12~14:1回の加撃による同時剝離
16b	SK36	1	剝片	48	36	19	31.4	欠		F	有	41-17	58-17	
17	SK36	1	剝片	58	63	23	73.7	単	144	F	有	42-18	58-18	
18a	SK36	1	剝片	50	46	13	27.7	単		RH	有	42-19	58-19	
18b	SK36	1	剝片	72	52	11	30.2	欠		RH	無	42-20	58-20	

母岩2

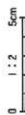
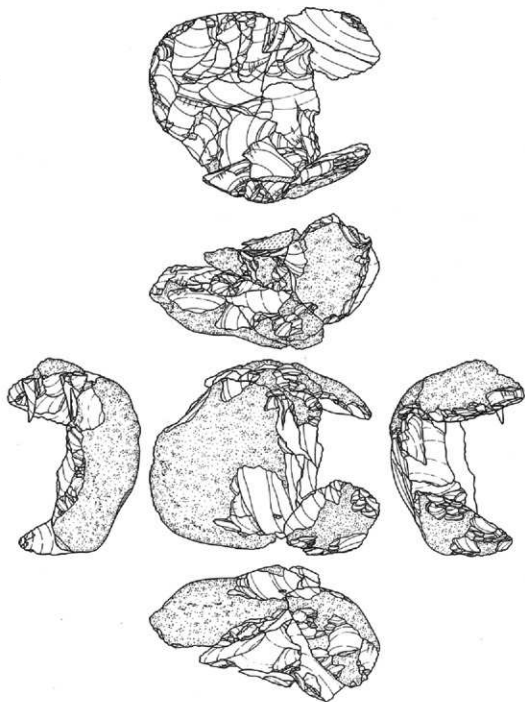


母岩3

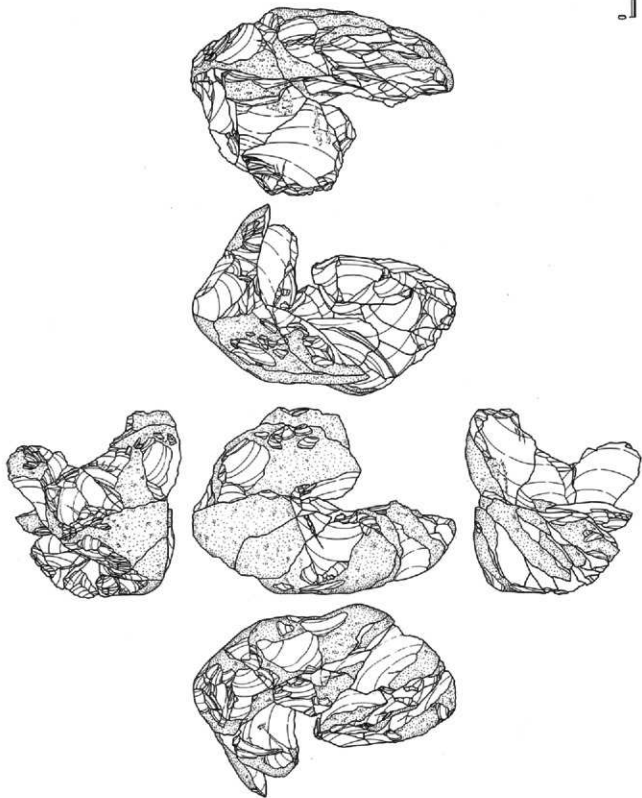


0 1:2 5cm

第45图 母岩2·母岩3実測図



第46図 母岩 4 実測図



母岩 2～5 (第45図～第47図)

SG 2 堆積土層中より出土した。図示したものは接合作業の中途段階のものであり、石核がまだ発見されていない。いずれも早い段階での剥離工程の様相を伝えるものであるが、比較的小形の剥片を意図的に剥離している。4点とも同一母岩となる可能性がある。

磨製石斧 (第35図97～100・表13・図版46)

磨製石斧は図示した4点のみの出土でありすべて破損品であった。両側縁を面取りするいわゆる定角式磨製石斧である。第35図100の刃部破片がSG 2から出土した他はB区の遺構及び包含層からの出土である。

磨石 (第48図～第51図・表15・図版47～50)

河原石が石皿などと組み合わせられて使用された結果、礫面に磨痕をもつに至った石器である。本稿では礫面に磨痕があっても敲打による凹痕があるものは、凹石として扱っている。これらは磨面の特徴から以下のように分類できる。

- I類：平面形楕円形の偏平な礫の片面を磨面として使用した可能性のあるもの (第49図 8・11・第51図26、図版48-8・11・図版50-26)。
- II類：平面形楕円形または円形、断面形楕円形となる偏平な礫の表裏面を磨面として使用した可能性のあるもの (第48図 1・7・第49図 9・12・13・15・第50図17・18・21・23～25・第51図27、図版47-1・7・図版48-9・12・13・図版49-15・17・18・21・22・図版50-24・25・27)。
- III類：球形となる礫の全面を磨面として使用した可能性のあるもの (第51図28・図版50-28)。

凹石 (第48図～第50図・表16・図版47～49)

河原石の表面に敲打によると考えられる凹痕をもつもので、そのほとんどが磨痕を合わせもつ。凹痕の位置により以下のように分類できる。

- I類：1面に凹痕をもつもの (第50図19、図版49-19)。
- II類：2面に凹痕をもつもの (第48図 2～6・第49図10・14・16・第50図19・20、図版47-2～6・図版48-10・14・第49図16・19・20)。平面形楕円形または円形、断面形が楕円形となる偏平な礫の表裏面に凹痕をもつものが大半を占める。

石皿 (第51図・第52図、図版51～54)

偏平で大形の河原石の一面あるいは二面に磨面をもつ石器である。石材は多孔質の火山起源の岩石が多用される。図示したものはいずれも使用による結果として表面の中央部が浅くくぼんでいる。殊に第52図 2 は、SK63の堆積土層上面に裏返しの状態出土したものであるが、加工によって縁を作出している可能性が高い。

### 敲石 (第50図22、図版50-23)

棒状あるいは楕円形の礫の端部に敲打痕をもつ石器である。ハンマーとして使用されたものと考えられる。第50図22は長さ224mm、幅152mm、厚さ83mmを測る。断面楕円形で棒状を呈する大形の礫を素材とする。表面に擦痕がみられることから、折断した石棒からの転用の可能性もある。

### 原石 (図版55)

石器製作の原材料となる石のうち、頁岩はSG1河川跡周辺の礫層およびSG1、SG2堆積土層内から多量に出土している。それらはかなり大形のものも含めて、遺跡の外から搬入されたものではなく、もともと礫層にあったものと考えられる。このことから本遺跡の立地は、石器の原材料の入手において有利な条件下にあったといえることができる。図版55に掲載した原石はSG1堆積土層内から得られたものである。長さ128mm、幅75mm、厚さ38mm、重さ442mmを測る。表面の摩滅の度合いから明らかに流されてきたものであるが、もともと後期旧石器時代の両設打面の石刃核である。

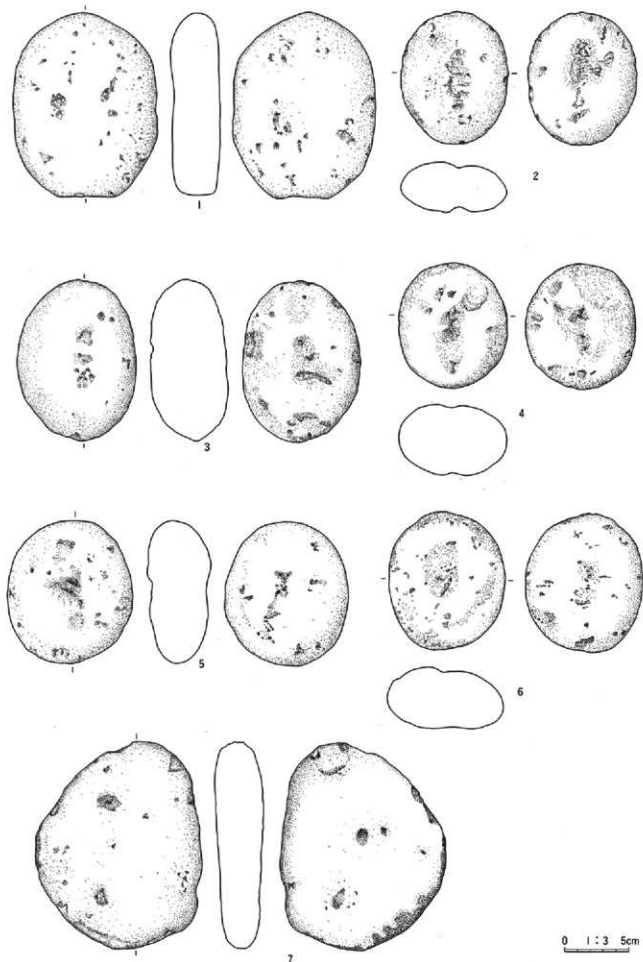
表15 磨石計測表

No.	出土区	大きさ(mm)			重量(g)	分類	押回	図版
		長	幅	厚				
1	15-11・SG1F3	146	114	36	932	II	48-1	47-1
2	13次・2トレII	164	131	38	1078	II	48-7	47-7
3	19-12・SG1F3	81	67	34	214	I	49-8	48-8
4	41-4・SG1F1	103	106	50	784	II	49-9	48-9
5	15-13・SG1F4	91	82	46	474	I	49-11	48-11
6	16-11・SG1F4	174	157	43	1692	II	49-12	48-12
7	21-11・SG1F4	123	86	27	320	II	49-13	48-13
8	22-16・SG1F4	134	76	40	645	II	49-15	49-15
9	19-13・SG1F2	160	82	33	762	II	50-17	49-17
10	21-9・SG1F3	129	97	36	660	II	50-18	49-18
11	23-9・SG1F3	124	100	56	797	II	50-21	49-21
12	23-8・SG1F3	129	101	57	882	II	50-23	49-22
13	22-10・SG1F3	57	71	25	95	II	50-24	50-24
14	SK21F3	115	101	54	854	II	51-25	50-25
15	SP80F1	90	69	31	209	I	51-26	50-26
16	SX12右側	119	102	48	681	II	51-27	50-27
17	SP63F1	71	72	61	292	III	51-28	50-28

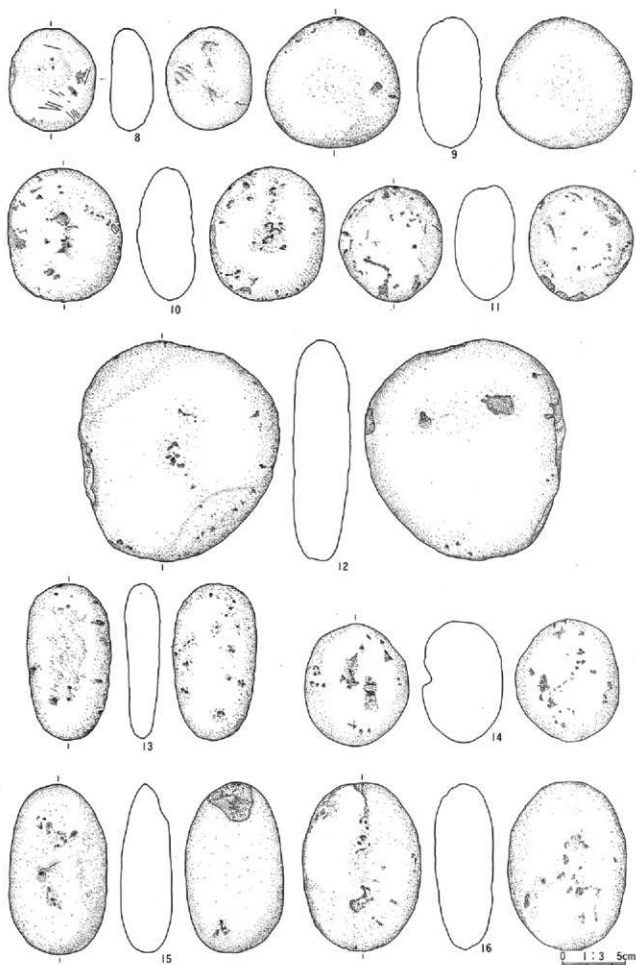
表16 凹石計測表

No.	出土区	大きさ(mm)			重量(g)	分類	押回	図版
		長	幅	厚				
1	13-14・SG1F1	105	85	39	428	II	48-2	47-2
2	16-10・SG1F4	128	94	61	896	II	48-3	47-3
3	21-10・SG1F4	99	86	56	542	II	48-4	47-4
4	C区	113	98	49	660	II	48-5	47-5
5	25-9・SG1F3	109	92	48	633	II	48-6	47-6
6	22-10・SG1F4	105	90	46	537	II	49-10	48-10
7	12-14・SG1F4	96	81	63	559	II	49-14	48-14
8	SK21F	132	94	46	739	II	49-16	49-16
9	24-9・SG1F3	183	57	43	712	I	50-19	49-19
10	15-11・SG1F2	122	101	51	728	II	50-20	49-20



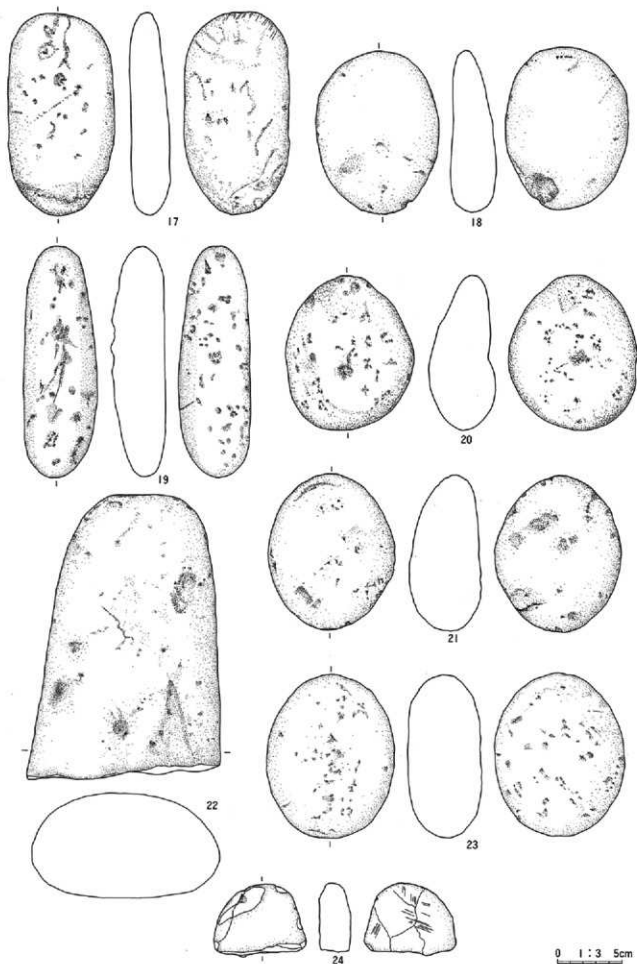


第48図 磨石・凹石実測図(1)

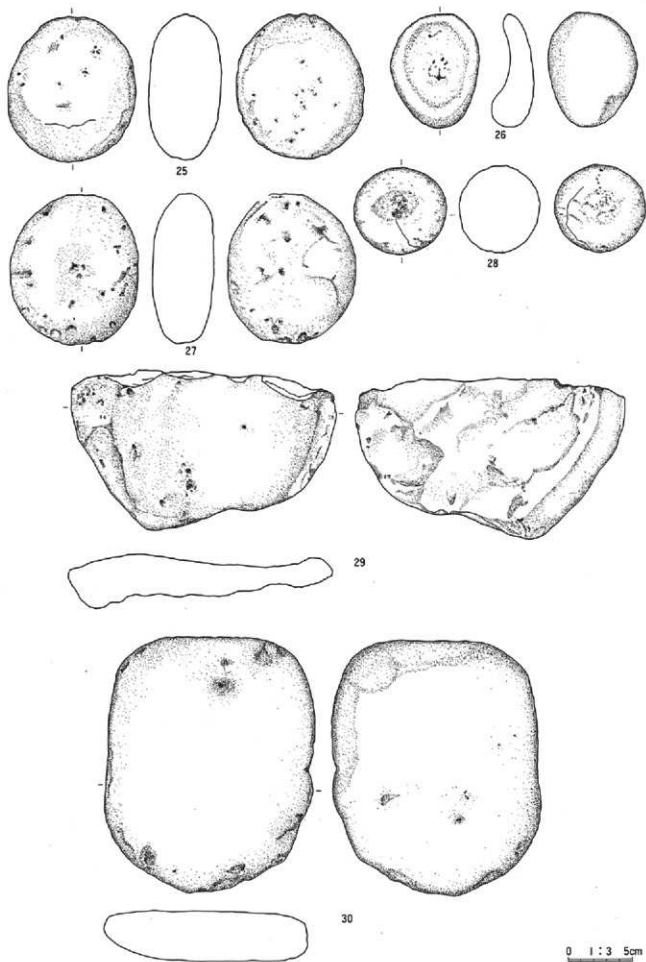


第49圖 磨石・凹石夾測圖(2)

V 出土遺物

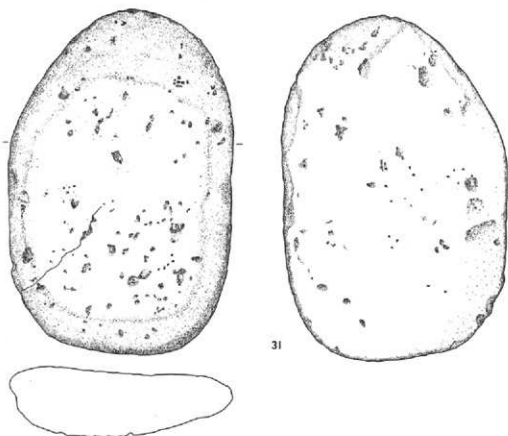


第50図 磨石・凹石・石棒実測図

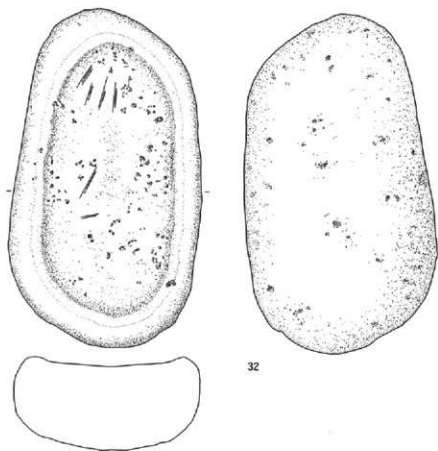


0 1:3 5cm

第51圖 磨石・凹石・石皿実測図



31



32

0 1:3 5cm

## 5 弥生時代以降の遺物

## 5 弥生時代以降の遺物 (第53～55図、表17、図版61～64)

本遺跡からは、縄文時代の遺物の他に、弥生時代から江戸時代の土器や遺物が整理箱にして3箱分出土している。以下に各遺物について時代毎に5群に分類しながら述べる。

## (1) 第I群土器 (第53図1・2)

弥生時代に属する遺物で、弥生土器の破片がSG1から2点出土している。1は壺の体部片で、斜位の燃糸文が施されている。2は壺の口縁部片で、盃状の口縁に爪形の連続制突文が施されている。天王山武器の範疇に概括され、時期は弥生時代後期にあたる。

## (2) 第II群土器 (第53図4)

古墳時代に属する遺物で、内面にヘラミガキ調整が施されている土師器の坏片がSG1から1点(3)出土している。資料が少ないため即断はできないが、時期的には古墳時代後期頃に当ると思われる。

## (3) 第III群土器 (第53図3・5～17、第54図18～23・26～31)

平安時代に属する遺物で、土師器(III A)、須恵器(III B)、赤焼土器(III C)、その他(III D)の4類に大別される。C区のSG2からの出土例が多い。

土師器は壺の口縁部が1点(第53図10)出土しており、内面に刷毛目調整が施されている。赤焼土器は壺が1点(11)と皿が2点(3・9)出土している。

須恵器には坏(第53図5～8、12～17・第54図18)高台付坏(第54図19～22)、蓋(同図23)、壺(同図26～29)、横瓶(同図31)、甕(同図30)の器種がある。須恵器坏の底部は13を除きすべて回転糸切り離して、底径は比較的小さい。高台付坏も同様である。壺や横瓶、甕は小破片が多く、器形がわかるものは出土しなかった。第54図32は須恵器壺の口縁部片が付着している窯滓で、内部に須恵器を焼く燃料となった棒状の炭化物を多く含んでいる。

須恵器の時期は、これまで述べた特徴から、平安時代9世紀末葉から10世紀前半頃に想定できる。土師器や赤焼土器の時期もほぼ同じ頃と思われるが、赤焼土器の皿は「カワラケ」と呼ばれているもので12世紀後半頃に当たる。

C区については、畑等を盛り土する際に寒河江市平野山窯跡付近から土を運んだという地元の方の話があり、第54図32の窯滓もその関連で理解すべきかもしれない。

## (4) 第IV群土器 (第54図24・25、第55図33・36～39)

中世に属する遺物で、珠洲系陶器(IV A)と瓦質土器(IV B)の二つに大別される。珠洲系陶器のうち、摺鉢は口縁部がほぼ直立する片口のものである。(24・25)。36～39はすべて甕の体部片で、外面に細い条線状の叩き目、内面に円形のアテ痕および条線状の叩き目が施されている。時期は不明な点が多いが、摺鉢と合わせ鎌倉時代頃と思われる。

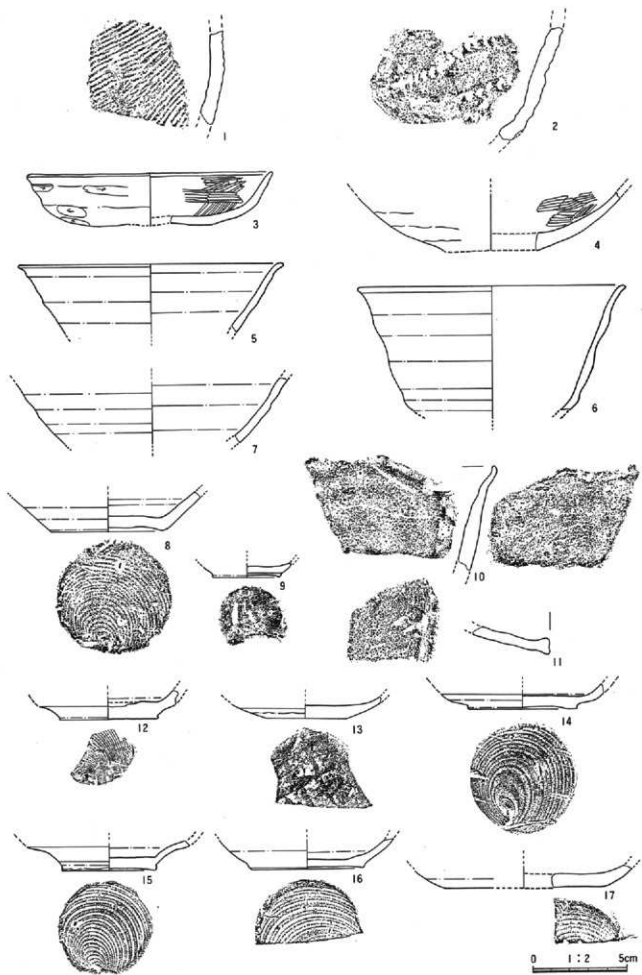
## (5) 第V群土器 (第55図34・35)

近世に属する遺物で、陶器(V A)と磁器(V B)の二つに大別される。34は赤褐色に焼き締まった器肌の摺鉢の底外面に灰釉、内面に格子状の叩き目が施されている。35は内外面に鉄釉の施されている高台付きの摺鉢である。この他に磁器も小量出土している。

V 出土遺物  
表17 須恵器等観察表

単位: mm

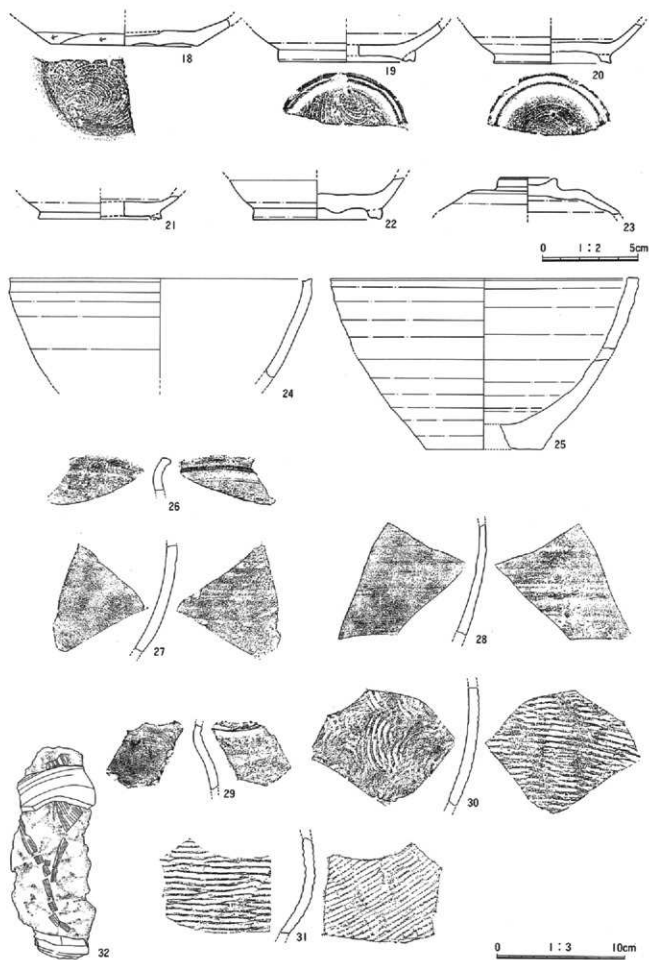
No	出土地点・層位	器種	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	分類	博図	図版
1	SG1F3	弥生土器壺			(55)	斜位捺紋R	ミガキ	I	53-1	61-1
2	SG1F3	弥生土器壺			(50)	爪形連続刻突文	不明	I	53-2	61-2
3	SG1F4	赤焼土器皿	130		(28)	指環正底	ヘラミガキ	III C	53-3	61-3
4	SG1F4	土師器杯			(30)	ヘラケズリ	ヘラミガキ	II	53-4	61-4
5	SG2・12トレI層	須恵器杯	140		(38)	ロクロ痕	ロクロ痕	III B	53-5	61-5
6	SG2・12トレI層	須恵器杯	144		(74)	ロクロ痕	ロクロ痕	III B	53-6	61-6
7	SG2F3	須恵器杯	144		(33)	ロクロ痕	ロクロ痕	III B	53-7	61-7
8	SG1F2	須恵器杯		61	(21)	底面回転余切り	ロクロ痕	III B	53-8	61-8
9	SG2・11トレII層	赤焼土器皿		34	(8)	底面回転余切り	不明	III C	53-9	61-9
10	SG2・12トレI層	土師器壺			(53)	不明	刷毛目	III A	53-10	61-10
11	SG2・12トレI層	赤焼土器蓋			(15)	ロクロ痕	不明	III C	53-11	61-11
12	SG1F1	須恵器杯		51	12	底面回転余切り	ロクロ痕	III B	53-12	61-12
13	SG2・12トレI層	須恵器杯		70	(12)	底面回転余切り	ロクロ痕	III B	53-13	61-13
14	SG2・12トレII層	須恵器杯		58	(13)	底面回転余切り	ロクロ痕	III B	53-14	61-14
15	SG2F4	須恵器杯		50	(15)	底面回転余切り	ロクロ痕	III B	53-15	61-15
16	SG2・12トレI層	須恵器杯		(58)	(16)	底面回転余切り	ロクロ痕	III B	53-16	61-16
17	C区I層	須恵器杯		88	(12)	底面回転余切り	ロクロ痕	III B	53-17	62-17
18	SG2F2	須恵器杯		78	(15)	手持ちヘラケズリ 底面回転余切り	ロクロ痕	III B	54-18	62-18
19	SG2F3	須恵器高台付杯		72	(21)	底面回転余切り	ロクロ痕	III B	54-19	62-19
20	SG1F3	須恵器高台付杯		61	(22)	底面回転余切り	ロクロ痕	III B	54-20	62-20
21	SX4F2	須恵器高台付杯		66	(12)	底面回転余切り	ロクロ痕	III B	54-21	62-21
22	SG2F2	須恵器高台付杯		67	(21)	底面回転余切り	ロクロ痕	III B	54-22	62-22
23	SG2F2	須恵器蓋		30	(20)	回転ヘラケズリ	ロクロ痕	III B	54-23	62-23
24	SG2F1	珠洲系陶器壺鉢	238		(79)	ロクロ痕	ロクロ痕	IV A	54-24	63-24
25	SG1F2	珠洲系陶器壺鉢	243	93	(135)	底面回転ヘラケズリ	ロクロ痕	IV A	54-25	63-25
26	SG1F4	須恵器壺			(27)	ロクロ痕	ロクロ痕	III B	54-26	63-26
27	SG2F3	須恵器壺			(79)	ロクロ痕	ヘラナゲ	III B	54-27	63-27
28	C区I層	須恵器壺			(58)	ロクロ痕	ロクロ痕	III B	54-28	63-28
29	SG1F1	須恵器壺			(35)	ロクロ痕	ロクロ痕	III B	54-29	63-29
30	SG1・4トレIV層	須恵器壺			(93)	格子状叩き目	青海波叩き目	III B	54-30	63-30
31	SG1F2	須恵器横瓶			(76)	格子状叩き目	糸織状叩き目	III B	54-31	63-31
32	SG2F2	須恵器付着煎茶	長さ 196	幅52	厚さ 85	須恵器葉片付着	棒状木炭痕	III D	55-32	63-32
33	SG1F3	瓦質土器鉢		(94)	(41)	炭化物付着	黒色化処理	IV B	55-33	64-33
34	SG1・2トレ	近世陶器指鉢			(27)	灰釉付着	格子目状叩し目	V A	55-34	64-34
35	SG2・4トレ	近世陶器指鉢			(44)	底面回転余切り	糸織状叩し目	V A	55-35	64-35
36	SG1F4	珠洲系陶器壺			(88)	糸織状叩き目	円形7ヶ直糸織状叩き目	IV A	55-36	64-36
37	SG1F2	珠洲系陶器壺			(80)	糸織状叩き目	糸織状叩き目	IV A	55-37	64-37
38	SG1F4	珠洲系陶器壺			(103)	糸織状叩き目	円形7ヶ直糸織状叩き目	IV A	55-38	64-38
39	SG1F2	珠洲系陶器壺			(167)	糸織状叩き目		IV A	55-39	64-39



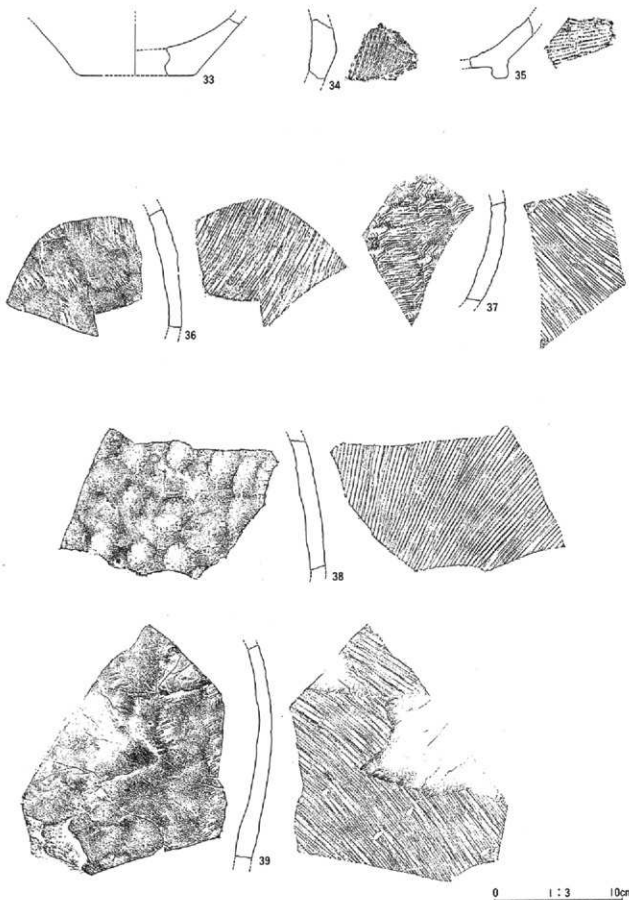
第53図 弥生時代以降の遺物 (1)



V 出土遺物



第54図 弥生時代以降の遺物（2）



第55図 弥生時代以降の遺物（3）

## VI まとめ

## 1 縄文土器群について

本遺跡出土の縄文土器は、第V章で述べたように縄文時代中期から同晩期末葉にかけてのもので、とく中期末葉から同後期中葉のものが主体を占める。出土した土器の大半が小破片で、全体の器形がわかるものも少ないが、県内における縄文時代後期前半の資料が数少ない現状から貴重な資料といえる。

本項では先に分類した第I群～第IX群土器について、周辺遺跡の調査成果をもとに時期的な位置付けを行う。

第I群土器は1・2類とも縄文時代中期大木7b式期に属するもの、第II群土器は同中期大木8b式期に属するものである。両群とも資料が少なく詳細は不明である。

第III群土器は縄文時代中期末大木10式期に属するもので、1～3類が4類に先行する。4類は、口縁部文様の展開が隆帯によって行われているもので、隆帯が鱗状になるのが特徴である。大木10式の中でもっとも新しい後期直前の土器群で、山形県内では大江町橋上遺跡からまとめて出土している。

第IV群土器は岩手県の門前式といわれる土器より古い要素をもっている縄文時代後期初頭の土器群で、岩手県大迫町観音堂遺跡からまとめて出土している。本群1・2類の内容もほぼそれと同様であり、とくにSK25土壌からの一括資料が目される。

第V群土器は門前式期に併行するもので、大形の橋状把手や連鎖状隆帯、ボタン状貼付文をもつ土器の他に方形区画文や平縁、沈線による土器も共存する。遺物の量は少ないがSK36土壌からややまとまって出土している。爪形文を特徴とする新潟県の三十稻場式土器も少量ながら共存する。

第VI群土器は宮城県宮戸Ib式期に併行するもので、連鎖状隆帯やボタン状貼付文をもつ土器はあまり認められず、沈線による区画文や円形の刺突文が主体になる。とくに、3類とした波状口縁の頂部から直接胴部に磨消縄文が展開する土器が目される。

第VII群土器は宮戸Ib式期に後続するもので、富沢I遺跡でも少量出土している。宮城県二屋敷遺跡や福島県綱取遺跡に類似した土器があり、これを「綱取II式」の新段階と呼ぶ説もある。

第VIII群土器は縄文時代後期中葉頃に属する土器群で、関東地方の加曾利BII式期、青森県の十腰内III式期に併行すると思われるものである。資料が少なく、今後さらに検討を必要とする。

第IX群土器は縄文時代晩期に属する土器群である。このうち、1類は東北地方南半の大洞B式期、2類は大洞C2式期の新しい段階、3類は大洞A式期に各々併行すると思われる。富沢I遺跡の縄文土器ではもっとも新しい時期になる。

富沢I遺跡では、上記の第I群～第IX群土器の中でも量的に第IV群～第VI群土器が多く出土しており、つぎに述べる遺構の時期もこれと同様の傾向を示す。

## 2 石器について

### a 石器の所属時期について

今回の調査で得られた石器は、ほとんどがSG1・SG2河川跡からの出土である。石器時代に限って見た場合の両河川跡の所属時期については、その出土土器から縄文時代中期前半から弥生時代までの広範な内容を包括し、その中でも縄文時代中期末葉から後期前葉にかけての土器群の出土量にまとまりがみられる。しかしこれらを層的に分離することは困難であった。したがってそれらと共伴する石器群についても、主体となる時期は把握できるものの、全体としてはかなり長い時間幅をもち、一括性は低いと考えられる。

集落域であるB区の遺構から出土した石器のなかで、土器との共伴関係によって所属時期を推定できるものは、SK21出土の磨石(第51図25)・凹石(第49図26)、SK25の磨製石斧(第35図99)、SK34の石鏃(第31図18)・石錐(第32図46)・石筥(第33図67)、SK36の石錐(第32図47)・搔器(第34図73)および母岩1の接合資料、SK37の削器(図版42-1)がある。SK21からは大木10式、SK25・SK34からは門前式に先行する土器型式、SK36・SK37からは門前式併行の土器が各々出土している。これら以外のものについては時期を確定させることが現状では難しい。石器自体のもつ属性の検討による時期認定が課題となろう。

### b 石器群からみた遺跡の性格について

今回発掘調査を実施した調査区は集落をとりかこんで検出された河川跡と東外縁部にあたる土壌域であり、集落本体は未調査区域として残されている。このような部分的な発掘調査によって本遺跡の構造を総合的に分析し、その性格に言及することは不可能であるが、石器の出土比率にみられる特徴は、遺跡の性格の一端を反映しているものと考えられる。前述したように出土遺物の整理、分析が未だ不十分なため、予察的な部分を多く含むが、以上の視点で本遺跡の石器群を概観する。

本遺跡から出土した石器は総数で約25,500点あるが、そのうちの約94.4%が石核、剥片類である。出土地点は河川跡を主体として、土壌内への一括廃棄の状況も看取される。さらに石核の出土点数991点は、剥片石器のなかのtoolの点数1,091点と大差のないものであり、集落本体が未調査であることを差し引いて考えてもその比率は高いといえる。これらの事実は遺跡内において剥片石器の生産が盛んに行われていたことを物語るものであろう。また遺跡周辺に現在でも多量に分布する頁岩の存在がこれらの生産行為を支えていたものと考えられる。すなわち本遺跡は、貯蔵穴としての土壌群や、量的にまとまって出土した植物質食糧の調理にかかわる磨石・石皿類の存在にみられる一般的な集落の機能のほかに、原産地型の石器生産跡としての一面を色濃くもっているといえることができる。近年の調査によって、西川町お仲間林遺跡(旧石器時代後期)や同山居遺跡(縄文時代中期)、寒河江市金谷原遺跡(旧石器時代後期)など、寒河江川流域に分布する遺跡の中には、時期差こそあるものの同様な生産基盤に立地した遺跡の報告例が増加しつつある。今後本遺跡出土の石器群に対して剥片石器の流通の可能性をふまえた検討が必要と考えられる。

### 3 遺構について

今回の調査によって富沢Ⅰ遺跡からは、旧河川跡が部分的な検出も含め3条、落ち込み遺構が5基、土壌が51基、溝状遺構が3条、柱穴と思われるピットが4個検出された。つぎに出土した土器の分析をもとに、各遺構の時期について述べる。

本遺跡でもっとも古い土器は、第Ⅰ・Ⅱ群土器とした縄文時代中期前葉から中葉のものであるが、断片的な出土であり、これに伴う遺構は認められない。

第Ⅲ群土器とした縄文時代中期末葉の土器は、SG1・2河川跡を除き、B区のSK21土壌とSK34土壌の二ヶ所から出土している。SK34土壌は下層のF4から第Ⅳ群土器が出土しており、一時期新しくなるものと考えられる。

第Ⅳ群土器とした縄文時代後期初頭の土器は、B区のSK25土壌を主体にSK34・54・56土壌とSX69落ち込み遺構の五ヶ所から出土している。

第Ⅴ群土器とした縄文時代後期前葉の土器は、B区のSK36土壌を主体にSK30・37・38・68土壌とSX69落ち込み遺構の六ヶ所から出土している。主にB区の南西部に分布しSK30・36・37・68は袋状土壌である。

第Ⅵ群土器とした縄文時代後期前葉の土器は、B区のSK32・39・78土壌とSX69落ち込み遺構の四ヶ所から出土している。主にB区の南東部に分布し、袋状土壌は伴わない。

第Ⅶ群土器とした縄文時代後期前葉の土器は、B区のSK48・55土壌の二ヶ所から出土している。主にB区の北西部に分布し、袋状土壌は伴わない。

第Ⅷ群土器とした縄文時代後期中葉の土器は、SG1・2河川跡とSX43落ち込み遺構からの出土であり、B区の土壌からは認められない。第Ⅸ群土器とした縄文時代晩期の土器も、SG2河川跡とSX4落ち込み遺構だけの出土である。

弥生時代以降古墳時代、平安～鎌倉時代、近世の遺物は、SG1・2河川跡からの断片的な出土で、これに直接該当する遺構は認められない。平安時代の遺物は、平野山窯跡から水田の盛り土として近年に土を持ってきた可能性がある。

富沢Ⅰ遺跡の集落全体については、発掘調査区が道路部分に限られており、また遺構も土壌のみで竪穴住居跡が検出できなかったことから、遺構や集落配置まで言及できる資料はない。ただし、今回の遺構配置や地形などからみて、B区の土壌群が集落の外縁の貯蔵穴が分布する場所にあたり、住居跡等の主たる部分は現在宅地が建っている遺跡の西側台地に分布する可能性がありそうである。SG1・2河川跡内の遺物分布状況も、西側台地にかかなりの集落跡があったことを示唆している。

B区の土壌のうち陥し穴と考えられるSK58・59・75土壌は、中から遺物の出土がないため時期は不明であるが、形態等から縄文時代のものと思われる。

B区やその西側の台地をとり囲むように廻るSG1・2河川跡のうちSG2河川跡は、断面観察等からかなり古くから流れていたと考えられ、縄文時代中期以後の川床は比較的浅くむしろ湿地となっている可能性が高い。ただし覆土上面に平安時代以降の遺物が含まれることから、両河川跡とも少なくとも江戸時代までは流れていたと思われる。

## 参考文献

- (1) 山形県教育委員会：「分布調査報告書(15)」山形県埋蔵文化財調査報告書第119集 1988年
- (2) 山形県教育委員会：「分布調査報告書(19)」山形県埋蔵文化財調査報告書第171集 1992年
- (3) (財)山形県埋蔵文化財センター：「富沢Ⅰ遺跡第1次調査説明資料」 1993年
- (4) 山形県：「土地分類基本調査 左沢」5万分の1国土調査 1986年
- (5) 大江町教育委員会：「橋上遺跡発掘調査報告書」山形県大江町埋蔵文化財発掘調査報告書第1集 1984年
- (6) 寒河江市教育委員会：「茶橋遺跡発掘調査報告書」山形県寒河江市埋蔵文化財発掘調査報告書第7集 1989年
- (7) 柏倉亮吉・伊藤 忍：「平野山古窯跡群」寒河江市教育委員会 1970年
- (8) 山形県教育委員会：「平野山古窯跡群第12地点遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第178集 1992年
- (9) 丹羽茂他：「菅生田遺跡」東北自動車道遺跡調査報告書所収 宮城県埋蔵文化財調査報告書第92集 宮城県教育委員会 1982年
- (10) 三浦謙一：「湯沢遺跡発掘調査報告書」岩手県埋蔵文化センター文化財第66集 (財)岩手県埋蔵文化財センター 1983年
- (11) 寒河江市：「寒河江市史上巻 原始・古代・中世編」 1994年
- (12) 秦 昭繁：「山形県における珪質頁岩分布と地域内の石材流通」福島考古第36号 1995年
- (13) 宮尾 亨：「三十稲場式の形式構成」季刊考古学第48号 1994年
- (14) 縄文セミナーの会：「第4回縄文セミナー 縄文後期の所問題」 1990年
- (15) 中村良幸：「観音堂遺跡」大迫町教育委員会 1986年
- (16) 田中則和他：「六反田遺跡発掘調査報告書」仙台市教育委員会 1986年
- (17) 高橋忠彦：「秋田県の縄文時代後期の土器」秋田県埋蔵文化財センター研究紀要第4号 1989年
- (18) 渋谷孝雄他：「吹浦遺跡第3・4次緊急発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第120集 山形県教育委員会 1988年
- (19) 渋谷孝雄他：「月ノ木B遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第135集 山形県教育委員会 1989年
- (20) 黒坂雅人他：「西ノ前遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第1集 (財)山形県埋蔵文化財センター 1994年
- (21) 黒坂雅人他：「お仲間林遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第20集 (財)山形県埋蔵文化財センター 1995年

## 報告書抄録

ふりがな	とみぞわいち ぼくつちょうりきほうちくしよ							
書名	富沢 I 遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第30集							
編著者名	佐藤庄一・黒坂雅人							
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター							
所在地	〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 0236-72-5301							
発行年月日	西暦1996年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とみぞわいち 富沢 I	山形県東河江市大字清助新田字富沢	6206	昭和62年度登録	38度 24分 秒	140度 14分 秒	19931124～ 19941007	3,500	一般国道 112号白岩 バイパス改 築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
富沢 I	集落跡	縄文時代 中期～後 期	旧河川跡 土壌	3条 縄文土器、土製品、 51基 石器、石製品		縄文時代の集落跡の一 部である土壌群とそれ を取り囲む旧河川跡を 検出		
		弥生時代		弥生土器				
		古墳時代		土師器				
		平安時代	その他 落ち込み・柱 穴など	土師器、須恵器、赤焼土 器				
		中世～ 近世		陶器、磁気、木製品				

版 函







遺跡遺景 (北西から)



調査区全景 (南東から)



A区調査前状況（南から）



A区完掘状況（南西から）



C区調査風景（北西から）



C区完掘状況（北西から）



A区調査前状況（北東から）



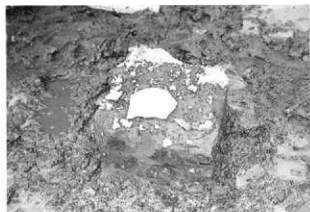
A区完掘状況（南東から）



A・B区作業状況（北東から）



SG1作業状況（東から）



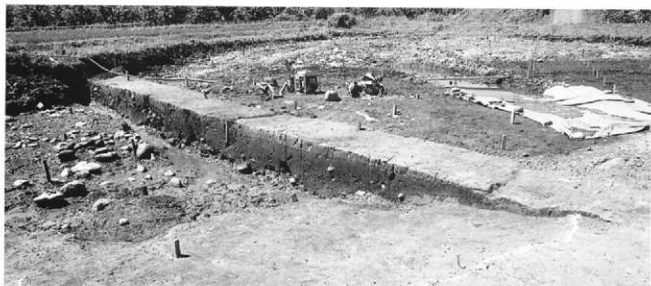
SG1須恵器出土状況（北から）



SG1中世陶器出土状況（西から）



SG1完掘状況（北東から）



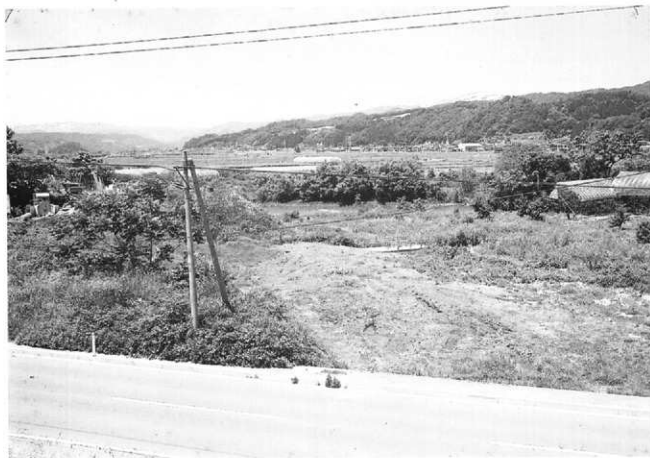
SG1北畦土層断面（北から）



SG1中央畦土層断面（南東から）



SG1南畦土層断面（東から）



C区調査前状況（東から）



C区遺構検出状況（西から）





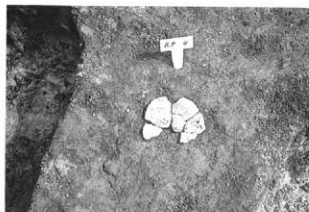
C区発掘状況 (北東から)



SK7土層断面 (南から)



SG2RP1出土状況 (南から)



SG2RP4出土状況 (西から)



SG2RP2出土状況 (南から)



SG2中央畦土層断面（北東から）



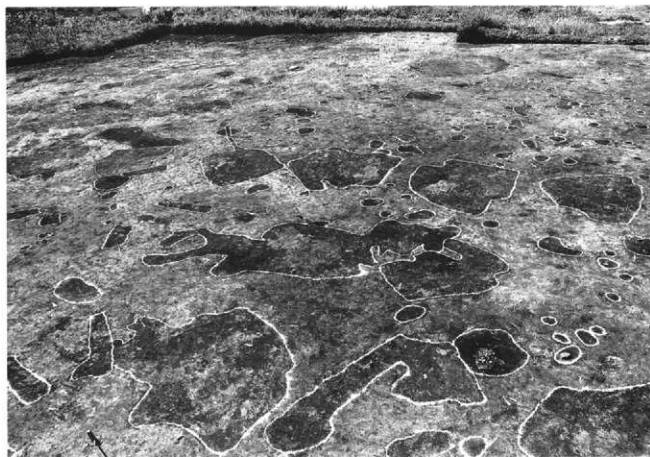
SG2中央畦北端部土層断面（東から）



SX4トレンチ土層断面（東から）



B区発掘状況（南西から）



B区遺構検出状況（北から）



B区調査風景（北東から）



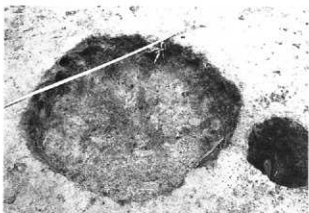
B区西部遺構完掘状況（北東から）



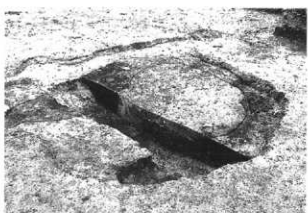
SK21土層断面（東から）



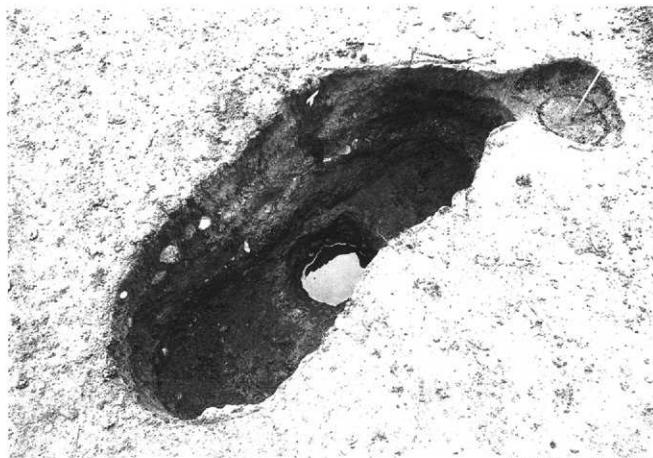
SK22完掘状況（西から）



SK23完掘状況（北から）



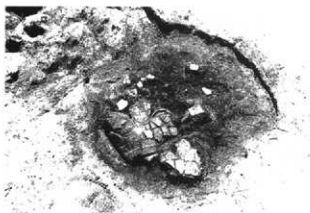
SX43土層断面（北から）



SK58完掘状況（北西から）



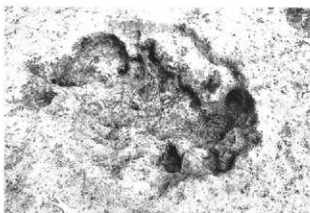
SK59完掘状況（南から）



SK25検出状況 (北から)



SK25完掘状況 (西から)



SK27完掘状況 (南から)



SK28完掘状況 (北から)



SK37完掘状況 (北から)



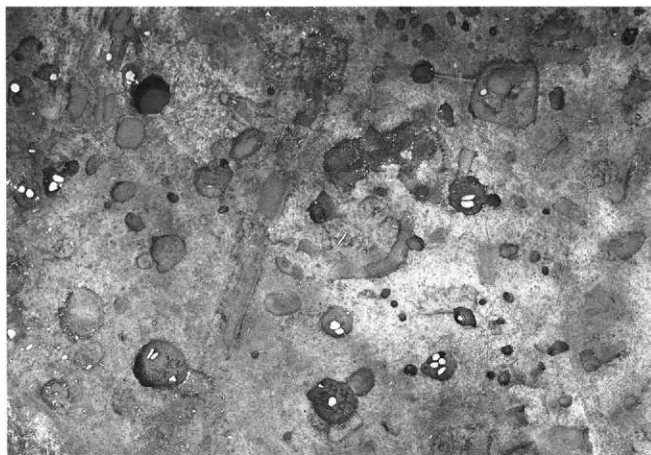
SK48縄文土器出土状況 (東から)



SK50縄文土器出土状況 (北から)



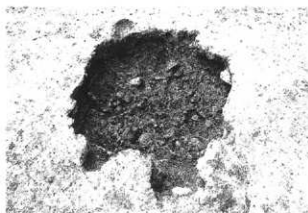
SK52完掘状況 (北東から)



B区南東部遺構完掘状況(東から)



SK29完掘状況(北から)



SK30完掘状況(北東から)



SK32縄文土器出土状況(東から)

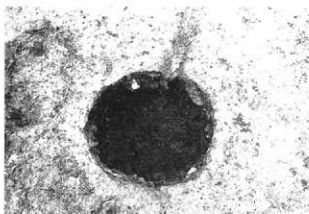


SK34完掘状況(南から)





EU77土層断面 (西から)



SK57完掘状況 (南から)



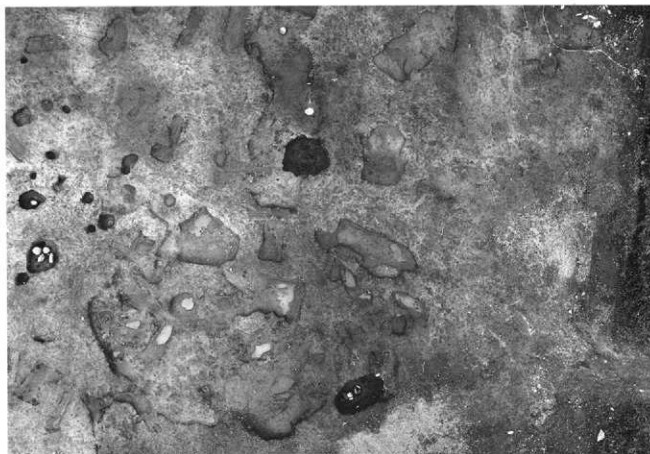
SK60RQ6出土状況 (北東から)



SK66土層断面 (南西から)



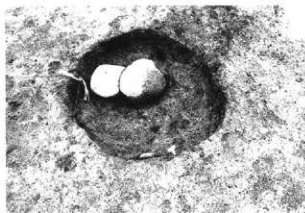
SK66完掘状況 (北西から)



B区北東部発掘状況（南東から）



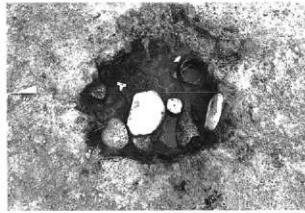
SK68縄文土器出土状況（南から）



SK70発掘状況（北西から）



SK71発掘状況（南から）



SK78発掘状況（南東から）



SK75完掘状況（北から）



SX12土層断面（南から）



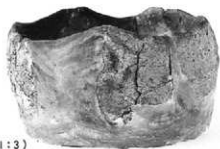
(S=1:3)

1



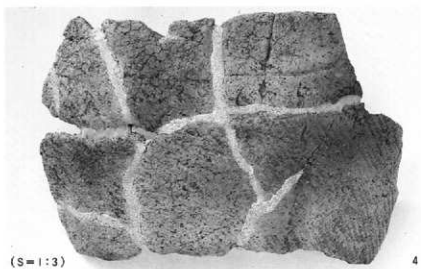
(S=1:3)

3



(S=1:3)

2



(S=1:3)

4



(S=1:3)

5



(S=1:3)

6

編文土器(1)



(S=1:3)

7



(S=1:3)



8

(S=1:3)

9



(S=1:4)

10



(S=1:3)

11



(S=1:3)

12



(S=1:3)

13



(S=1:3)

14



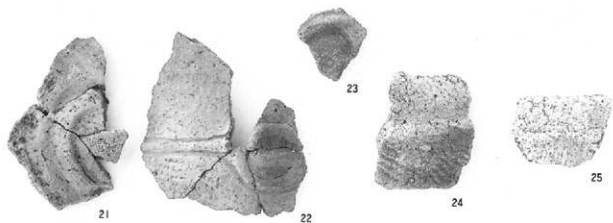
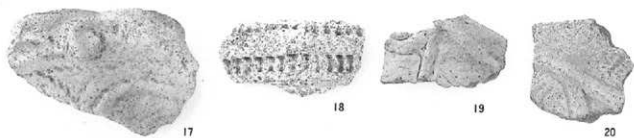
(S=1:2)

15

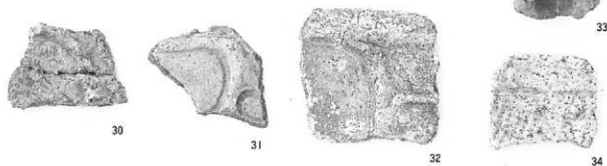
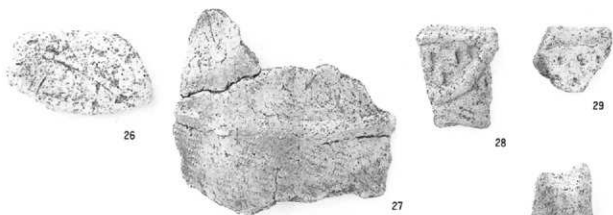


(S=1:2)

16

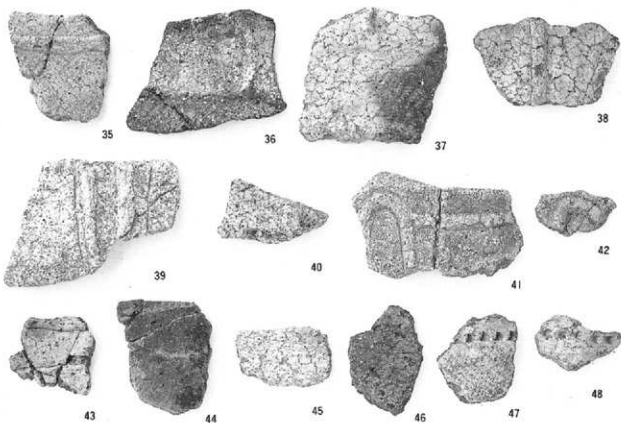


縄文土器 (4)

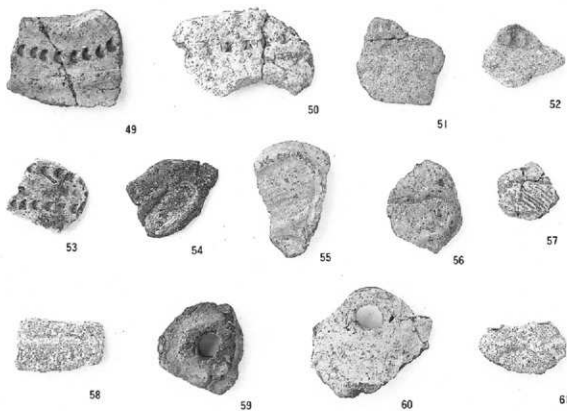


(S = 1 : 2)

縄文土器 (5)

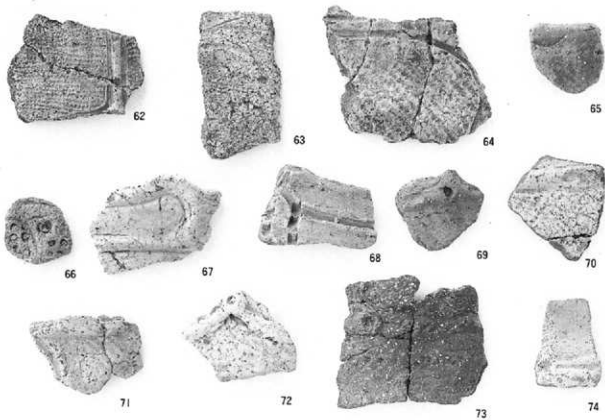


縄文土器 (6)

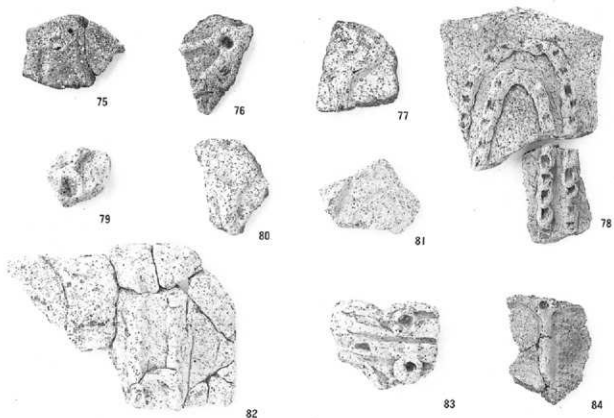


縄文土器 (7)



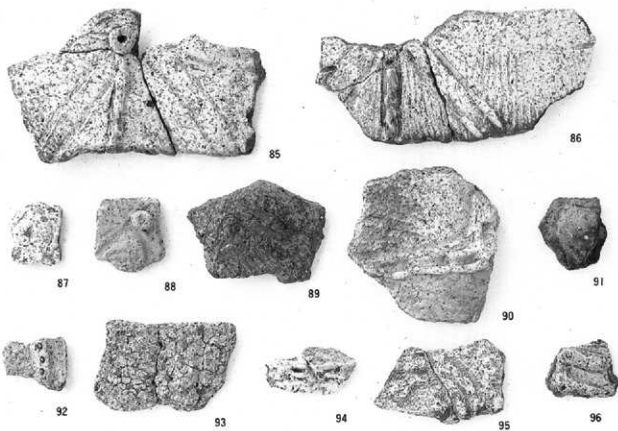


縄文土器 (8)

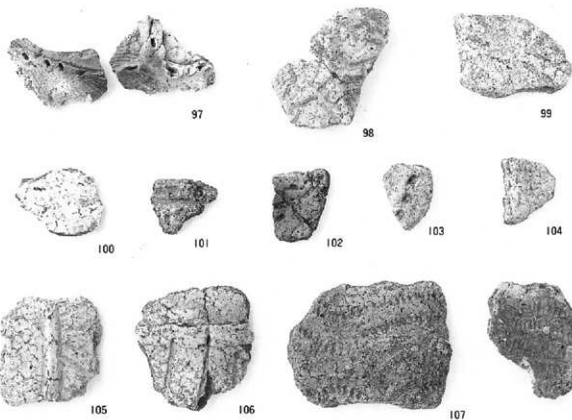


(S = 1 : 2)

縄文土器 (9)

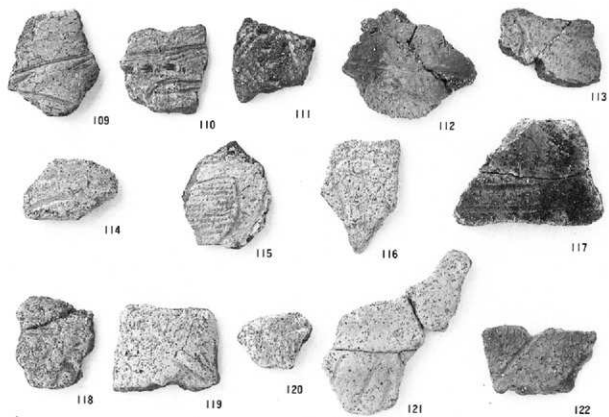


縄文土器 (10)

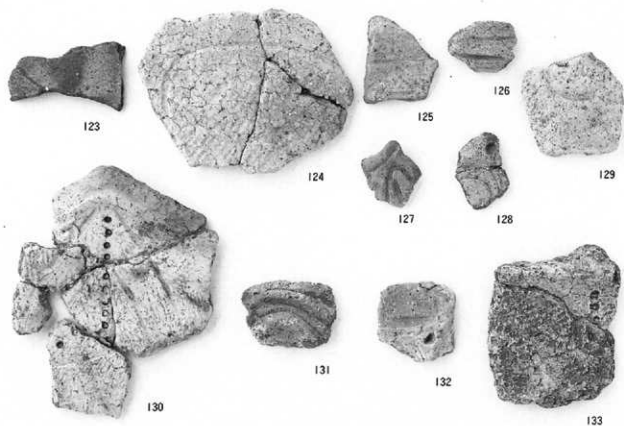


(S = 1 : 2)

縄文土器 (11)



縄文土器 (12)



(S = 1 : 2)

縄文土器 (13)



134



135



136



137



138



139



140



141



142



143

縄文土器 (14)



144



145



146



147



149



150



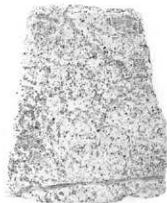
151



148



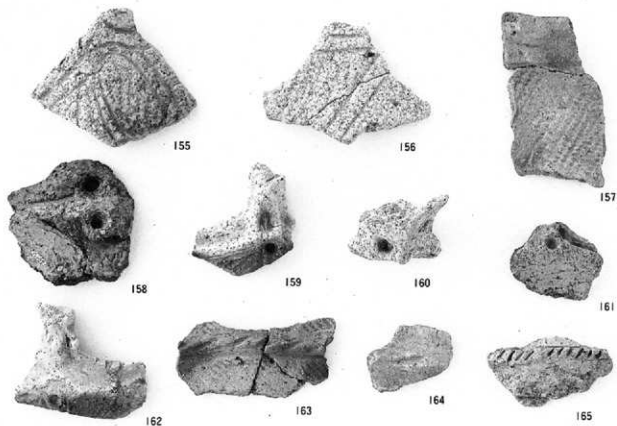
152



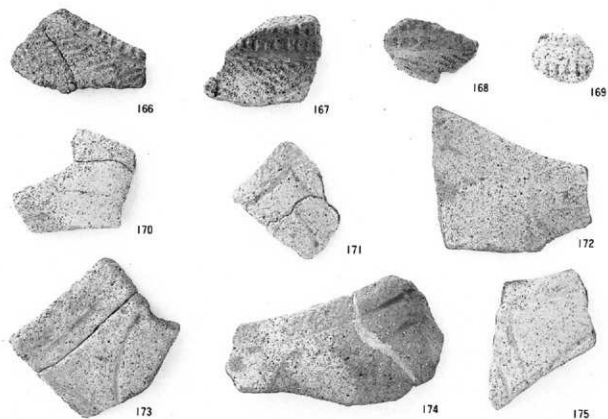
153



154

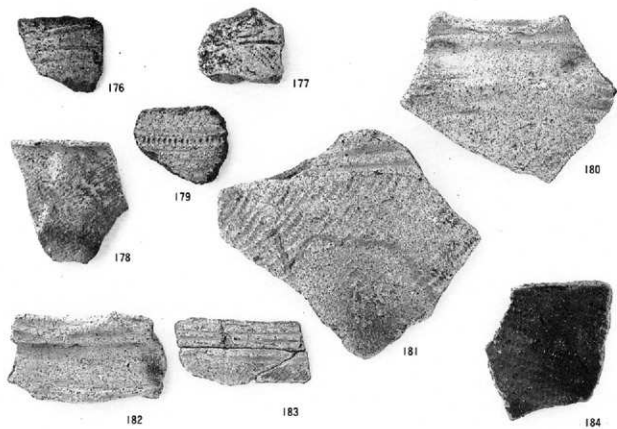


繩文土器 (16)

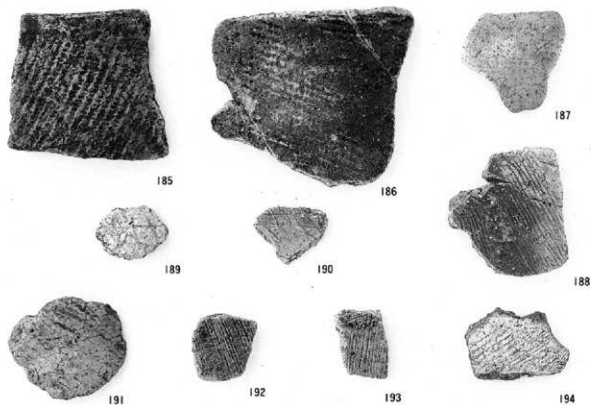


(S = 1 : 2)

繩文土器 (17)

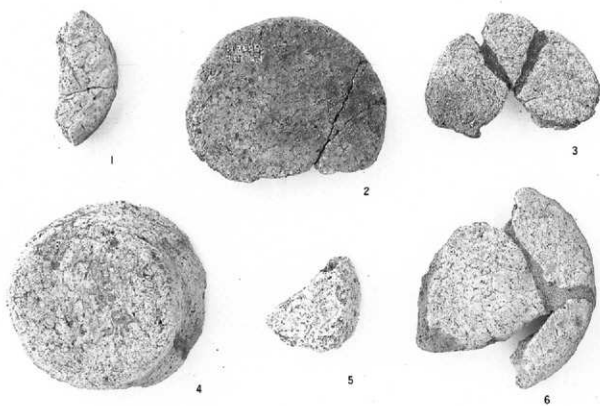


縄文土器 (18)

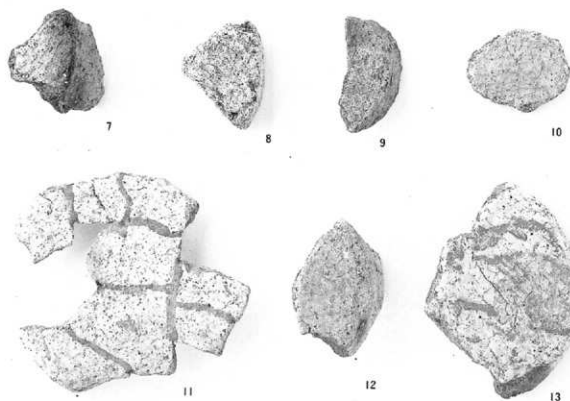


(S = 1 : 2)

縄文土器 (19)

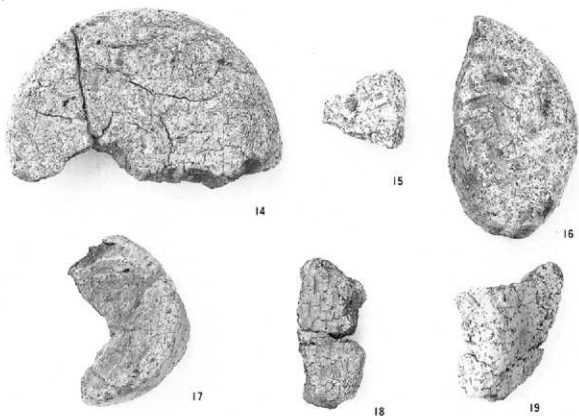


縄文土器底部 (1)

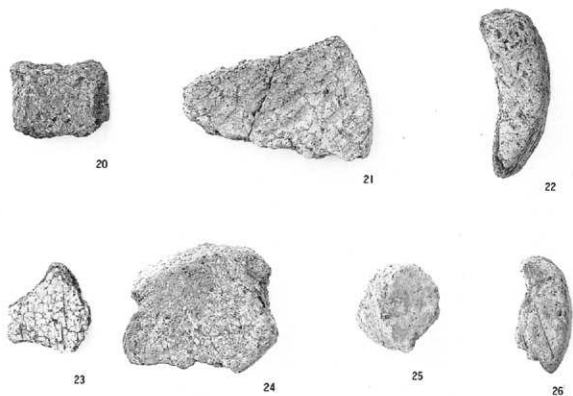


(S = 1 : 2)

縄文土器底部 (2)



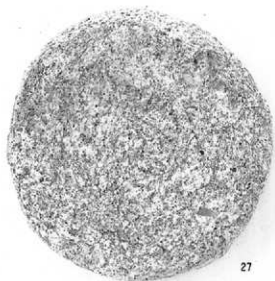
縄文土器底部 (3)



(S = 1 : 2)

縄文土器底部 (4)





27



29

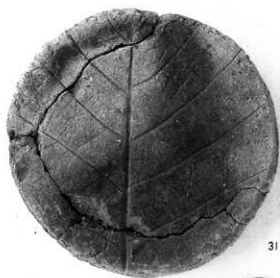


28



30

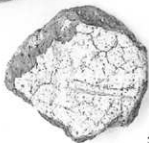
縄文土器底部 (5)



31



32



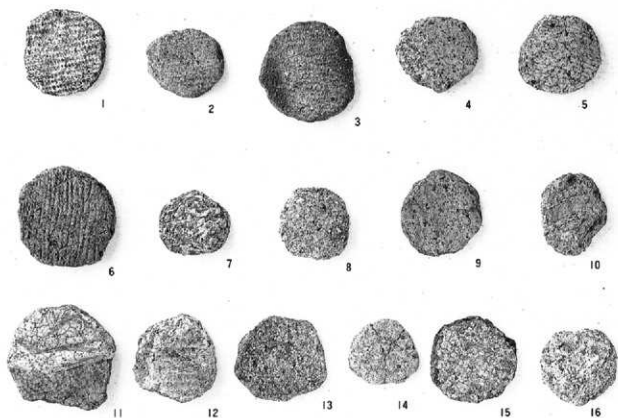
33



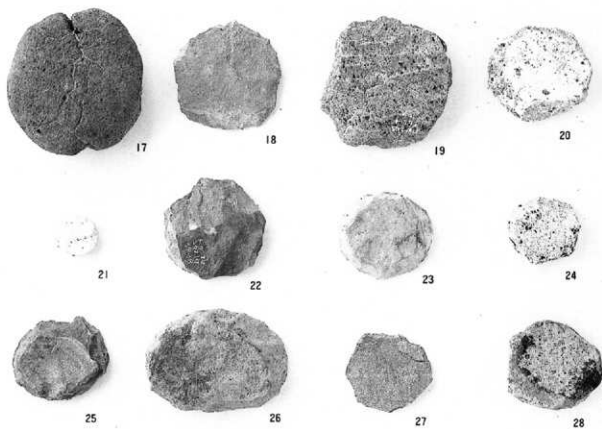
34

(S=1:2)

縄文土器底部 (6)

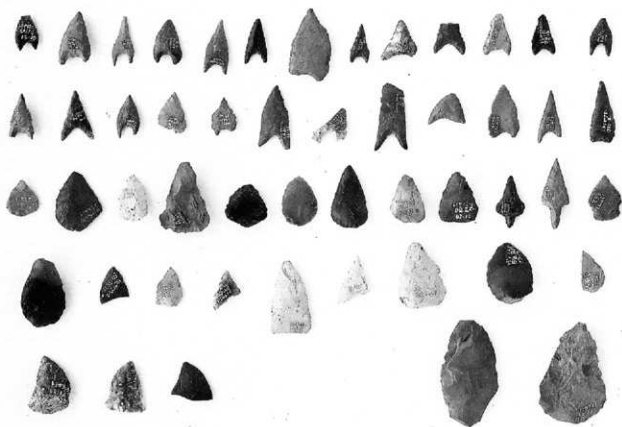
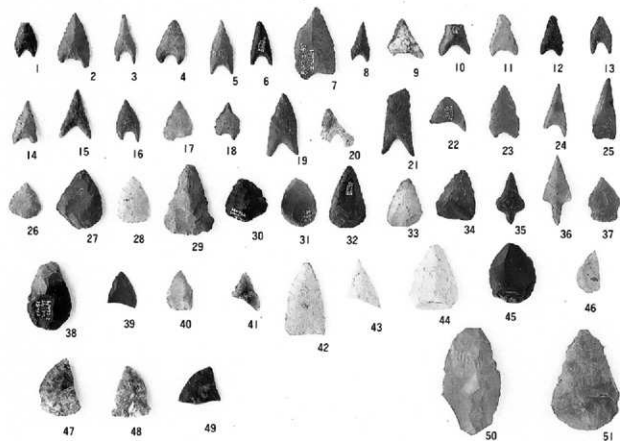


土製品



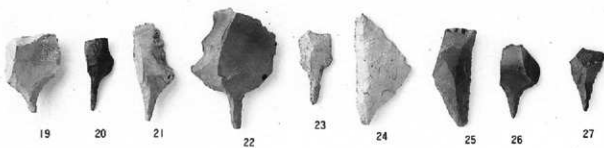
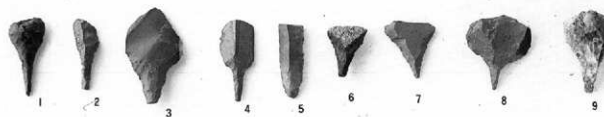
石製品

(S=1:2)



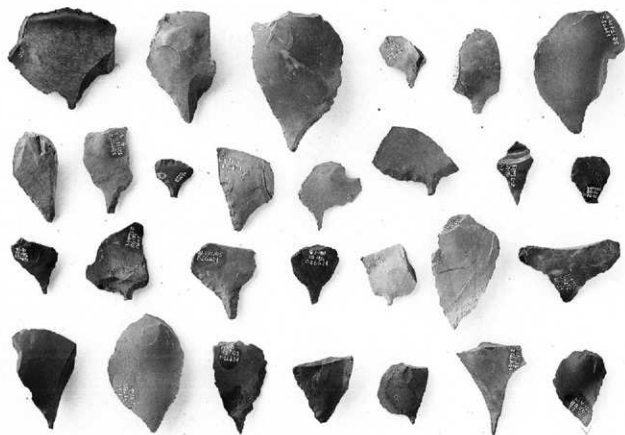
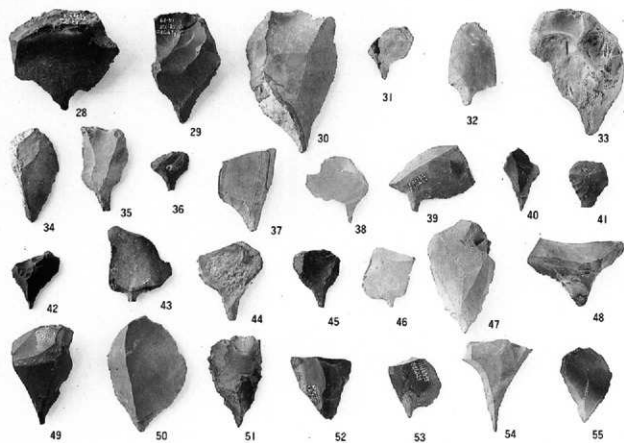
(S=1:2)

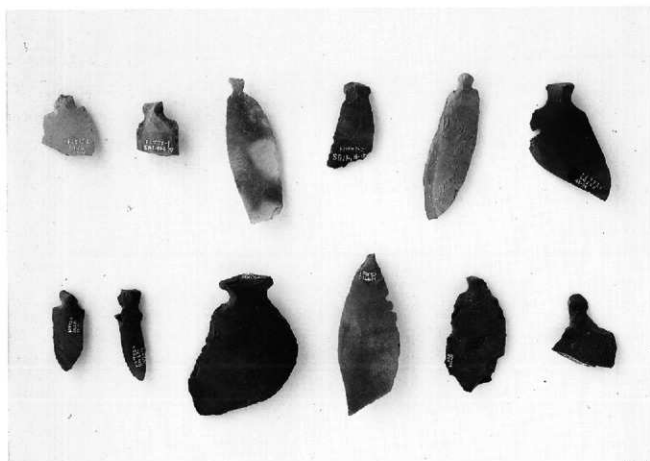
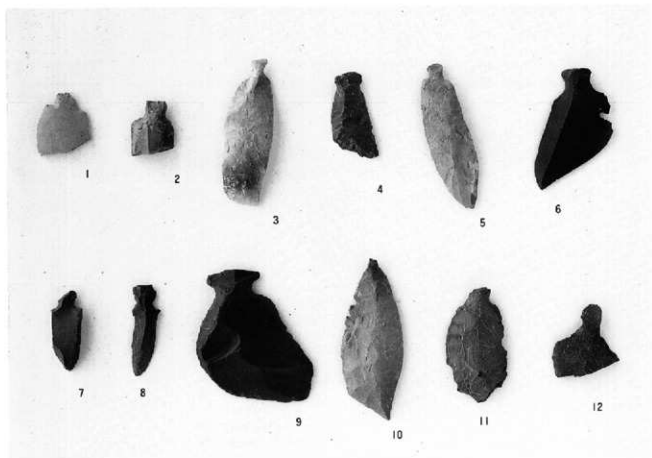
石鏃・尖頭器



(S = 1 : 2)

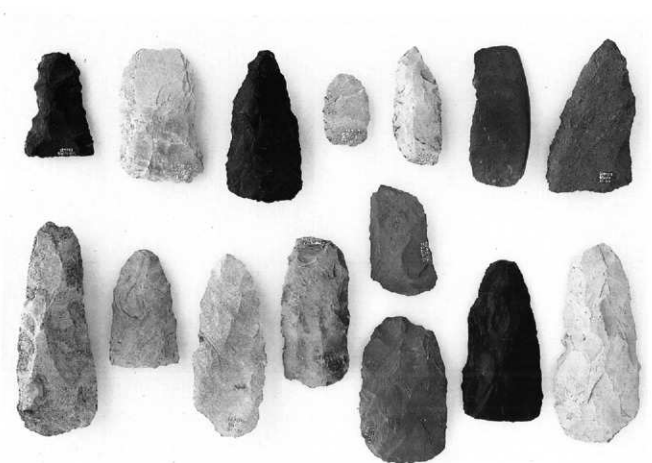
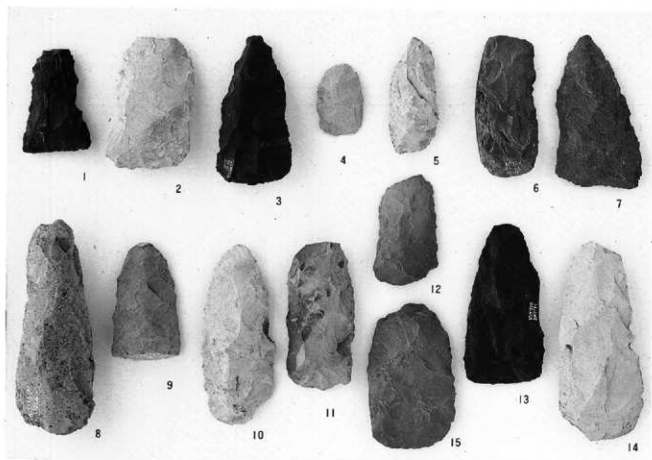
石錐 (1)





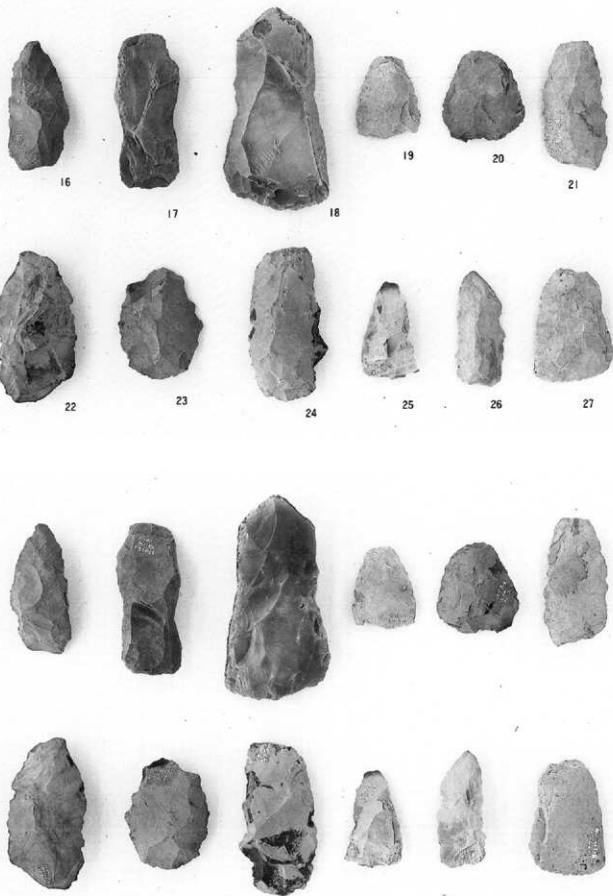
(S = 1 : 2)

石匙

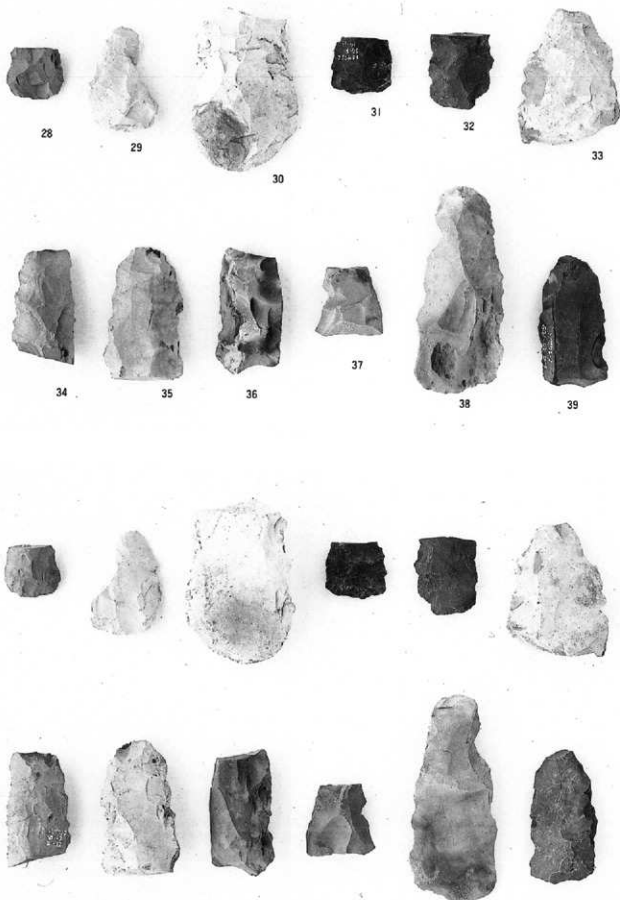


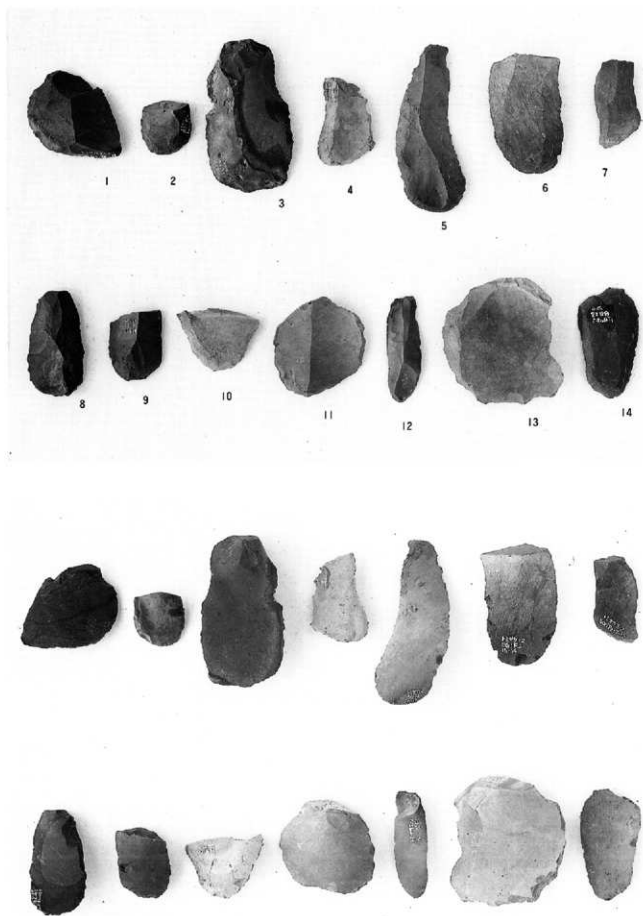
(S = 1 : 2)

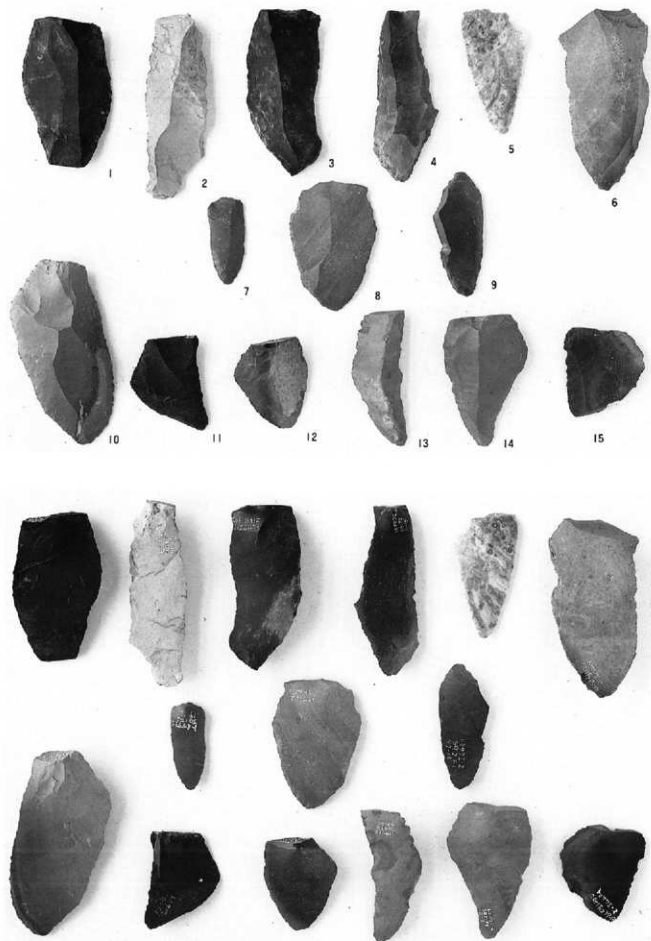
石器 (1)





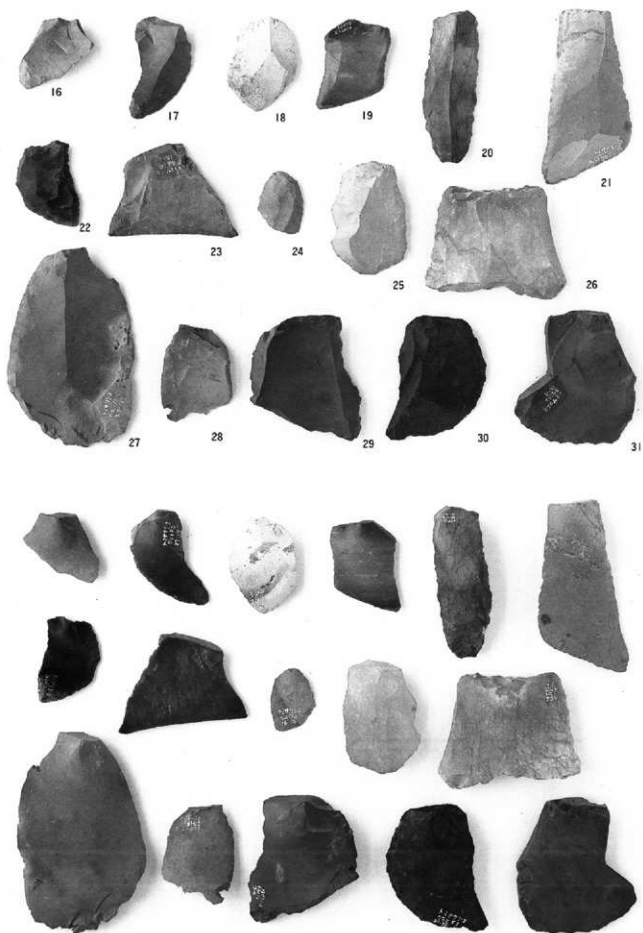






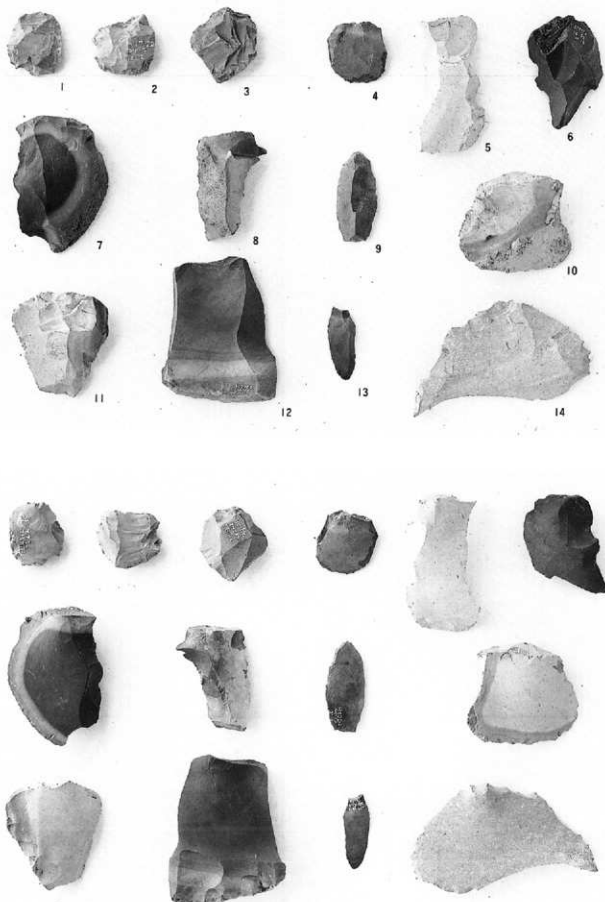
(S=1:2)

削器(1)



(S=1:2)

石器(2)



(S = 1 : 2)

ピエス・ユスキーユ、加工痕ある剥片



1



2



3



4

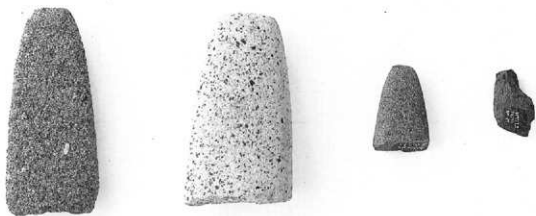
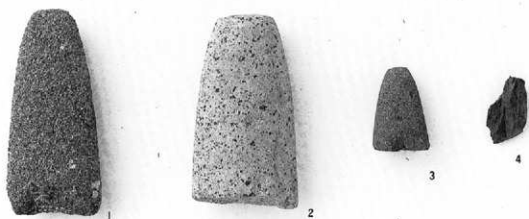


5



6



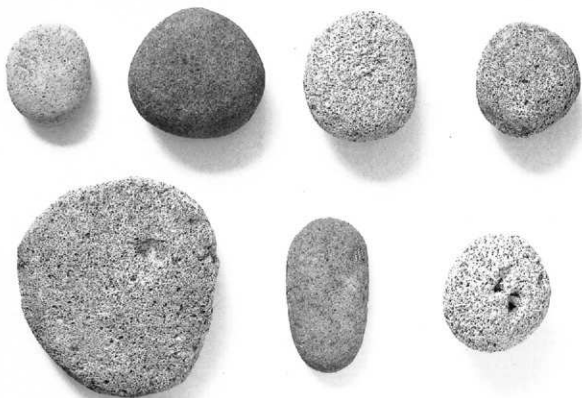
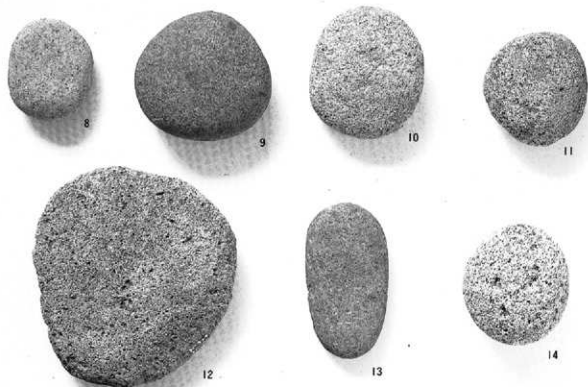




(S-1:3)

磨石・凹石 (1)







15



16



17



18



19



20



21

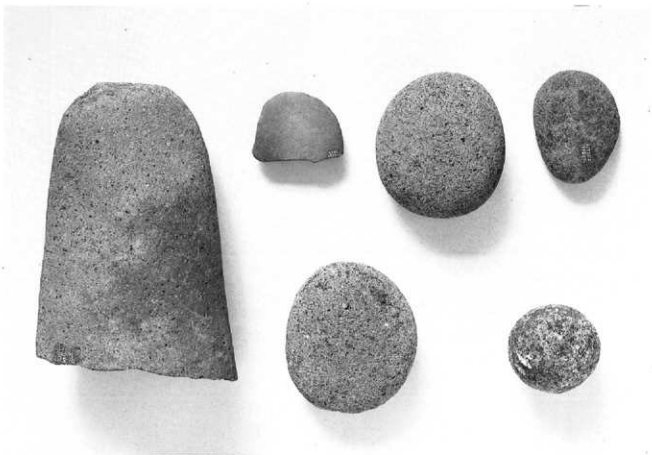
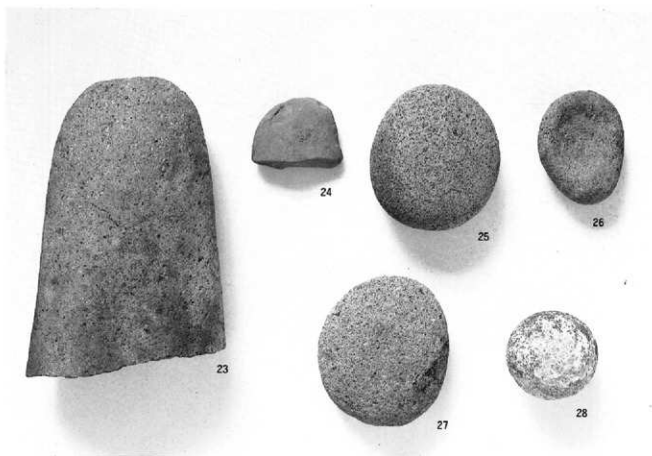


22



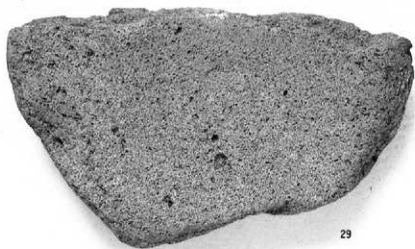
(s=1:3)

磨石・凹石(3)



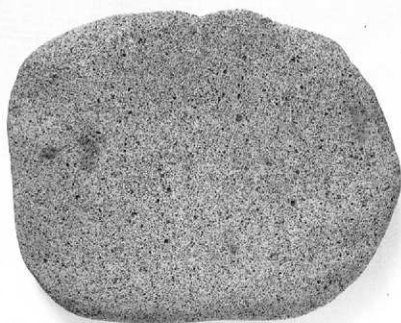
(S=1:3)

磨石・石棒

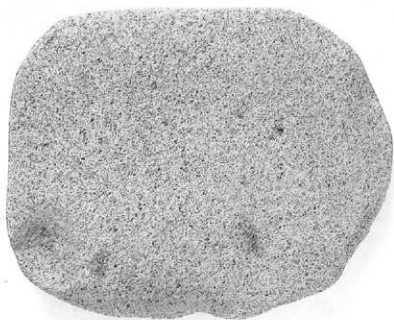


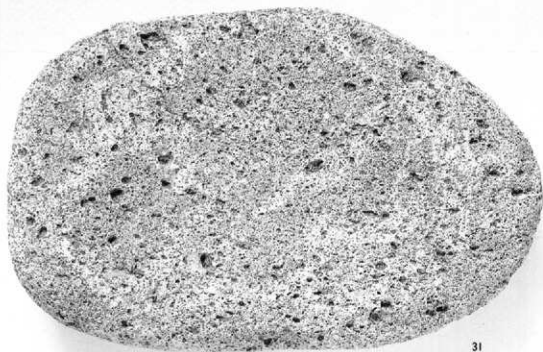
29



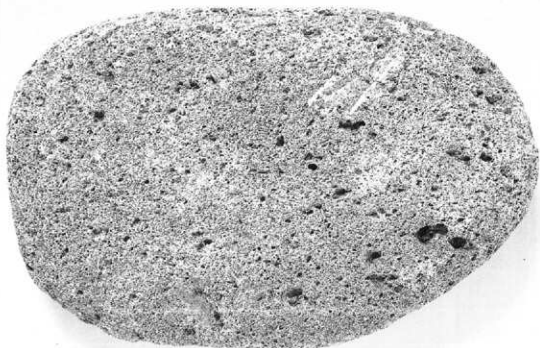


30



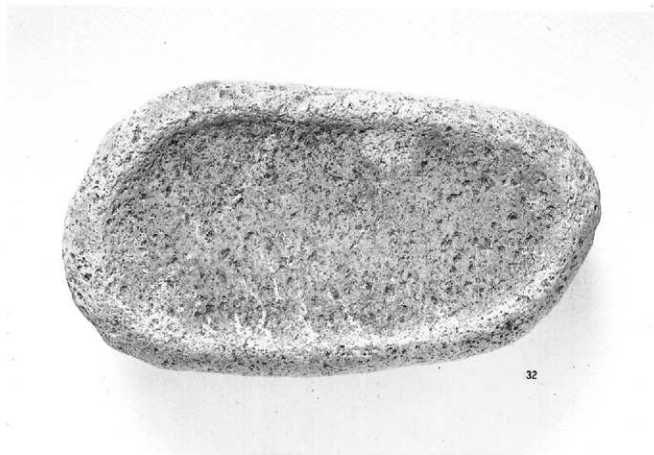


31



(S = 1 : 3)

石皿 (3)



32



(S-1:3)

石皿(4)







(S = 1 : 2)

母岩 | 接合制片 (1)



8



9



10



11



12



13



14





15



16



17



18



19



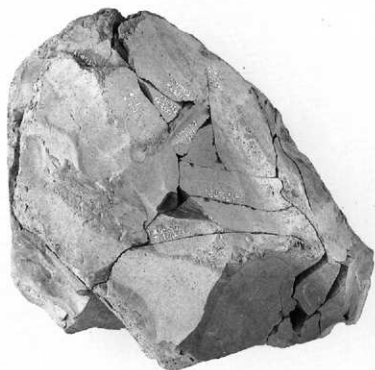
20

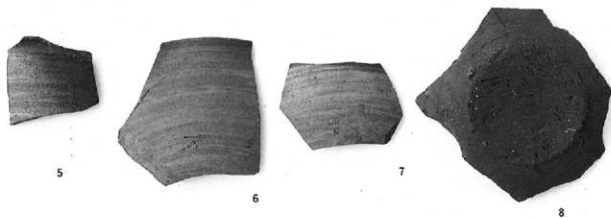


(S=1:2)

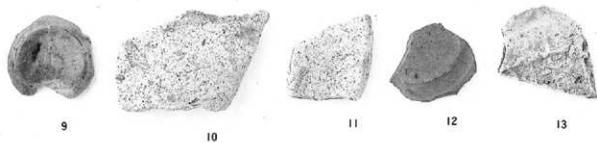
母岩I接合剥片(3)







弥生土器・土師器・須恵器 (1)

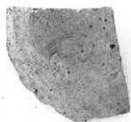


(S=1:2)

須恵器 (2)



17



18



19



20



21



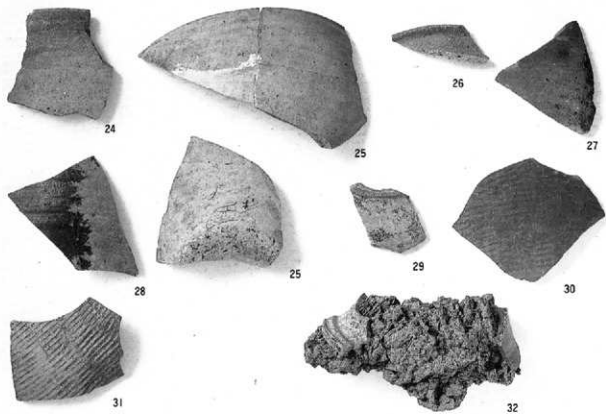
22



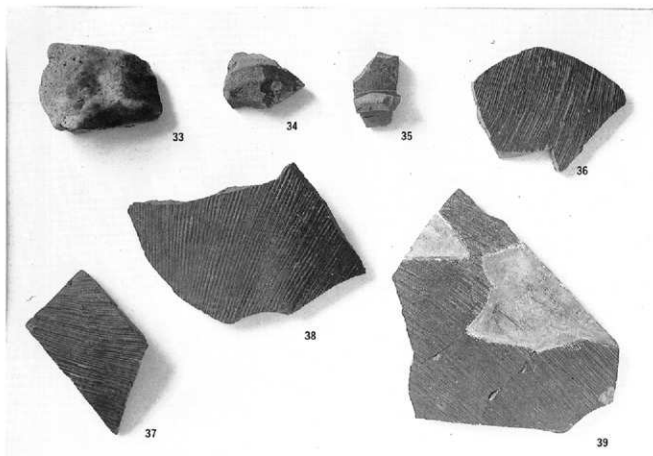
23

須惠器 (3)









---

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第30集

とみぞね  
富沢 I 遺跡発掘調査報告書

1996年3月15日 発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター  
〒999-31 山形県上市市弁天二丁目15番1号  
電話 0236-72-5301  
印刷 山形印刷株式会社

---

